

第1回 茅ヶ崎市市民活動推進委員会 会議録

議題	(1) 平成30年度実施市民活動げんき基金補助事業 実施報告会 (2) 平成30年度実施協働推進事業 実施報告会
日時	令和元年5月25日(土) 10時00分から17時15分
場所	市役所本庁舎4階会議室2～5
出席者氏名	草野正弘 椎野典子 秦野拓也 北川哲也 高橋準 治 石田貴一 伊藤隆 岩壁榮 大江守之 中川久 美子 水島修一 事務局5名(市民自治推進課) 富田課長 小西課長補佐 遠藤副主査 柿澤主事 勝山主事
欠席者	西野義一 森祐一郎
会議の公開・非公開	公開
傍聴者数	延べ56名

(市民活動げんき基金補助事業実施報告会)

○事務局

皆さま、おはようございます。本日は、お忙しい中お越しいただきまして、誠にありがとうございます。ただいまより、「平成30年度実施 市民活動げんき基金補助事業実施報告会」を開会いたします。本日の司会進行を務めます市民自治推進課の勝山と申します。よろしくお願いいたします。

はじめに、市民活動推進委員会の大江守之委員長よりご挨拶を申し上げるとともに、各委員をご紹介します。

○大江委員長

皆さま、こんにちは。ただいま、ご紹介にあずかりました市民活動推進委員会委員長の大江でございます。委員を代表いたしまして、一言ご挨拶申し上げます。

茅ヶ崎市が行う市民活動団体への支援事業は主に2つで、本日午前に報告のある「市民活動げんき基金補助事業」と、本日午後に報告のある「協働推進事業」となっております。

午前中にご報告いただく「市民活動げんき基金補助事業」は、市民活動を推進するための環境を整備し、市民活動の活性化を図ることにより、活力あふれる地域社会の実現を目指すことを目的として、平成17年度から実施している事業でございます。今年度の報告事業を合わせますと、これまで140もの事業に財政的支援をしてまいりました。

本日は、平成30年度に市民活動げんき基金から補助を受けた7団体の皆さんに、事業の成果をご報告いただきます。報告にあたりましては、実際の活動状況や今後の活動の発展に向けた意気込みなども織り交ぜながら、限られた時間の中ではございますが、会場の皆さまにも分かりやすくご説明いただきたいと思います。

我々市民活動推進委員は、事前にいただいた実績報告書や事業に関する資料と、皆さまからの発表を受けて、今後の活動の発展に向けてお役に立てるよう、また市民活動を推進する立場から、質問やコメントをさせていただきます。よろしくお願いいたします。

引き続き、市民活動推進委員をご紹介します。

草野（くさの） 委員でございます

椎野（しいの） 委員でございます

秦野（はだの） 委員でございます

北川（きたがわ） 委員でございます

高橋（たかはし） 委員でございます

石田（いしだ） 委員でございます

伊藤（いとう） 委員でございます

岩壁（いわかべ） 委員でございます

中 川（なかがわ）副委員長でございます

水 島（みずしま）委員でございます

本日は以上11名の委員で、実施報告会を進めてまいります。なお、市ホームページには本日の会議録を掲載しますが、議事録の署名については秦野委員にお願いします。よろしくお願い致します。

ありがとうございました。

○事務局

それでは、本日の実施報告会の流れについて、簡単にご説明申し上げます。冊子の1ページをご覧ください。本日、これから12時30分ごろまでのお時間で、平成30年度に実施した市民活動げんき基金補助事業7事業について、実施報告をしていただきます。お配りしております黄色い表紙の冊子の1ページをご覧ください。前半にスタート支援事業4事業、後半にステップアップ支援3事業、合わせて7事業の報告を予定しております。

それぞれの事業について、最初に、事業実施団体より10分程度で報告をしていただきます。報告の時間管理について申し上げます。開始から半分の5分を経過したところで、1度ベルを鳴らします。

（ベルを1回鳴らす）

次に、終了1分前に、再度、ベルを鳴らします。

（ベルを1回鳴らす）

予定時間の10分を経過したところで、2度ベルを鳴らします。

（ベルを2回鳴らす）

報告者の方は、2度ベルがなりましたら、途中であっても速やかに報告を終了してください。1年間の成果を10分でまとめることは大変なこととは思いますが、円滑な進行にご協力いただきますようお願いいたします。

報告が終わりましたら、市民活動推進委員会委員からの質問やアドバイスなどを行います。こちらは6分以内を予定しています。質疑応答の途中で、ベルが鳴りましたら、その質疑を最後の質疑とさせていただきます。質問される委員及び回答なさる団体の皆さまには、1問ずつ、できるだけ簡潔なやりとりをお願いしたいと思います。

また、報告会を円滑に進行するため、次に発表される団体の方は、前の団体の報告中に、前で待機していただきますようお願いいたします。職員がご案内いたします。

全7事業の報告・質疑応答が終了した後、総括質疑として、全体での意見交換の時間を設けておりますので、各団体の皆さまは、ご自身の報告が終了した後も、ご退出なされないようお願い申し上げます。実施報告会の終了は、12時45分ごろを予定しております。

なお、報告会の様子は、写真撮影をし、市ホームページや広報紙等に活用させていただく場合がございます。予めご了承くださいませよう、お願いいたします。

最後になりますが、この補助金は、「市民活動げんき基金」を原資とする補助金です。「市民活動げんき基金」は、市民の皆さまからのご寄附と、その同額を茅ヶ崎市が積立て、成り立っております。冊子5ページから8ページにかけて、ご寄附いただいた方々を記載しているほか、冊子背表紙をご覧くださいますと、茅ヶ崎市体育館に設置された「湘南ヤクルト販売(株)様」の自動販売機、及び、小和田公民館、鶴嶺東コミセンに設置された「ダイドードリンコ(株)」様の自動販売機の売上げの一部を、このげんき基金に寄附いただいています。

皆さまからのご寄附がなければ、この補助金はいずれなくなってしまいます。本日は会場内に、市民活動げんき基金の募金箱を用意しております。ご来場の皆さまにおかれましては、制度の趣旨をご理解いただき、どうかご協力いただければ幸いです。

それでは、平成30年度市民活動げんき基金補助事業の実施報告を開始いたします。つつじ公園「ブーゲンビレアひととき(人と木)プロジェクト」、(ツインウェイヴ北口ガーデンクラブ様からの実施報告でございます。準備はよろしいでしょうか。それではよろしく願いいたします。

○宇田川(ツインウェイヴ北口ガーデンクラブ)

ブーゲンビレアひととき(人と木)事業で助成いただきました、ツインウェイヴ北口ガーデンクラブの宇田川です。

私たちTKGの事業というのは、主に3つのカテゴリーに分かれていまして、公園の再活用であるとか、生物多様性を地域からどうアプローチするかというパークマネジメント事業、そして、それを実施して、共助の地域の力に落とすコミュニティパーク事業、それをさらに未来につなげる子どもパーク事業という3つのカテゴリーに分けております。

今回いただきました「ブーゲンビレアひととき(人と木)事業」は、パークマネジメントの部分で、インフラともなる空間の創出、そしてさらに、その空間をソフトに落とす取り組みというふうに考えております。将来的にはこれを子どもたちとともに次世代育成につなげたいというふうに考えています。

では、マネジメント部分からまずはご報告させていただくんですが、「大成功です」と言いたいところですが、皆様のご記憶に残るとおり、2018年、非常に猛暑。35度以上が続きまして、生産者のハウスも40度を超す連日、毎日、そんな調子だったそうです。その中で2カ月遅れでの設置工事となりました。

こちらは、設置工事の様態です。ちょっとこれをご覧くださいたいんですが、インターロッキングというこれを外した後、公園内は、いきなり砂地で、茅ヶ崎市の地の砂が出てきてしまうんですね。

到着後、一度ほどいて誘引という作業をしまして、仕立て直したのがこちらです。非常に美しく、皆さんからもご覧いただけたりしました。

8月、ブーゲンビレアは年2回、5月と11月に咲くものですから、8月、9月とだ

んだん花が落ちてきます。そして、10月、一回緑になって、その後、花がつくはずなんです。

ところがです。記憶に残る10月、11月の台風で、つつじ公園はこんなふうに関こそぎいろんなものが倒されてしまったんです。ブーゲンビレアはどうなったか。こんな状態でした。これを、じゃ、どうするか。市民活動げんき基金、そうですね、敗者復活こそが市民活動かな。市役所とそこは違うところですよ。私たち、一生懸命まず解析することから始めました。

この回答を持っていたのは、これまで大学と連携していたのですが、大学ではなくて農家だったんです。実はこれ、まず1つ、塩害です。台風とか長雨の天候というよりも、むしろ塩が残ったこと。それから、先ほどご覧いただいたインターロッキングの砂地というのが、反射熱で、日中60度、80度ぐらいまで上がってしまうんです。なおかつ、設置した鉢のところから風が吹かないので、保水機能がない上に冷却することが不可能だということが原因だというのが見えてまいりました。

じゃ、どうするか。まず強剪定。これは植物にとっては手術です。強剪定を行いまして、日陰で鉢を休めました。そして、それをスタンドを設置しまして、その下を風が吹く状態にしました。現在、底面給水という鉢の状態をつくりまして、今、ちょっとこんな花が上がってきた状態です。

底面給水、聞いたことがないなという方もいらっしゃるかと思うんですが、シクラメンやイチゴのときによく使うもので、毛細血管現象の水の力を利用して、紐や何かで水を植物自身が吸い上げるという仕組みなんです。

ただ、もともとブーゲンビレアはこれに向かないんです。向かないんですが、じゃ、向くのかどうかということをお休みさせていただいて、その間、代わりになる、水を吸い上げる植物で実験をしてから、落ち着いたところに再設置というふうに考えています。

後ほど、もしよかったらご覧いただきたいんですが、この底面給水に関しても、その中の土に保水効果を与えるセルロースの、要はおむつの中に入っている成分を用いたんですが、全てこれらは農家からのヒントをいただいております。確かに失敗だったのかもしれない。それからまた、今、挑戦中でもある。一番大きかったのが、まちなかに花をいっぱいにしようということについて、相談に乗ってくれ、農家にまでネットワークが広がったこと、これは私の中では希望が見えたなというふうに思いまして、来年度は、まちなか花遍路、わくわくするプランでありたいと思っています。

続きまして、コミュニティパークの部分なんですが、2017年度まで全く利用がなかったというだけでなく、市民や若者が、飲酒、喫煙、嬌声、不法投棄、花火などがあることがわかっていたんです。このブーゲンビレアを設置したことで、みごとにこれが風景が変わりました。9時半から5時まで、親子、学生、高齢者、社会人が集いまして、ブーゲンビレアの塩害後も利用は定着しております。

時間帯が変化しただけでなく、利用時間帯のその時間自体がふえたんです。これま

では、暑いな、ちょっと疲れたといって、5分座ればいいほうであったところが、ここに集まって、ここで何かをするというふうになって変わってまいりました。

右側は、夏休み中の小学生、中学生、多世代の集いです。左側は、梅田中学の卒業生が、ここで卒業前に集合してお互いに話し合うという場面です。

こちら、非常にありがたいなと思ったのですが、出会いの場です。おばあちゃん世代とお母さん世代が会って、子育てについて話し合っ、大体、この方たち、5時間いらっしました。

そして、こちらはもっと感動なのが高校生。この子たち、何度かこのバーゴラに来まして、卒業後の進路が見えないという話をしていました。それに地域が相談に乗りました。「就職が決まったよ、自分の第一志望の料亭になったんだよ」と報告に来た写真です。

ご覧いただきまして、ブーゲンビレアのバーゴラ、花があるということが、実は公園の中にドラマを生んでいます。まちの中にストーリーをつくるということ、これはすばらしいというふうに思っております。来年度はこれを、わくわくするような花と緑のにぎわい創出に向けたいと思っています。

最後に、読書会のほうです。チラシ2種、ポストインのほか、子ども会の協力を得まして、梅田学区には全戸周知することができました。ひととき（人と木）空間で集合し、どんなふうにするの？というの、皆さんがつくってくれました。好きな本を持ち寄ってブックトークをしていったのではありますが、猛暑のため、涼しい場所で実施させていただいています。

驚いたことに、1冊の本に載せるものですから、市外からの転入者、住まい直しでお友達をつくりたいという高齢者であったにもかかわらず、どうやったら第2の人生を生きられるんだろう。子育てが終わって、娘とどんな関係をつくったらいいんだろうと、そんなふうな深い話がありました。ですので、これをこのままにせず、LINEのグループをつくり、緩い交流ネットワークとして、またこの結果を読書会のしおりとして、参加者、そしてご興味のある方に配布しております。

3つ目の成果。これは、想定外でした。実は、参加者の方が公園の中で事故を起こしたんです。インターロッキングは老朽化でもってデコボコしていた。それにつまづいて病院に運ぶということがありました。それを受けまして、地域の住民が、実はこちらの子もね、うちのおばあちゃんも、というふうに声が集まりまして、早速それを公園課に届けたところ、これまでにない迅速ぶりで、すぐに対応していただきました。これからもみんなでこうやって公園を守ろうねというふうに、そのときに地域とも話していたんですが、そういう例というのは今までないんだそうです。インフラのもの、ソフトとハード、両方、市民と、そして市役所とで守ろうということは、これは大きな希望かなと思っています。継続したいと思います。

最後に、げんき基金をいただいたからには、市民参加、市民層に対してどうそれがアクションできるのかという部分なんです、がっくりくるような感じで、要らない本をも

って交換するのが読書会じゃなかったの？というようなことがありました。じゃ、茅ヶ崎をどうするの？それをみんなで徹底的に話し合いました。例外である読書会、茅ヶ崎はとにかく継続できないんだ、2回目がないんだと言われているそうなんです。例外である城山三郎さんの会も、今期で組織解体と聞いていまして、東京本部が主催して開催地として設定してもうまくいかない。じゃ、うまくいっているところはどうかのというと、ビジネスラインで朝活という形なんです。じゃ、私たち、楽しかったのは何？そこでもう一度振り返りました。

掘り出し物のうきうきする話、それから、ここが好きなのという楽しい話、お茶を飲みながら緩くと、私たちが楽しかった読書会はこんなスタイルです。

プロジェクトの目標を、来年度は、ミーティング・フォー・アクション・トゥー・ザ・フューチャーと決めました。地方自治体の文化水準、実は図書館レベルで決まるのだそうです。茅ヶ崎市の継続できないということも含めて、仲間とともに考える。そしてそこから未来に向けて、新たな市民参加の形、人材を発掘する、それを心がけたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。（拍手）

○事務局

ありがとうございました。それでは、質疑応答に入ります。大江委員長、よろしくお願いたします。

○大江委員長

では、どうぞご質問のある方。

○水島委員

ありがとうございました。私、職場が近いものですから、時々昼休みに散歩に行つて、ゴールデンウィーク前後にも行つて、なんかあまり木の状態がよくないなと思ひながら、葉がなくて、トゲが目立っていたような状態だったものですから、その原因はわかったんですが、花がいっぱいで、将来的に木陰ができるような場所になるといいなと思ひながら、それは変わらず思ひしております。

工夫なんです、例えば、今みたいな大きな処置をして水あげとかをやるんですが、塩害とか、報告書にいろいろ書かれているんですが、それ以外に木を育てていくというところで、この1年間を過ごして、これからの何か工夫みたいなものがもしあったら教えていただきたいんですが。

○宇田川（ツインウェイヴ北口ガーデンクラブ）

まだ暗中模索なんです、実は暗中模索は私だけではありませんで、プロフェッショナルな、今回この処置を決めたのは、農林水産省の技術局のデータを持っていたんです。

異常気象です。しかも、それが地球温暖化によるもので、従来までの3度以上を、今期も、ことしの夏も皆さん35度を超えますからね。それだけではなく、エルニーニョという気候帯が日本の中を2つに分断している状態だそうなんです。ですので、方法としては、私たちは市民団体ですから、農家のような機器や重機は入れられない。公園ですので、農家さんと連携していくこと、生産者さんと共に歩むこと、これがもしかしたら茅ヶ崎市全体に広がればいいのか。もちろん花を選ぶことも必要でしょうけど、そのぐらいのところまでしかまだ回答が出せません。

○大江委員長

伊藤さん。

○伊藤委員

どうもありがとうございました。冒頭の報告で、ブーゲンビレアが育たなかった。その原因はインターロックが、地表温度が55度ですか。大変ショッキングで、私は南のほうに住んでいますけれども、やはり塩害がひどくて、エアコンも壊れました。半導体がやられました。

そもそもインターロックというものがいいかどうか。公園というのは、人間社会と自然との妥協の産物だと思うんですが、土に戻さないと、どうやっても自然の生態系を維持することは難しいんじゃないでしょうか。掘り起こしたほうがいいんじゃないかと思うんですが、いかがでしょうか。

○宇田川（ツインウェイ北口ガーデンクラブ）

非常に深いお話で、真に迫るものなんです。私たちは管理者として茅ヶ崎市からお借りしている状態で、それらの権利は所有者である表面管理者の茅ヶ崎市の決定となるんです。ただ、インターロックを選ぶのがいいかどうかというのは、市民全部が考えなきゃいけないことだと思うんです。インターロック、もともとはバリアフリーをうたったはずのものです。また、管理が楽。雑草が生えないね、ということのはずなんです。ところが、この2年半、私ども、外来種を徹底的に抜くということを、公園課だけでなく、環境保全課、景観みどり課とともに、日大と一緒に生態系を調べながらやっているんです。環境保全の団体はたくさんあるんですが、環境破壊されたものを戻した団体はないんですね。で、やってみよう。その結果、やっぱり土のほうがいいんです。子どものためにもそのほうがいいんです。じゃ、困るのは誰なんだろう。管理する人じゃないですかね。おそらく。そこは本当に何がいいの？ということ、市と市民が連携して考えられる世の中になるように育ったらいいなと思います。

○伊藤委員

どうもありがとうございました。プロジェクトの一環として、市民の声をまとめていく、ちょうどいいポジションにあると思いますので、そういったことを市あるいは市民に提言していくということを今後お考えになっていただけたらと思います。

○大江委員長

それでは、もう一方。北川さん。

○北川委員

すばらしいプレゼンありがとうございました。1点質問がありまして、先ほど、中学生ですか、利用者が全くいなかったのが、ふえましたというところで、その方々が来られた理由をヒアリングはされていますでしょうか。

○宇田川（ツインウェイヴ北口ガーデンクラブ）

聞ける場合と聞けない場合とあるんですけども、ことしに入ってから、SNSやうわさ、口コミですかね。花が多いとか、外国みたいな公園といううわさで来られる方もいるんですが、口コミで、要は、例えば、PTAの花壇ボランティア、それをしたいんだけど、どうやれば、少ない人数で、しかも少ない回数でできるのかといったようなことで、昨年1年だけで12件以上、地域組織、そして、県からの視察も2回ありまして、ほかの地方自治体の視察というのもあります。

なので、口コミということと、あと、SNS。私たち、広報活動は本当に薄くて手が回らなかったんですけども、高校生たちが手伝ってくれて、その上で、撮ってどんどん回してくれているみたいなんですね。この中学生の子たちというのも、お母さんからのSNSで聞いてくる。だから、SNSが多世代なんです。それを撮るためだけに来て、ご夫婦でここで待ち合わせをして、花の写真と虫の写真を撮るという方がいらして、ちょっとおもしろい形だなと思って見ているんです。SNSというのはそんなに多用するほうではないんですけども、どうもSNSが根底なのかなというふうに思っています。あとは、私がPTAをしていたので、PTAのときのお母様方、少年団のお母様方、地域の民生委員の方々からのご紹介というのが多いです。

○大江委員長

ありがとうございました。時間がきてしまいましたので、以上で終了とさせていただきます。どうもありがとうございました。（拍手）

○事務局

ツインウェイヴ北口ガーデンクラブ様、ありがとうございました。

それでは、続きまして、C.C.C. THEATER様。「こども演劇ワークショップー演劇は人を

育てるー」事業のご報告をいただきます。ご準備よろしくお願ひいたします。

それではよろしくお願ひいたします。

○内田 (C. C. C. THEATER)

役者なので、地声でいかせていただきます。よろしくお願ひします。(拍手) 私たちは茅ヶ崎の子どもたちのための劇団をやっています、C. C. C. THEATERと申します。代表の内田亮と申します。

今回、事業は、私たちは、子どもたちに見せる観劇と、あと、子どもたちが参加するワークショップを実施しました。最初にC. C. C.の説明を簡単にさせていただきます。

パフォーマンスアート、芸術活動の可能性ですね。子どもたちが主体的に考え、イメージする想像、そして、つくる創造、そしてそれを演じる経験、この3つを繰り返し、三角形で回しながら、子どもたちに未来を生きる力というのをつけてほしいという活動をしています。

パフォーマンスアート、芸術表現活動を通じて、今を生きる子どもたちが未来を生きる力を身につける。未来を生きる力というのは大きいんですけども、子どもたちに、自信を持って、そして、多くの選択肢の中から自ら自主的に主体的に考えて、そして選択する力を持ってほしいという活動をしています。

事業背景なんですけど、私は、ずっと1つの小学校、今宿小学校で演劇クラブをボランティアで8年間活動してきました。そこで、子どもたちがチャレンジしようとする気持ちだったり、緊張を楽しみ、自己表現が自然に、そして手を挙げる勇気、180度人生が変わった。小学生が180度人生が変わったというのはすごいことなんですけれども、そこで子どもたちが前向きに変化して行って、芸術活動の力を多くの子どもたちに届けたい。ここから、小学校と、プラス、ここから外に活動を広げていきたいというので事業が始まりました。

今回の事業、観ること、演劇鑑賞、そして表現すること、演劇ワークショップを経験してもらって、他者への思いやり、そして多様性を受け入れる、自己表現をする楽しさを身につけてほしいと思ってやりました。

鑑賞なんですけど、『小さな家』というcompany-maとWAWACINEMA、こちらは2つとも、company-maのメンバーが茅ヶ崎の出身、そしてWAWACINEMA、知っている方もいるかもしれないんですけども、茅ヶ崎の茅ヶ崎映画祭、ポータブル、野外で映画をやるイベントなどをやっている茅ヶ崎出身のメンバーが集まって、作品をつくり、場所は、予定では、茅ヶ崎の旧本社のホールでやる予定だったんですけども、その場所がとれなかったんで、ルアンホールを借りて、作品を観てもらいました。

これは、実施の結果になります。第1の公演が64人、そして第2の公演、2回目の公演が71人ですね。大人のほうが多いんですけども、親子で来ていたり、お父さんとお母さんと子ども1人とか。あと、これは未就学児は入れていないんですけども、たくさん

未就学児が来てくれました。僕は茅ヶ崎以外でも、海外とか、あと、日本の各地でフェスに参加したり、公演をやっているんですけども、この数字、子どもが少ないじゃんというふうに思うかもしれないんですけども、実際、いろんなフェスに参加すると、大体が大人なんです。この数の子どもが集まることはとても珍しいことなんです。

この子どもたち、21人、25人といいますけど、親子で来ていない子もいっぱいいます。今回、子どもの料金を500円というすごい安い設定をさせていただきました。その目的としては、子どもたちが、自分のお小遣いかもしれないですけども、親御さんからワンコインをもらって、自分の自転車、またはバスに乗って観に来る。こういうことが地元ではできるという活動を広めていきたいというので、低価格、安い設定でやらせていただきました。なので、500円を持って、見せてくださいというふうに来た子どもたちがこの中にたくさんいます。

そして、次の日に、鑑賞した後に子どもたちと一緒にワークショップを実施しました。company-maの森山蓉子さんに講師になっていただき、私だったり、もう一人がアシスタントに入りました。

ワークショップ内容は演劇なんですけども、お芝居を思い切りやるというよりは、演劇遊びですね。演劇のツールを使って遊びを通じて、自然と自己表現ができる、または友達とグループワークができるという活動をしています。

あともう一つは、森山蓉子さんはミュージカルでも活躍しているので、ダンスだったり。でも、ダンスをやったことのない子が、子どもが自然と動く動きを、インスピレーションを受けて、彼女が少し振りにして、子どもたちは自分の考えた振りがダンスになっていくということを経験しました。

参加人数なんですけど、小学生、中学生、高校生。そして、これは対象は小学生以上でやったんですけど、小学生の、また中学生の妹さん、弟さんが来て、指をくわえて、僕もやりたいんだけどなあという顔をしていたので、急遽参加しようというので、2人の未就学児の子が参加しました。

この子たちが一緒に遊び、またはダンスを通じて初めて会った子たちが、いつの間にか最後には友達になって、終わった後も、柳島でやったんですけども、あの白いバウンバウンするところに行って一緒に遊んでいた。それで、後から聞いた話ですけど、茅ヶ崎に住んでいるので、会うんですね。または、そこでこの小学生が中学校に上がったときに、もう既に知り合いがいるという、いつの間にか地域の関係性ができていることができました。

これは収支報告になります。

いろいろな感想をいただいたんですけど、今回、自己負担金が6万円以上と多かったんですけど、予定より人数が集められない部分もありました。ですが、そこから3月にC.C.C.の自主公演をこのホールでやらせてもらったんですけど、そのときには、『小さな家』を観た子どもたち、または、それに一緒に来た親御さんたちがたくさんの人を連れ

てきていただいて、350人の茅ヶ崎の人たちが集まって観劇をしてくれました。

今回、この事業をやって発見したのが、たくさん未就学児。未就学児というのは、6歳以下の子。赤ちゃんの子たちも観に来てくれました。そして、その人たちから、そういう子たちのための作品というのではないんですか、ぜひやってほしいですというふうに言われて、今年度の事業としては、3月に未就学児に特化したフェスティバルを開催しようと思っています。そこで、小さな子どもたちが、そして大人たちが、リラックスして、演劇、アートに触れられる機会を設けたいと思っています。

これでC.C.C.の報告は終わりになります。ありがとうございました。（拍手）

○事務局

ありがとうございました。それでは、質疑応答に移ります。大江委員長、よろしくお願いたします。

○大江委員長

それでは、どうぞ。それでは、まず岩壁さんから。

○岩壁委員

どうもありがとうございました。大変魅力的なプログラム内容でよかったなというふうな感じがいたします。当初の計画よりだいぶ参加者もふえているようですよね。それで、広報にいろいろ工夫をこらしていたようですが、その参加者は、どんなことで知って参加したかどうか、調べましたでしょうか。その辺をお聞きしたいです。

○内田（C.C.C. THEATER）

1つはSNSを通じて。または、うちのC.C.C.に通っている子どもたちの親御さんを通じて。もう一つは、チラシをいろんなところに置かせてもらったんですが、それを見てというふうな方法で知って参加してくれました。

○岩壁委員

そうしますと、いろいろな広報の媒体を通じて、参加者はそれぞれということでしょうか。

○内田（C.C.C. THEATER）

そうですね。1つとしては、今、SNSでバツと広がることは広がるんですけど、情報としてはただの一つになってしまって、ただスクロールして終わってしまう。それも1つとして使って、もう一つは、ちゃんと会いに行行って説明をさせてもらって、そして知ってもらおうというふうな、いろんな目につく、耳にする機会をより多くする機会をやろうと

思って事業をしました。

○岩壁委員

ありがとうございました。

○大江委員長

椎野さん、どうぞ。

○椎野委員

ありがとうございました。とても素敵な事業をなさっているということがよくわかりましたけれども、この事業は、未来をゆっくり使うということで、非常に魅力的ですよ。今までおやりになっていて、子どもたちがワークショップの中で遊びを通して自己表現ができるようになったよという形で、いろいろ段階を追いながら成長している様子がよくわかります。

先ほどのご説明の中に、中学校になったときに、いろんな学校とのつながりというか、そういうものもできてきて、生まれてきたという現実があるというのがいいなと思ったんですけども、それだけ自己表現とか、いろいろな地域とのつながりとかということで子どもたちが精神的に成長している中、将来的にはそういうことをやった子どもたちが、中学ではそういうのがありますが、将来的にどのように成長していったらいいのかなということをお考えかということと、これは、先ほどの話の中では、乳幼児の未就学とか、そういう子どもたちにもそういうものを見せてほしいというのがあるということで、おやりになるということですが、そういうものを積み重ねて、将来像、自分たちが育てた子どもたちが将来どうなってほしい、どういうのに続けてつなげていきたいのかという、何かそういう将来像はございますか。

○内田 (C. C. C. THEATER)

具体的にわかりやすい例で言いますと、プレゼン能力という部分があります。イギリスだったり、アメリカだったりでは、演劇、ドラマ教育というのが公立の小学校、中学校にドラマ教員として常勤で入っているんですね。そこで演劇教育、演劇を通して、プレゼン能力だったり、コミュニケーション能力を高めていくという活動をしています。今の子どもたちに、人前で何かを表現する、特に小学校では、あまり機会がないんですね。みんな団体で、クラスで誰かが発表するという機会はあるんですけど、一個人、1人が人前に、大勢の前、クラスの前、全校生徒の前で発表するという機会がとても少ない。演劇を通して、演劇というのはパフォーマンスなので、人前で何かを表現する楽しさだったり、また、それを経験する場所を与えてあげる。そこでそういうことをする楽しみだったり、人の前で何かをすることの楽しみということを学んでほしいなというふうに思っています。

○椎野委員

ありがとうございます。

○大江委員長

ほかにはいらっしゃいますでしょうか。どうぞ、草野さん。

○草野委員

元気なプレゼン、ありがとうございます。意気込みとすばらしいものが伝わってきました。その中で、先ほどもありましたけれども、広報の部分ですね。広報の部分、通常はSNSなり、チラシなりを配るといっただけなんですけれども、そうじゃなくて、警察署の許可まで得て、大道具まで持ち込んでやるんだよと。すごい工夫がされているということで、すごく感動しました。許可を取るというのは結構大変だったと思うんですけれども、これからもチラシとSNSだけじゃなく、そういう工夫がさらにあると伸びると思いますので、頑張ってください。

○内田（NPO法人3F Community Service）

ありがとうございます。

○大江委員長

もうお一方ぐらいいけますが、いかがでしょうか。それでは高橋さん。

○高橋委員

あまり時間がないので簡単に。ありがとうございました。

先ほど、最後の部分、未就学児を対象にしたフェスティバルの企画ということなんですけれども、こういった演劇を観ることとか表現することというのが、子どもの成長とか豊かな感性をはぐくむという点では、自分はすごく大事なことだというふうに思っていて、とてもいいことだと思っているんですね。未就学児を対象にしてどういうふうにフェスをやられるのかという、そういった具体的なものをもし考えているのであれば、お聞かせ願いたいと思います。

○内田（C.C.C. THEATER）

未就学児、特に0カ月から1歳半までの子たちに特化した作品を呼ぼうと思っています。児童演劇の世界を僕はやっているんですけれども、児童演劇はとても年齢をカテゴライズしてしまっていて、0歳から1歳半までの子たちの作品というのは、物語がないんです。なので、どちらかというとダンスだったり、あとは、今「多感覚演劇」と言われていまし

て、それは、普通だと舞台があって、お客さんが座って観ている。のではなくて、一つの空間の中に役者が自由に動けるんです。そこで赤ちゃんたちが自由に座って、自由に観る。そこにある、例えば、オブジェクト、物だったりを触ってもいいし、音楽を聴いてもいいし、その表現者を観てもいい。というような、目と耳と、あとは手ですね。そこで、実生活では経験できない感覚を小さな子どもたちに経験してもらって、脳科学的に言うと、それはとてもいい刺激になるというふうに言われています。もう少し大きい子たちは、物語がわかるので、物語を見せて、多様性、いろいろな考え方を観てほしいですね。そこに出てくるキャラクターたちを自分と、または自分のお友達とつなげて、「ああ、僕だったらあんな言い方しないのに」とか「なんでそんなことやるんだよ、あいつ」とかということをして自分がそれを観て、もし同じような状況になったときに、自分がどういう行動に移せられるというような、観て何かを学ぶというようなことをやろうと思っています。作品を見せたいな。

もう一つは、お母さんたちがリラックスできる場所を与えたいなど。そこに助産師さんだったりを呼んでアドバイスをもらったり、大人も一緒に楽しめる、大人も子どもに戻れるようなフェスティバルを開催したいと思っています。

○大江委員長

では、時間がまいりました。どうもありがとうございました。（拍手）。

○事務局

C.C.C. THEATERの皆様、ありがとうございました。

それでは、続きまして、「バリアフリーファッションショー」事業について、Hearts（ハーツ）様からの実施報告をいただきます。ご準備のほどよろしく願いいたします。それではよろしく願いいたします。

○廣田（Hearts（ハーツ））

昨年度の市民活動げんき基金でのバリアフリーフェスティバルについてご報告をさせていただきますと思います。

昨年に関しては、バリアフリーフェスティバルという形で、今までもたくさん資料を見ていただいたんですけども、結果的に「美容を通して全ての人を笑顔に」というところがテーマでスタートした事業であったんですが、本当にたくさんの方に集まっていたいて大成功できたかなと思います。ボランティアの方が50名程度。出演者だたりを含めると100人程度の方々が出演側として参加していただきましたし、お客様も250名程度来てくれたので、ここの1階のところを会場として使わせていただいたんですけども、本当に満席状態という形でやることができました。

すごくいい写真も撮れたし、来てくれた方々、出演してくれた方々もお客さんも、本

当にみんな笑顔で終わることができてよかったなと思ったんですけども、そこに至るまでは、かなりたくさん壁というか、いろいろなことがありまして、1つは、8月に開催したイベントだったので、どうしても温度管理、かなり厳しく。あそこの会場に400名程度の人が集まるということで、すごく温度が上がったんですね。障害があるお子さんで体温調節ができない子も何人かいるということだったので、急遽、参加して下さったボランティアの方だったり手伝ってもらって、大型の扇風機を体育館からお借りして用意したりとか、そういう形で対応させてもらったんですけども、それは僕自身の準備不足というか、そこが足りなかったかなというふうに反省しております。その辺を含めて、ことしては改善していきたいなと考えてはいます。

チラシに関してもそうなんですけれども、左側がバリアフリーフェスティバルのチラシと、右側が急遽途中から開催することにした「生きるを伝える写真展」のチラシになります。これも同時開催という形で「生きるを伝える写真展」は10日間ぐらい期間を設けて、1階に展示させていただいたんですけども、それもすごくたくさん反響があってよかったかなと思っております。

メディアだったりとかもたくさん乗せていただいて、これはNHKの『ひるまえほっと』かな、で告知をさせていただいたりとか、あとはラジオだったり、いろんなところでも告知をさせていただきました。

当日の風景としてはこんな感じで、本当にたくさんの人と、この風船に関して、どうしても僕は、写真映えする会場にしたいなというこだわりがあったので、風船を500個用意してつくったんですけども、2日前から市役所に入れていただいて、壁を建てて、そこに風船を吊るしたんですけど、当日朝行ったら落ちていたというトラブルがあり、朝、たくさんの人に手伝ってもらって、急遽、風船をシールで貼るところから、紐で吊るすという形に変更したんですね。それに関して、何となく事前に落ちそうだなという予感がしたので、みんなにお願いして時間を調整していただいて、朝早く来てもらって完成することができたということもあるので、この辺は実際に経験してみないとわからないことかなということで、すごくいい経験になりました。

「生きるを伝える写真展」に関して、本当にたくさんの方に来ていただいて、脱毛症だったりとか、乳がんサイバパーの女性の方々が、なかなかこういった写真に出会うことがないということであったりとか、当事者同士の交流が持てる場があったというのは、すごくよかったかなと思います。

僕が1つ掲げている目標としては、美容師さんだったりとか、ヘアメイクさんも福祉に対してたくさん見解を持ってほしいということで参加してもらったんですけども、今回参加してくれた5名のヘアメイクさんに関して、僕のこのイベントを通してではあると思うんですけども、その後も障害の方の交流があったりとか、そういったイベントでの仕事がふえたということも聞いているので、すごくいいきっかけになったかなというふうに思っていますし、「ことしもやらないの？」という形で声をかけてくれるので、彼ら

にとってもこういったイベントとの関わりというのはすごくよかったのかなと思います。

この子が僕の中ではすごく印象的だったんですけども、白血病の当事者で、闘病しながら戦ってきて、いざバリアフリーフェスティバルに出るとなったときに、一応、通院生活が終わったから来れるという形で来てくれたんですけども、わざわざ関西から来てくれたんですね。その理由としては、人前で歌うことが好きというところ。ただ、これだけたくさんの方の前で歌うということにはなかったもので、すごく緊張はしていたんですけども、そういった特徴と、あとはサザンオールスターズが大好きということで、歌いに来てくれました。彼の親も福祉に対してすごく意欲的なので、そういったこともあるからだとは思いますが、実際に彼が今回のこのイベントに参加して、多分すごく大きな変化があったのかなというところで、1つ動画をお見せしたいと思います。

(動画)

岡山ガスということなんですけれども、このCMを歌っているのは彼なんです。こうやって人前で歌うというのをきっかけにして、多分楽しみというか、歌を歌うことの喜びみたいなものを感じたんだと思います。こういうバリフェスに関してもみんなでいろいろ出させていただいたので、たくさんの方に観ていただいたのかなというふうに思うと、そこから派生した可能性もなくはないなというふうに思ったので、本当にいろんな人たちの今後の可能性につながるイベントになったのかなというのが、一つわかりやすく結果に出ました。

あとは、文教大学の学生たちとの交流もすごく今回よかったんですが、バリフェスに関しても準備をしていただきましたし、その後、文教大学の学園祭「聳塔祭」でも同じような形でファッションショーをやりました。そこに関しては、ボランティアの子たち10名程度と、あとは学生モデルとして参加してもらったんですけども、学生モデルで参加してくれた子たちは、特にボランティアとか、福祉に興味があったわけではないんですが、このイベントを通してすごく興味を持って、これから社会に出る方たちがたくさんいたんですけども、社会に出たときにすごくこの経験を生かした、接客だったり、社会人としての振る舞いができるというふうに聞いております。結果的には、学長賞をいただいたりとか、たくさんメディアにも取り上げていただきました。

ことしに関しては、去年参加してくれた人たちはほとんど3年生、4年生ということで、大半がいなくなってしまう。去年経験した人は1人しか残らないですが、今、既に15名の1年生が集まってきているということで、今後も継続して文教大学とは一緒に作り上げていくことができるかなというふうに思っているのと、国際学部の先生がすごく興味を持ってくれていて、ことしのバリアフリーフェスティバルに関しては、ボランティアで参加した人に課外授業的な単位といいますか、僕はその表現がよくわからないですけども、単位が与えられるような形になっているので、学生たちにとっても、ただのボランティアだけではなくて、本当にやる意義があることにつながったのかなというふうに思います。

SNSでもたくさん発信させてもらって、多くの方に見ていただきました。これもムービーをつくって、それがすごくよかったかなというふうに思いますので、見やすく目を引くような媒体だったり発信の仕方というのは、ことしも継続していきたいなと思っております。

あとは、全国的にバリフェス、うちも開催したいという声がたくさんあったのは、すごくいい影響だと思いますが、これに関しては、今後のバリフェスに対する扱い方にもつながってくると思うんですけども、もっとしっかりとブランディングして、地域の特色を出したイベントとして、これからも茅ヶ崎で発信することが、それが全国展開にもつながる一つのきっかけになるのかなというふうに思っております。

ことしの開催に向けてということで、もう既に動いてはいるんですけども、一つスタジオクーカさん、僕の中ですごく大きいかんと思っていて、茅ヶ崎ではなくて平塚の事業所なんですけれども、知的障害とか、そういった障害がある方が60名ぐらいいるんですが、アートでしっかりとその子供たちがご飯を食べていけるようにサポートするような団体なんです。本当にそういう団体では日本でもすごく古くから活動している団体で、この猫の絵なんですけれども、これも知的障害の子が描いた絵なんです。これは実際に有名なアパレルショップとコラボもしたりしていて、彼女は既にアーティストとして独立をしています。なので、そういったところとことしはコラボして、一緒に作品をつくるような形にしていきたいなというふうに思っています。

あとは、神奈川県の後援もついていただくことになったので、そういう意味で、もっともって茅ヶ崎から湘南、湘南から神奈川、神奈川から全国という形で発信していければいいかなと思っております。

ということで終わります。ありがとうございます。（拍手）

○事務局

ありがとうございました。それでは、質疑応答に移ります。大江委員長、よろしくお願ひします。

○大江委員長

それでは、どうぞ。石田さんからいきましょう。その次、伊藤さん。

○石田委員

ご説明、プレゼン、どうもありがとうございました。私は当初からこの事業を聞いたときに、すばらしい事業だというふうに思っております。このバリアフリーのフェスティバル2018も大成功。かなりご苦労があったと思います。どうもお疲れさまでした。

最後にお話ししていただきましたけれども、茅ヶ崎から神奈川県から全国という状況の中で、2018のフェスティバルも茅ヶ崎市庁舎の1階にこれだけの人数が集まってしまっ

て、急遽、扇風機もという話の中で、今後、市内のことを考えて、例えば、会場をもっと大きくするだとか、そんなお考えはありますか。もっと多くの人に参加してもらって、もっと。将来は本当に全国的になっていただいたらうれしいなど。茅ヶ崎からこういう事業を発信していただいたり、何かそんなことをちょっと思ったので、夢というか、そんなことをもうちょっと具体的にお聞かせいただければと。

○廣田（Hearts（ハーツ））

本当でしたら、誰もがみれるような、公衆の人たちがみれるようなイベントにしたいなと思ってはいます。なので、例えば、茅ヶ崎北口のテラスというか、ああいうところでやって、茅ヶ崎に来た人たちが歩いているところで、たまたまイベントがやっていて、そういう人たちがみかけるような形にすると、よりバリアフリーという目的が果たされるのかなとは思いますが、実際に、先ほど話したように、温度だったりとか、気候のことも含めて、雨が降ったらできないとか、いろいろあると思うので、とりあえず室内でというふうに考えてはいるんですが、実際、茅ヶ崎で会場を押さえるとなると、幾つか限られてはいるんですが、大体ステージがあって客席がある、みたいな形が場所が多くて、そうすると、どうしてもステージと客席で間があいてしまうんですね。なので、その間というのは僕の中では要らなくて、お客さんの中にモデルさんたちが歩いていくというような形がミックスカルチャーみたいな形になると思うので、そういうふうに考えると、フラットな会場ですごく広い場所を探すというのが、正直困難になりつつあるのかなというふうには思っています。

ただ、それも含めて、ことしに関しては、うみかぜテラスの大きい会場を使わせてもらうことになりましたので、あそこも広い会場でステージはあるんですが、ステージはちょっと低いので、そこもうまく工夫して、お客さんとの一体感が出るような形にしていけば、参加している人たちがみんな一つになるイベントになるのかなと思っています。

○石田委員

ありがとうございました。

○大江委員長

伊藤さん、どうぞ。

○伊藤委員

どうもありがとうございました。あと4分しかないので、短く言いたいんですが、市民活動の肝は、マイナーイシュー、マイノリティイシューをクロスさせることが一番の肝要なところだと思うんですね。その点、Hearts（ハーツ）さんは、クロスさせる、あるいは、先ほど「ミックスさせる」とおっしゃっていましたが、非常に優れていると思います。

要は、マイノリティ、マイナーな問題と、マジョリティ、メジャーな問題とをクロスさせるのではなくて、マイナーな問題同士をクロスさせるということに非常に優れていると思いますので、今後着目しているそういった観点からの 이슈、あるいはグループ、あるいは課題について、どう思っているか、知見をお聞かせください。

○廣田 (Hearts (ハーツ))

ありがとうございます。今、文教の学生と話しているのが、高齢者をこしは含めていく。シニアモデルを、僕の中では平均年齢80歳を目指していて、大体8名から10名のシニアモデルを呼びたいなと思っています。例えば、そのシニアの方たちとひ孫さんが一緒に歩くような形とか、あとは、文教大学のサークルで海外の方々との交流もあるという話を聞いていて、そういった方々が来たりとか、本当にいろんな形、あと、茅ヶ崎ということなので、ワンちゃんがありだと思えるので、ワンちゃんを散歩するファッションショーとか、そういうのもできると、本当に多様性というか、地域丸ごとという感じがするのかなと思うので、今はあくまでも、特に去年は、子どもと障害児という形で、キャッチーな方向から入ってみようかなと正直思ったんですが、最終的には本当にトータルで、地域そのものを表せるイベントにできればいいなと思っています。

○大江委員長

中川さん。

○中川副委員長

ありがとうございます。今までのプレゼンも含めてなんですけれども、ちょっと印象的に、イベントというある種非日常的な空間をつくる中で、このバリアフリーファッションショーも、当事者及びボランティアさんたち、それから、そういう方たちのネットワークというのがすごく広がりを持っているということで、大変すばらしいと思うんだけど、日常性の中での広がりといいますか、それぞれが抱えている重さとかしんどさとか、そういう日常性の中での、こういうイベントがあることはすごく開放的で、多分参加されている方はハレの日だというふうに思っているんじゃないかなと思うんですけども、そういう日常性の中の開け方というのをどう考えていらっしゃるかなというようなことをちょっとお聞きしたかった。すいません、時間が過ぎちゃって。

○廣田 (Hearts (ハーツ))

簡単にお答えさせていただくと、僕も最終的に日常ベースで落とし込みたいなと思っ
てはいるんですが、結局、障害があつたりとか、車椅子の方だったりとか、わりと見て見
ぬ振りというか、ちょっと見えない世界の感覚の人が圧倒的に多いと思うんですね。もち
ろんそういう方々ばかりではないと思うんですが、そういった方々がもし身近にいたとき

に、もともと身近にいる人は、そういった人たちに対する接し方だったりとか、もう既に備わっていると思うんです。ただ、身近にそういう人がいない場合は、どういうふうに接したらいいとか、また、そういう人たちが何に対して困っているかということはわかりにくいと思うので、そういう方たちに対して少しでも意識がいくような、認識を持てるような形にイベントに持っていきたくて、例えば、障害がある方たちでもコミュニケーションはしっかりとれるとか、すごく簡単なことなんですけれども、それすら難しいと思っている人もいっぱいいると思いますし、車椅子の方だったら、例えば、駅でもエレベーターがなかったらどうするとか、生活する上での、ある意味、ハード面のバリアフリー面とかも、知らないことはたくさんあるので、例えば、車椅子用の個室トイレが使いにくいという話は結構出てくるんです。例えば、トイレトペーパーの位置が高過ぎるとか、後ろ過ぎるとか、本当に細かい部分での話は、実際にその人たちと話してみないとわからなかったりするんですけれども、そういった方たちとまず話すきっかけを持つ場として、このイベントがあって、そこから日常に対して少しでも意識が持っていけるような形に意識改革できるようなイベントにしたいなと思うので、最終的には意識が変われば、日常生活にまで落とし込むことができると思うので、そのきっかけになればいいなと思っています。

○中川副委員長

ありがとうございました。

○大江委員長

ありがとうございました。

それでは、時間になりましたので、どうもありがとうございました。（拍手）

○事務局

Hearts（ハーツ）様、ありがとうございました。

続きまして、「字幕付映画上映会～筆記通訳サークル「虹」30周年記念事業～」について、筆記通訳サークル「虹」様からの実施報告をいただきます。ご準備よろしく願いいたします。

準備はよろしいでしょうか。それではよろしく申し上げます。

○筆記通訳サークル「虹」

おはようございます。筆記通訳サークル「虹」です。きょうは、げんき基金の募金箱がありますね。それに募金をするために来ました。（拍手）少ないんですけども、極めて気持ちなんですけれども、募金させていただきました。

昨年、ここでデモンストレーションをさせていただきました。非常に拙い話だったんですけども、皆様のご支援をいただきまして、おかげさまで無事字幕付映画の上映をす

ることができました。ありがとうございます。

私、耳が悪いものですから、マイクの声が聴こえないんです。じゃ、どういう声が聴こえるかという、補聴器が活躍してくれるんです。ですから、私は自分の声は補聴器で聴いています。マイクがどういう音というか、声というか、それは私にとってはわからないんですね。

先ほどバリアフリーの話が出ていましたけれども、バリアフリーというのは非常に難しいと思いますよね。今回、私たちが上映した三澤監督の『3泊4日、5時の鐘』ですけれども、これもバリアフリーとまではいかないんです。字幕を付けたということですから、バリアフリーとは言えないんですね。じゃ、バリアフリーというのは何かというと、映画でのバリアフリーというのは、字幕を付けることだけではないんですね。見えない人が映画を観に来たときに、その見えない人のために音声でガイドする。それが必要なんですね。そういうところで私たちが去年7月14日に駅の6階の大きな部屋で上映したんですけれども、そこでもバリアフリーでやっていくということは非常に難しかったですよね。

『3泊4日、5時の鐘』、この写真ですけれども、これは7月14日で2回上映しました。なぜ2回やったかといいますと、これは場所がすごくよかったんですね。駅ですから、電車で来た人もパッと観ることができますから、場所的に非常によく、三澤監督が「じゃ、2回やってよ」というふうに言ってくれたんです。2回やると予算がすごくアップするんです。限られた予算ですので、あまりアップしてしまうと困ったんですけれども、それでもその予算の中で何とか上映することができました。

聴覚障害者の方々のために準備したこと。これは、パスしましょう。

例えば、私がおもしろいなと思うのは、「虹」の能力ですね。「虹」に参加している方々の能力の一つですけれども、それが『3泊4日、5時の鐘』の字です。これは、皆さんちょっと見ていただきたいと思うんですけれども、これはなかなか立派な字です。筆で書いてあるんですね。

これが実際に話が始まったときの様子ですね。

これは準備しているときの様子です。

ここを見ていただきたいです。青いところに写真がありますね。字は読めないんですけれども、これが字幕です。つまり、映画の場合は、画面の中に、下のほうに字幕が出ますよね。ところが、これは禁止されていたんです。画面の中には入れないでくださいということになっていましたので、特別に「虹」の人たちが字幕を外に出しています。

ところが、これがあまり評判がよくなかった。なぜかという、文字が下過ぎるんです。フラットな部屋ですから、後ろのほうにいる人は見えなかった。そういうところが不評の一つであったんですね。

最後に、監督さんの話の場面が出てきますので、それを見ていただきます。

これは、皆さんわかる人はいらっしゃるでしょうか。これが茅ヶ崎館の全景です。きれい

でしょう。左方に黄色いシャツを着ている人が三澤監督です。これは映画が終わった後で話をしてくれています。三澤監督は、このとき30歳ですね。家は寒川の岡田です。北陵高校の出身で、茅ヶ崎、寒川に非常に縁のある方です。

最後なんですけれども、三澤監督の第2作が『落葉のころ』というんですけれども、『落葉のころ』が去年の秋に期待していたんです。ところが、できなかった。ことしは、この3人で話していたんですけれども、ことしは監督さんと中央にナカザカハヤさんという主演者ですけれども、その人たちが『落葉のころ』という第2作を公開されるのではないかなというふうに期待しているわけですね。

我々の会というのは非常に地味な会ですから、次の、ここでげんき基金を利用するということは、おそらく30年先でもないとは思いますが、何とかこのげんき基金、長持ちしてほしいなというふうに考えています。

ありがとうございました。（拍手）

○事務局

ありがとうございました。それでは、質疑応答に移ります。大江委員長、よろしくお願いします。

○大江委員長

では、どうぞ。伊藤さん。

○伊藤委員

どうもありがとうございました。私は昔メキシコで歌舞伎公演を手伝ったことがありまして、天井桟敷から字幕を映し出しました。その点、大きな問題は、日本語とスペイン語と歌舞伎、3つを知らないとタイミングがわからないんです。皆さんの知見、今回の知見は、オリンピック・パラリンピックで多くの海外の方々が日本に来る、あるいは移民がふえることの中で、非常に重要な知見があると思います。そういった知見をぜひとも皆さんが、先ほどバリアフリーファッションの方は、文教大学の国際部の先生と協力するとおっしゃっていましたが、いろいろな可能性があると思いますので、ぜひとも皆さんのサークルの体験を皆さんに広めていくようにされることを強く願います。

どうもありがとうございました。

○大江委員長

ほかにいらっしゃいますでしょうか。どうぞ、草野さん。

○草野委員

ありがとうございました。すごくわかりやすい説明でありました。その中でアンケート

のところを見ると、「要約筆記についてご存じでしたか」に対して「知らなかった」という方が17人いて。要は、PRというか、理解していただくということにはすごく貢献したような気がします。それと同時に、今回の事業でチラシをつくっているということで、そのチラシがまだまだ活用されるということで、げんき事業としてはすごくいい結果だったのかなと思っています。これからも頑張ってください。

○筆記通訳サークル「虹」

ありがとうございます。

○大江委員長

今、お二方からコメントをいただきました。何か「虹」さんのほうからお話しいただくことがあれば、どうぞ。

○筆記通訳サークル「虹」

私たちのサークルは、いつもは要約筆記という活動を中心にしていまして、特に一般の方に広めるとか、そういうことはなかなかできにくくて、対象者の方にピンポイントでサービスを行うという活動が主だったので、こういったイベント的なことをするというノウハウもないし、本当に毎回サポセンに駆けつけては、次、何をやったらいいのというふうに、こちらの津山さんもそうですけど、毎回聞きながら、ちょっとずつ進んできて、こういう結果になったのは、本当に皆さんのおかげだと思っています。

いつもいつも言う、手話の方には本当に申しわけないんですけども、手話は知っていても要約筆記を知らないというところが世間の一般のところなので、手話でなくて文字でないと伝わらない人がいるというところがちょっとでも伝えられたことが大変うれしく思っています。

○大江委員長

ありがとうございます。ほかはいかがでしょうか。中川さん。

○中川副委員長

映画の著作権の問題で、日本語を字幕にするというのが難しいというようなことで、監督さんの許可も必要なんですよね。もう少し、中の印象にもありますけれども、ちょっと映画が難しかったとかという印象がありますけれども、もう少し広がりのある映画ができればいいなと思うんですけども、その辺はなかなか難しいわけですか。

○筆記通訳サークル「虹」

今回、この映画にしたきっかけは、茅ヶ崎を舞台にしたもので、監督さんと初めてお会

いして、ちょっとお話ししたとき、とても好意的だったので、すごくそれに助けられて進めていったという経緯がございます。多分、聴こえない方も、私たちと同じように、本当に趣味というか、映画の場合は、どういうのが観たいというのはいろいろだと思うんですよ。なので、どういうところに絞って付けていくかというところは、まだ課題です。

○大江委員長
岩壁さん。

○岩壁委員

ありがとうございました。聴覚障害者と健常者との溝を薄めるということで、大変重要な活動だというふうに思っております。要約筆記が日本に普及し出したのは、かれこれ半世紀近く前になりますでしょうかね。そういう意味では、おそらく皆さんもどこかで研修されて、いろいろ表現しているんだと思うんですが。

○筆記通訳サークル「虹」

今は要約筆記が資格になりまして、手話と同じなんですけれども、一応、カリキュラムがあって、試験があって、資格を得て、それで福祉サービスの事業に活動しているということになります。神奈川県は、藤沢にある聴覚障害者福祉センターで養成をしています。

○岩壁委員

どうもありがとうございました。大変地道な活動ですが、いろんな意味で、もっともっと世間の方々に知っていただきたいというふうに私自身も思っております。皆さん、頑張ってください。よろしく申し上げます。

○筆記通訳サークル「虹」

ありがとうございました。

○大江委員長

じゃ、時間になりましたので、どうもありがとうございました。（拍手）

○事務局

筆記通訳サークル「虹」の皆様、ありがとうございました。

それでは、これより約10分間の休憩とさせていただきます。皆様のご協力のおかげさまで、オンタイムでの進行となっております。再開は11時30分とさせていただきますので、それまでにお席にお戻りください。

次の発表団体の方は、発表席にてスタンバイをお願いいたします。

それでは、休憩とさせていただきます。

(休 憩)

○事務局

それでは、定刻となりましたので、再開させていただきます。

「萩園いこいの里 ふれあいロビーにおける地域交流活動」事業について、萩園いこいの里 ロビー活動実行委員会様、ご準備はよろしいでしょうか。よろしくお願ひいたします。

○宇都（萩園いこいの里 ロビー活動実行委員会）

萩園いこいの里 ロビー活動実行委員会の宇都と丸山と申します。よろしくお願ひいたします。座らせていただきます。

萩園いこいの里 ロビー活動実行委員会なんですけれども、これは、私ども2006年から地域が抱えている課題に取り組んで、いろいろな活動をやってまいりました。今年度はステップアップということで、学習会を企画させていただきました。

活動の内容は、偶数月に「みんなで食べよう会」、奇数月に「土曜ミュージックサロン」、あと、毎月第4木曜日の絵本の読み聞かせ、3月には「3.11あの日を忘れない」という写真展を行っております。あと、ステップアップの事業は、ご覧のとおりです。

これはミュージックサロンの風景で、奇数月にやっておりますけれども、2006年から行っております。参加者は高齢者が多いんですけれども、認知症の方や車椅子の方もおいでになります。また、障害のある方も自由に気楽にご参加いただいているのも特徴の一つかと思ひます。茅ヶ崎市の広報に掲載されている関係で、市内いろいろな地域からもおいでになっております。

参加人数は、大体80名から、多いときで100名を超えるということもあります。この写真は、三線とジャズピアノのコラボということで、照明も入って、とてもいいコンサートでした。

これが風景ですね。

これが「ケルト音楽の昼下がり」ということで、茅ヶ崎出身の大竹奏さんと松里さんのファゴットの演奏です。プロで活躍している方たちがこうやって来ていただけることで、皆さん、アンケートには「活力をいただいた」とか「元気が出た」とか「気楽にいい音楽が聴けてよかった」という声が聞こえます。

次は、これは、「みんなで食べよう会」。偶数月にやっております。第4日曜日が主に開催日となっております。これは、小学生から私どもの施設に来ている男の子が、今はもう24歳になっていますから青年ですけれども、毎回こうやってポスターを書いてくれています。

食べよう会が発足したのは、2005年から、子どもたちと一緒に何かをやりたいねということで発足をして、2006年10月からは、助成金を得ながら活動しております。近所の農家の方が朝採れたお野菜を持ってきてくださって、みんなでこうやって調理をしながら、みんなで食べております。最近では、民生委員さんとか、私どもによく遊びにおしゃべりに来てくれるおじいちゃんおばあちゃんが手伝ってくださるので、とても楽になってきました。

食べるということは、みんなの交流の第一歩というような感じがしております。私どもの地域には、今の傾向かもしれないですけども、1人で食事をする子とか、ご飯を食べない子とか、あるいは、経済的に厳しいというご家庭のお子さんもいらっしゃいます。それで、無料で、こうやってみんなでつくって食べて、片づけもみんなでやってという形をとっております。余ったお野菜は、支援の必要なご家庭にお分けしたりもしております。

これが、若いお父さんやお母さんたちもこうやって参加をしてくれて、最近のお父さんはとてもよく働いて、お片づけでも率先してやってくれるので、ああ、時代が変わったな、私たちの時代とは、というふうなこともかいまみえる風景です。

次に、地域の課題ということで、3回の連続学習会を開きました。私どもの地域は、いろいろな問題が起きることもございまして、小学校とか家庭児童相談室とかで相談をしながら問題解決に当たっていることもあります。それで、地域の方々に家庭児童相談室というのはどういうところか、もっと身近に考えてほしいということで、「子どもを取り巻く環境とその対応ー地域のわたし達が出来ることー」ということで連続学習会を持ちました。これは、家庭児童相談室の主事の小山織星さんと相談員の島村和子さんがお話をしてくださっているところです。ロールプレイング方式というのを学びました。

これが、茅ヶ崎高校のインクルーシブ教育について学ぼうということで、茅ヶ崎高校の総括教諭の大関先生に来ていただきました。パイロット校として茅ヶ崎高校の取り組みを聞かせていただいたんですけども、神奈川県インクルーシブ教育ということに関しては、賛否両論いろいろありまして、チラシを皆さんにお配りしているときから、「反対だから行かない」とかということもあったんですけども、私どもは実践推進校として、学校がどのような取り組みをしているかということをお聞きしたかったものですから、この会を持ちました。

詳細はこの報告書の中に書いてありますけれども、印象に残ったのは、大関先生の言葉で「彼ら、障害を持っている子どもたちは普通の高校生になりたいんだよ」ということとか、彼らの努力に対する評価というのを教えていただきました。全日制で普通に20点取ることを、障害を持っている子がテストで20点取るこの努力というのはすごいんだよというふうなことをとても熱心に伝えてくれました。

それと、教員の方々のきめ細かいサポートの仕方にもとても感動いたしました。それだけに、この推進校がどんどん進んでいくと、教員の負担が大きくなってしまいうんじゃないかということで、私たちは今後もインクルーシブ教育というものを見守っていかなければ

いけないな。教師が疲弊してしまえば、それは結局、生徒に戻ってきてしまうので、そういうところを注意深く見ていかなければいけないなという印象を持ちました。

3回目は、『葦牙ーあしかびー』という映画を上映いたしました。これは、小池監督がドキュメンタリー映画としてお撮りになったものなんですけれども、岩手県盛岡市の児童養護施設「みちのくみどり学園」の子どもたちのことなんですけれども、75名の子どもたちがいる中で、その7割が虐待からの保護でした。この施設の職員さんとか地域の方々の取り組みによって、その子どもたちの変化を撮って見せていただきました。

この映画の後、小池監督のお話を伺う予定でしたが、8月に小池監督が脳出血を起こしてしまって、お話を聞けなかったのがとても残念です。その後に萩園ケアセンターで企画しました『命の作法』のほうには、小池監督が車椅子でおいでになって、お話をしてくださって、来た方も涙、涙という感じでした。

これは「3.11あの日を忘れない」。フォトジャーナリストの山本宗補さんの写真展と講演会です。3.11以来、私たちはこの地域にいて何ができるだろうかということで、2012年から写真展とこういうお話を続けて活動しております。

これは、絵本の読み聞かせ。毎月第4木曜日にやっておりますけれども、なかなか子どもたちが参加できないのが現状で、とても残念なんですけれども、続けることに意味があると思っております。

以上です。

○事務局

ありがとうございました。それでは、質疑応答に移ります。大江委員長、お願いいたします。

○大江委員長

では、どうぞご質問のある方。

○水島委員

発表ありがとうございました。年間を通して、数も多いですし、内容も多岐にわたって、本当に頑張っているなと感じております。

1つお伺いしたいのは、参加者は結構多いんですが、施設自体は地域的にかなり広いエリアなどところにある施設だと思うんですけれども、広報といいますか、いろいろな方に利用していただくというのも目的だと思うんですが、そういうところで少し工夫しているところとか、例えば、あと、食事のほうとかで続けていくのにこういうような課題があるとかというところがあったら、お話ししていただけますか。

○宇都（萩園いこいの里 ロビー活動実行委員会）

広報に関しましては、茅ヶ崎市の広報とか、地域の回覧で、ミュージックサロンとか絵本の読み聞かせなどは広報しております。ただ、食べよう会は、本来、支援したい子どもがいるんですね。一般の子どもたちじゃなくて、この子たちには、普段食べていないだろうな、食べさせたいというお子さんなので、特に広報はしていません。ロビーに来る子どもたちに、小さいチラシを「今度いつやるよ」というふうな感じでお渡しして、本来支援したい子どもたちを弾き飛ばさないような工夫をしております。

○丸山（萩園いこいの里 ロビー活動実行委員会）

萩園地区の地域活動を重点に置いております。ですので、茅ヶ崎の広報とチラシ等で周辺地域。ですから、来ていただく方は、アンケートによれば、市内の方とか、隣接市のところからいらっしゃると思います。SNS等は、そういうことであまり使わずに、地域の活動を重視するというのでやっております。

○大江委員長

椎野さん、どうぞ。

○椎野委員

たくさんのお事業、お疲れさまでございます。ありがとうございます。

先ほどのご説明の中に、いろいろおやりになっていると地域の課題が出てくるよというお話がございました。そして、その中に、家庭児童相談室にも相談しているということでもございましたけれども、もし差し障りがなければ、例えば、萩園地区でどのような課題、問題があるのか、お聞かせいただけますか。

○宇都（萩園いこいの里 ロビー活動実行委員会）

とても難しいご質問で、県営住宅がございまして、シングルの方とか、あるいは、親御さんが心を病んでいるとか、そういうご家庭のお子さんも遊びに来られるので、そうすると、いろいろな課題が、食べているのかなとか、おむつが濡れたまま裸足で来ちゃったぞ、みたいな、そういうようなことがしょっちゅうではないですけども、たまに見られたり、お金の問題があったりとか、私どもは本当にボランティアでやっておりますので、そういう課題が見えたときには、どうしても学校との連携とか、家庭児童相談室に通報するとか、そういうことで問題解決を図っていかざるを得ないというようなことがございます。具体的にはなかなか言えないので申しわけないですけども。

○椎野委員

ありがとうございました。

○大江委員長

どうぞ。

○丸山（萩園いこいの里 ロビー活動実行委員会）

その施設は、1階のふれあいロビーというところに、地域のお子さんですとか、年輩の方、普通の方、いろいろな方が利用される場ということ。

○椎野委員

ありがとうございます。

○大江委員長

中川さん、どうぞ。

○中川副委員長

発表ありがとうございます。

この施設があることで、食べよう会とか、おいしいものが食べられたりとか、生演奏を聴けたりとか、あるいは、読み聞かせの機会が与えられたりとか、随分いろいろな暮らしを豊かにするようなことが近隣の住民をはじめとして、できているということで、大変ありがたい施設だと思うんですけども、このメンテナンスじゃないんですけども、今後ともこちらでは、33万円の補助金の中で、寄附も含めながら40万近くでやっていたらしゃるわけですけども、今後、こういう展開を、げんき基金がないときに、なくなる場合、どのように考えていらっしゃるんでしょうか。

○丸山（萩園いこいの里 ロビー活動実行委員会）

今までもげんき基金以外の補助金もずっとこの10年いただきながらきていますし、げんき基金もいただきましたし、今後は。

○宇都（萩園いこいの里 ロビー活動実行委員会）

私は翔の会の職員でもあるわけで、10年近く活動してまいりましたので、今後は翔の会がバックアップをしようということが決まりましたので、今後、安定してこういう活動がしていけるようになりました。

○中川副委員長

ありがとうございます。

○大江委員長

では、ちょうど時間になりましたので、以上で。どうもありがとうございました。（拍手）

○丸山（萩園いこいの里 ロビー活動実行委員会）

このたびはげんき基金ありがとうございました。

○事務局

萩園いこいの里 ロビー活動実行委員会の皆様、ありがとうございました。

それでは、「赤ちゃんとママのためのコンサート～みんなおんなじ～」事業について、湘南Liebe様から実施報告をいただきます。ご準備よろしくお祈いします。

もう少々お待ちください。

準備が整ったようなので、それではよろしくお祈いいたします。

○三輪（湘南Liebe）

すいません、お時間をとらせました。湘南Liebe代表の三輪マリ子と申します。よろしくお祈いいたします。座らせていただきます。

「赤ちゃんとママのためのコンサート～みんなとおんなじ～」、これを2017年に始めましたのを、2018年にげんき基金の助成金をいただきまして、また2018年、開催させていただきました。

6月20日、げんき基金をいただいて第1回目、2017年から比べますと5回目になるんですけども、こちらを白十字林間学校さんのほうで開催いたしました。人数は、ここに書いてあります、大人26名、子ども54名参加の80名いらっしゃいました。実は、この日、朝からすごい雨が降りまして、「開催するんですか」というお電話が殺到したんですけども、「とりあえず行きますよ」というお返事をしましたらば、これだけの人数が集まってくれまして、会場の白十字林間学校さんのほうも、普通、校庭は子どもたちが使うので、車は控えてくださいとおっしゃっていたんですけども、非常に雨が強かったので、校庭を開放していただきまして、車でいらっしゃった方のために駐車場をお借りすることができました。また、お母様方が長靴を履いて、レインコートを着て、赤ちゃんを抱っこして、そしてこの会場にいらっしゃいます。

後で聞いてみましたら、雨だと子どもを連れて遊びに行く場所が非常に少ないということで、こういう企画をすると、ここに来れば同じ年頃の赤ちゃんたちに会える、お友達に会えるということで集まってくれたんだなと思いました。

子どもの人数が54名と多いのは、ここの白十字林間学校さんと、もう一つ近くに茅ヶ崎ファームさんという同じ児童施設がございます。そちらのほうにいる小さいお子さま方を先生が連れてきてくださいました。それでこの人数になりました。

2回目です。10月10日にあったんですけども、この日は、茅ヶ崎市文化会館が1

0月1日にリニューアルしてオープンいたしました。それで、初めて使わせていただきました。練習室1というのがこのような素敵なミニホールになりました。そして、まだリニューアルして10日目ですよね。ということで、市の職員の方々もとてもバタバタして、使い勝手がなかなかうまくいなくて、設備も整っていないという状況で、私たちもマイクとかアンプをサポートセンターに借りに行ったりとか、とても大変な思いをいたしました。

この映像でわかるように、今回は、男性のテノール歌手も出てもらいました。そうしたら、やはりママたちからは非常に好評で、このとき、「童神」を歌ったんですけれども、とてもよかったというお声をいただきました。

また、残念だったのが、映像でわかるように、プロジェクターですね。これが作動しなかったんです。接続が全然うまくいなくて、文化会館のホールのスタッフが10名ほど取っかえ引っかえやって来て、何とか映してあげたいという気持ちでやってくださったんですけれども、結局使用できないということになりました。これは、接続のコードが断線していたので、とにかく誰が何をやっても映るわけがなかったんです。それを全く誰もわからなくて、非常に残念な思いをしました。

そして、年が明けまして3月21日。こちらも同じミニホールで行いました。このときは万全の準備で、プロジェクターもきちんと映っております。

この日は、3月21日、春分の日で祝日でした。早くから申し込みの方が多くて、また、ご夫婦参加の方が非常に多かったです。お父さんの子育てに関わる関心が非常に高いということがわかりました。

それで、早くから完売になってしまったために、お断りをしなければならないという事態になりました。一応定員40名ということにさせていただいているので、あまり多いとさまざまな危険とかがありますので、お断りをさせていただきました。写真でわかるように、非常に盛況なコンサートで終わることができました。

2018年、今回、この3回ですね。また、3回プラス頼まれた「赤ちゃん和妈妈」がありましたので、結局、年間5回「赤ちゃん和妈妈のコンサート」を行わせていただきました。平均すると、1回のコンサートで35組のお母様と赤ちゃんがいらっしやっている計算にはなりました。この集客数を持続しつつ、新しいママの集客も心がけていけるようにできればいいなと思っております。

また、宣伝方法がチラシを見て来場の方が非常に多かったです。なので、多くの人の目に触れるところをいろいろと探し、掲示を置かせてもらうようにできればいいかなと思います。

そして、毎回同じ内容にならないように、いろいろ曲を変えたりとか、飽きられないように頑張っていきたいと思います。

賛同してくれる協力者を探して、個人で言えば、インスタとかフェイスブックでお互いに「いいね」を押し合う。特に、今回のようにいろいろなげんき基金をいただいた団体さ

んがいらっやいます。その中で協力して、お互いのところでお互いのものを宣伝していただければ、非常にうれしいなということを感じました。

今年度、2019年に向けて、既に5月16日に1回目を終わりました。いただいた助成金でプロジェクターを購入しまして、当日、使用しました。非常にスムーズにとってもいいのを買うことができましたので、斜めから映しても真っ直ぐに映るという、とてもいいのをいただきました。

そして、内容では、12月にクリスマスコンサートを行っていきたいので、そこの検討を今一生懸命しているところです。

あと、昨年からの反省で、やはりコンサートを行っていくと、その都度、これが必要だったな、あれが必要だったなというのが出てきました。それを1回、最初のときだったので、申請するということが頭から抜けてしまって、自分で勝手に買ってしまいました。それが通らなくて、結局、最終的には自費で買うという事態になりましたので、今年度はしっかりと出てきたものを前々にもう一度予算の見直しということで、もう1回目を見直して、この間、大丈夫ですというお手紙をいただきましたので、そのような形で進めていければいいなと思っております。

あと、助産師さんのお話なんですけれども、人数がふえて、2回目からは2人にしたんですけれども、それでもなかなかお話の間にいらしたお母様全員とコミュニケーションをとるのが非常に難しいなということを感じました。特に、5月にやったときに、アンケートにその欄をふやしましたらば、なんだか話せなかったとか、そういうご意見がありました。それなので、そこをちょっと工夫したいなと思いました。

これが、実際、この間の5月16日に行いました。

入場者数71名、大人36名、子ども35名参加でした。

実はこれ、5月のゴールデンウィークが挟まってしまったために、宣伝するのに非常に苦労しました。ゴールデンウィークの前にタウンニュースに掲載していただいたんですけれども、ゴールデンウィーク10日間という長いお休みが入ってしまったので、最初、全く人数がふえなくて、どうしようと思っていました。でも、ゴールデンウィークが終わりましたら、ダーッと急に連絡が入りまして、これだけの人数を集めることができました。本当にほっとしました。

アンケートをまたふやす項目をしたんですけれども、リピーターの方が3名いらっやいました。その中の一人は3回目という方もいらっやいました。非常にうれしかったです。だから、特に、毎回、毎回、内容を変えていかないと、せっかくリピーターがふえても、また同じなのかと飽きられてしまったらいけないなというのも反省しました。

いろいろと回数を重ねるほど多くの課題がふえているんですけれども、改善しながら、子育て支援活動の一端を担っていきたいなと思っております。

以上です。ありがとうございました。（拍手）

○事務局

ありがとうございました。それでは、質疑応答に移ります。大江委員長、よろしくお願いいたします。

○大江委員長

それでは、どうぞご質問のある方。岩壁さん。

○岩壁委員

ご丁寧な説明ありがとうございました。

社会が随分変化したとともに、家族構成も変わってきているんだと思うんですね。今、わりと行政とかそういうところは、高齢者の対応というのは大変きめ細やかな対応をされておりますが、特に子育ての若い親御さんたちがすごく悩んでいるところがあるんだと思うんですね。ちょうどいい視点で赤ちゃんとママのコンサートということで、何かその後のおしゃべりタイムみたいなものは設けているんですか。

○三輪（湘南Liebe）

音楽演奏を30分から40分、その後に助産師さんとのお話ということで、最初に一応助産師さんからテーマの話をしていただきます。その後に、今2人助産師さんがおりますので、グループを2つぐらいに分かれて、その真ん中に助産師さんが入りまして、それで、個々にお話しできるお母様からいろんなお声をいただいてお答えする。それと、ネームタグをつくったんですね。お子さまのお名前と生年月日を書きまして。そうすると、大体同じぐらいの年頃のお子様をお持ちのお母様方がお互いにお話ししやすいということがありまして、それで、そんなのもつくってやりましたので、アンケートにも、お話しできましたか、お友達つくれましたかという項目を設けました。そうしたら、お話しはできたけど、お名前の交換はうまくいきませんでしたとか、ありましたね。だから、そういうのをもう少し広げていければいいなと思っております。

○岩壁委員

どうもありがとうございました。

○大江委員長

それでは、どうぞ、石田さん。

○石田委員

ご説明どうもありがとうございました。今後の茅ヶ崎市の人口を考えると、当然減っていくことが予想されていて、だから、こういうふうに若いお子さんのいらっしゃる世代の

ご夫婦が茅ヶ崎にどんどん住んでいただくとかというのはとても大切なので、さっきおっしゃられた子育て支援活動の一端を担っていきたいというご説明も本当によく理解を示しております。

今、共働きの家庭がすごく多いじゃないですか。先ほどのご説明の中で、祝日に開催したら、パパとママと一緒に来てくれたという状況の中で、例えば、休日にもっと多く開催をすると、多分、市民文化会館小ホールでも予約で借りられなかったとか、そこら辺は、できれば共働きのパパとママにも来てもらいたいなど私なんかは個人的には思うんですけども、そうすると、そこら辺の休日の会館の確保とかは難しいものなんでしょうか。

○三輪（湘南Liebe）

本当にたくさんの人に来てもらいたい反面、あまり人数が多過ぎちゃうと、後半のママたちの声をすくい上げるのが非常に大変になるんですね。20名で1人の助産師さんではちょっと多いと思うんです。本当は10人に1人ぐらい。だから、40名集まれば、4～5人助産師さんがいらっしやってくだされればいいのかなど思うんですけども、なかなか難しいのと、今回たまたま祝日が取れたために行ったんですけども、それも大切だと思うんですけども、共働きをご両親がしている中で、今、子育て、確かに変化があります。最近見るんですけども、おばあちゃまとかおじいちゃまがお孫さんを抱えて公園にいらしたりとか、お買い物に。その姿もあるので、若いママもあれですけども、慣れない子育てをしているおばあちゃま、おじいちゃまにも来ていただきたい。というのと、あと、お腹に今いる。プレママと言うんですけども、ぜひぜひそういうママにも来てもらって、赤ちゃんてこういう感じなんだよというのを、産まれる前にわかるということも大切かなというふうに、ちょっと広げています。

○石田委員

ありがとうございました。

○大江委員長

ほかはいかがでしょうか。中川さん、どうぞ。

○中川副委員長

このコンサートというのは、赤ちゃん和妈妈の息抜きで、大変に有意義だと思うんですけども、こちらの資料の中にあります、2018年の5回やっていらっしやるうちの2回はげんき基金ではないということですね。コンサートではないということやっていらっしやるわけですけども、この金額でもって長く続けていくということのためには、どういうふうな工夫を今後考えていらっしやいますでしょうか。

○三輪（湘南Liebe）

500円という金額で行っています。本当だと1,000円ぐらい取らないと採算は合わないと思います。一応会場も今回文化会館の練習室をお借りしたんですが、ちょっと会館の値段も上がりまして、私たち湘南Liebe、実は減免をいただいている活動団体なんです。このほかにもいっぱいいろんなことをやっております。そんなのもあって、一応コストが抑えられるんですけども、今後、その減免もだんだんなくなってきたりとかする場合は、5回のうち2回やっているところがあるんですけども、そこはほかの団体の主催で、私たちが協力している。私はそれでも構わないと思うんです。だから、そういうお声を上げてくれる団体がふえてくださって、私たちが演奏に行ってという形で「赤ちゃんとママのためのコンサート」を続けていけばいいかなと。もしかしたら自主的コンサートが年1回になっても、残りの4回がほかからやってくださいと言われてれば、私たちはボランティア演奏でお伺いしますという気持ちで続けていきたいと思っています。

○中川副委員長

ありがとうございます。

○大江委員長

じゃ、草野さん。どうぞ。

○草野委員

ありがとうございました。アンケートの中で78ページの利用者の声の中で、9カ月の子ということで、本当に対象とされている方がご参加されていたんだということがよくわかりました。

1点、授乳室でも聞いてよかったというのが、私、とても画期的だなと思って、授乳室が近くにあったとか、何か聴けるような工夫をされていたのかなとか、もしあればお知らせください。

○三輪（湘南Liebe）

文化会館の一番後ろにピアノの倉庫があるんです。そこにグランドピアノが普通しまつてあるんですけども、そのピアノは出すので、そこが空いたんです。そこにパーテーションをつくりまして、そこを授乳室にしました。

あと、おむつ替えなんですけれども、非常に残念なのが文化会館のつくり方で、おむつ替えのコーナーがすごい遠いところにあるんです。これはどこに言ったらふやしていただけるのかを本当に考えたいです。1階の近くのおトイレにはおむつ替えのコーナーがないんです。先ほどもおっしゃったように、障害者のおトイレ、ああいうところに変な踏み台があるんです。踏み台というか、変えるような。でも、そのつくりはすごく障害者用だよ、

おむつも替えられるよとって、使う人の気持ちを考えていなくつくられたおトイレの中身なんです。だから、そこをもうちょっと考えて、せつかく新しくリニューアルしたので、考えていただければいいかなと思っております。おむつ替えも次回からは授乳室の横にマットを敷いて、そこでも替えられるようにしていきたいなと思っております。

○大江委員長

それでは、以上で時間がまいりましたので、どうもありがとうございました。（拍手）

○事務局

湘南Liebe様、ありがとうございました。

続きまして、ミナスタ様より「～サッカーを通した運動教室事業～」実施報告をいただきます。ご準備よろしく申し上げます。

○三浦（ミナスタ）

ミナスタの三浦です。よろしく申し上げます。

今年度、「～サッカーを通した運動教室～」をやらせていただいております。

皆さんのようにわかりやすいような写真などもないんです。ちょっと苦手できなくて、あと、しゃべるのもちょっと苦手、聞きづらいところがあると思うんですけども、何かあったら、途中でいいので、合いの手をお願いします。

1年間を通して「～サッカーを通した運動教室～」の活動をやってきました。ミナスタというのは、最初、始めたきっかけが、まず体を動かすこと、体を動かすことを楽しんでもらうこと、あと、共働き世帯がふえている中、保育園がたくさんふえて、その子たちの親から、運動できる環境がないんだよ、だったら自分がやろうという形で始めさせていただきました。

当初の予定では、年間で72回を目標としていたんですけども、ほかの保育園もやりたいということで、年間で92回「～サッカーを通した運動事業～」を実施いたしました。毎月、300名程度の子どもたちと定期的に関わっています。

一番難しかったことなんですけれども、子どもたちは機械じゃないので、どれだけ子どもたちの表情を見ることが大切なのかなという部分がありまして、一人一人違うので、どの言葉が響いているのかな、どのしぐさがこの子にはいいのかなということを毎回考えながらやっています。

今年度はげんき基金を活用しないで活動を開始しているんですけども、今年度も大体90回ぐらいを目安に年間スケジュールを立てています。

それと、サッカーを通した運動教室の時間なんですけれども、保育園の午前中の時間を使ってやらせていただいております、親が見る機会がほとんどありません。それなので、昨年度は、サッカーを通した運動教室見学会という形で年に3回やりました。そのときに

は、子どもたち30名と保護者が69名参加となりました。第2回目の見学会では、えのぼ（えのしま・ふじさわポータルサイト）の方が来られて、そこに掲載したいということで掲載していただいたりしました。

継続性を図る事業として、ホームページをつくって、チラシなども配らせていただいたんですけども、まだまだ周知されていない部分があるのかなというふうに課題は感じています。

昨年度は1人でずっとやっていたんですけども、今年度から協力してくれるボランティアの人も出てきたりして、やっとようやく2人で活動をする状況になっております。

あとは、すいません、何か質問があったら言ってください。お願いします。（拍手）

これ、実際に保育園の保護者の方たちから署名とかコメントをいただいていますので、僕が書いてやるより、いいことも悪いことも書いてあると思いますので、ぜひ目を通していただければと思います。上のほうにコメントが載っていますので。いいですか、お配りしていつて。すいません、これが園ごとにまとまっています。これ全部同じじゃないです。全部一つ一つ違う。

○事務局

ありがとうございました。それでは、質疑応答に移ります。大江委員長、お願いいたします。

○大江委員長

発表時間が余裕があったみたいなので、6分以上できますね。

○事務局

そうですね。

○大江委員長

じゃ、どうぞ。高橋さん。

○高橋委員

どうもありがとうございました。1人でやられているということで、以前、お話を聞いたときもとてもびっくりした印象があるんですけども、活動回数も当初予定よりふえています。これ、ふえていくということは、評判がいいと。広まると。そうすると、どんどんうちも、うちもというふうに、きっと出てくると思うんですね。そうすると、ボランティアの方が1人お手伝いしてくれるというお話でしたけれども、多分1人じゃ足りなくなっていくんじゃないかなというふうな気がします。この先、もし活動が広がった場合に、賛同者、協力者をどう得ていくのかというところをお聞きしたいのと、あと、サッカーを

通してということですがけれども、いろんな園が絡んできたら、自分なんかは、小さい大会とかをやってもおもしろいんじゃないかなというような考えもあるんですが、そこら辺の将来的な展望もお聞かせ願えたらと思います。

○三浦（ミナスタ）

数がふえてくると1人じゃ足りないという部分は、現状、昨年度もすごく感じていました、手伝ってくれるよという人もいますけれども、大切な子どもなので、どれだけ子どもたちのことを思っているのかという話を聞いていると、サッカーが好きだからサッカーをやってもらいたいんじゃないなくて、「サッカーを通して」というのを一番にわかってもらいたいという形でやっていて、現状、やりたいと言っている保育園もあるんですけれども、待ってもらっている状況です。

それで、大会をやってもおもしろいというところなんですけれども、園同士が近いところは、実際に昨年度、園同士の交流という形で日程を合わせて公園を借りて、園同士の試合をしたりというので、こちらにも書いてあるんですけれども、今年度、そういう交流の機会をふやそうと思って、試合というスケジュールを書いてあるんですけれども、交流試合という形で、近く同士のそういう兼ね合いもスケジュールに入れていきます。それなので、そういうのもっとふやしていければいいなと思います。

○大江委員長

伊藤さん。

○伊藤委員

どうもありがとうございます。私も茅ヶ崎一中でサッカーをやっていたんですが、そこらからサッカーの同級生とか同窓生はすごくいると思うんですね。OB会活動も盛んなんですが、どうしてボランティアは1人しか集まらないんでしょうか。茅ヶ崎、もう少しサッカー人口、あるような気がするんですけれども、一番大きな原因は何だと思えますか。

○三浦（ミナスタ）

現状、平日の午前中にやっているの、皆さん、仕事があります。

○伊藤委員

僕のように県大会で優勝した世代を含めて、今、67～68なんですね。その人間はまだ元気でやっていますので、ぜひそういうシニアに、もう年金生活をしている人たちに声をかければ、何とかなるような気がするんですけれども。

○三浦（ミナスタ）

そうですね。一度、もし興味がある方がいたら、ご紹介していただければ、お話を聞いてみたいと思います。

○大江委員長

どうぞ、中川さん。

○中川副委員長

予算のところを見ているんですけども、デザイン費とか雑費が決算額がゼロになっていますけれども、ホームページをつくって宣伝するというのがげんき基金の応募された主な理由だったと思うんですけども、このほうはどのようなことでゼロとなったのでしょうか。

○三浦（ミナスタ）

基本的にチラシとかも自分でつくってやっていきました。募金箱を最初設置する予定だったんですけども、そういうので集まった寄附で新しい仲間の時間を買うという意味で作り出していけばいいなと思ったんですけども、保育側から、そういうのはちょっとできないかなということで、募金箱の設置もやめて、そこに置いておくパンフレットをつくる予定だったんですけども、それもなくなって、そういう意味でデザイン費とかはゼロになりました。

○中川副委員長

保育園との調整がということですか。

○三浦（ミナスタ）

そうです。保育園に募金箱が置けないということ。

○中川副委員長

わかりました。

○大江委員長

ほかはいかがでしょうか。椎野さん。

○椎野委員

この事業は、今の子どもは体をなかなか動かさないなので、私は非常に期待しているんですけども、先ほどもありまして、こちらにも書いてあるんですけども、保育園同士の

交流試合というのがすごく望まれているのが書かれていますよね。これをつぶしてしまうのはもったいないので、先ほどご意見が出ましたように、地域のシニアの方をもっともつと活用し、きっと強い思いがおありだと思うんですよ。サッカーに対して。だから、自分のポリシーを伝えたいから、あまり余計なことをごちゃごちゃ言うようなおじさん、おばさんはいいよというような感じもおありなのかなと思いますが、そこはちょっと引いて、子どものために、誰のために、子どものためということで、子どもに視点を置いて、子どもたちが楽しくて、試合ができて、大きく伸びていってくださればいいなということで、少しずつそういう方をおふやしになって、できれば交流試合を楽しくやって、スポーツマンになってもらうようにしていただけるといいなと思って、これは要望でございます。

○三浦（ミナスタ）

ありがとうございます。

○大江委員長

何かお答えは。

○三浦（ミナスタ）

確かにそういう自分もいますので、子どもたちのために動けるようにしていくのが一番いいのかなというふうに思って、あと一つ思ったのが、サッカーだけをやっていればいいとは全然全く思っていないくて、いろんなことを子どもたちに経験させたくて、今年度も保育園に提案したのは、タヒチアンダンスの先生が子どもたちに伝えたいことがあるからやりたいというのを保育園に伝えたいんですけれども、やっぱり知らない人は、ちょっとやめてくれということで、そういう機会がなくなったりというのはあるんですけれども、そういうところもサッカーだけじゃなくて、違うことも子どもたちに経験させてあげたら、たくましくなっていくのかなと思いつつやっています。

○椎野委員

よろしく願いいたします。

○大江委員長

草野さん。

○草野委員

各保育園での教室が物すごく盛況で人気があるというのは、このアンケートも含めて理解できました。今回つくったホームページも見させていただきました。確かに明るくて元気が出るようなホームページでございました。ただ、今できたからこれで終わりじゃなく

て、先ほど苦手と言っていましたけれども、やはりメンテして行って、さらに磨きをかけて、これを理解していただきたいというところが必要だと思いますので、サッカーを知らない人でも、あなたが応援したいという方はたくさんいると思うので、例えば、ホームページだったら、私、更新してあげるよとか、そういう仲間を含めて募って、この運動を続けて行ってほしいなと思います。いかがでしょうか。

○三浦（ミナスタ）

ごもっともだと思います。そういう仲間も、どうも人に頼むのが苦手で、皆さんお仕事でお忙しい中、それを頼むことによって、もちろん引き受けてくれる仲間もたくさんいるとは思いますが、その人の時間を考慮すると、それも凶々しく言えない自分がいて、それだったら自分でやったほうがいいのかというふうに思いながら、昨年度も全部やらせてもらったんですけれども。

○草野委員

1人、2人の中だと限度がありますので、こういう事業を伸ばすという意味では、周りの人たちの助けを借りるというのも必要だと思いますので、今後ご検討いただければと思います。

○三浦（ミナスタ）

ありがとうございます。

○大江委員長

ほぼ時間がまいりましたので、以上とさせていただきます。どうもありがとうございます。（拍手）

○事務局

ミナスタ様、ありがとうございました。

以上で予定しておりました7事業の報告が終了いたしました。ありがとうございました。

ミナスタ様はお席にお戻りください。ありがとうございます。

それでは、この後、総括質疑として全体での意見交換を行いたいと思います。

この総括質疑は、市民活動推進委員が皆様の発表を伺う中で全体に問いかけたいと感じた内容ですとか、あとは、市民活動団体の皆様が事業を実施する中で感じた内容などについて、自由に意見交換をする場でございます。市民活動げんき基金補助事業の今後の発展につながるものでもございますので、ぜひ積極的な発言をお願いしたいと思います。

それでは、総括質疑に移ります。大江委員長、よろしく申し上げます。

○大江委員長

今、司会の勝山さんからご紹介があったとおりなので、こうやって複数の活動についてのご報告を聞いて、また、委員の皆さんからの質問やコメントを聞くと、いろいろ思い浮かぶ、刺激される部分があって、こんなことを少し話題にしてみたいということがあるかと思うんですが、まず、委員の側から、こういうことを議論したいな、意見交換したいなということがあれば、ご提案いただきたいんですけども、いかがでしょうか。すぐにはなさそうかな。では、ちょっと考えておいていただいて、それでは、きょう、お集まりの皆様の方から、何かご発言。どうぞ。

○加藤

すみません。市民活動をやっていない、コミュニティビジネスをやっております加藤と申します。げんき基金には既に10年にわたって500回、毎年、大体20万ぐらいを寄附させていただいております。ことしは大きな病気をしまして、2カ月ほど休みましたけれども、目標の20万はクリアしたいなと思っています。

毎回、プレゼン、実施報告書を聞くのを楽しみにしています。というのは、皆さんと違って、私はビジネスをやっておりますので、ウィン・ウインの関係でこういうビジネスができないかなというふうに考えております。一応、私は柳島スポーツ公園の利用者懇話会という公務、茅ヶ崎の銀座商工会という商業者の団体の会長をやっておりまして、その立場からもできるのではないかなということで、お話をさせていただきたいと思います。

先ほど、要約筆記のお話がありましたけれども、これなんかも、収支決算書などを見させていただきますと、これをうちでやったら、ラストの茅ヶ崎ホールは要らないよな。字幕のアドバイザー謝金。これは逆に、うちが金を出してもいいんじゃないかな。それから、あと、映画のチラシ代。これもうちが出せますよね。映画使用料。これは、要約筆記の場合なんですけれども、うちでも茅ヶ崎映画祭に、去年は山田耕筰が出演している『ここに泉あり』。ことしも、先ほど映画祭で、84歳、超高齢化社会を狙って、山形県鶴岡の渡辺という監督さんがやっているんですけども、全国の映画で、ドキュメンタリーは人が集まらないとさっき聞いたんだけど、逆ですよ。大阪はもう結構ソールドアウトになっています。そういう面では、ドキュメンタリーと要約筆記を合わせて、来年できるんじゃないか。そういうこともぜひ考えていただきたい。

それから、今、柳島スポーツ公園と駅前は、無料送迎バスが走っています。しかし、見てもらうとわかるんですけども、12時半とか1時に、行きは空の送迎バスが多いですよ。そういうところで、先ほど、ラボを使ってやっていられたということなんですけれども、ラボとそういうところでやるのと、それで、なぜ私がこれを言うかということ、エメロードを無料送迎バスが走ってもらえないかということで提案するためにこれをやったので、皆さんのように単なるボランティアという形ではないです。なぜそれを言うかということ、あそこのエメロードを走ることによって、皆さんにエメロードのお店を見てもらう。そう

いうこともあったんですが、今、それができていないなというところと、それから、そこでやるのであれば、映画もできますし、トイレもバリアフリー、赤ちゃんのおむつを替えるところも、茅ヶ崎の中でこれほど進んでいるところはないかなというので、ぜひ、皆さん市民活動の団体の方もそれを考えていただきたいな。無料送迎バスも午後からは1時間に1本走っています。それを利用してできる。げんき基金をこれからもどんどん利用して、あと10年はうちは年間20万はノルマでやろうかなと思っていますので、なくなることはないと思います。よろしくお願いします。

○大江委員長

ありがとうございます。

それでは、今、ある種の支援の仕組み、特に、資金が循環するといいますか、そういうことについて、もっといろいろ可能性があるんじゃないかというご発言だったかと思いますが、僕もちょっとそれはきょう感じていて、とても勉強になった発言だったんですが、この点をめぐって、少し意見交換できればと思いますが。

さっき中川さんは少しそんなことをおっしゃっていたような気がするんですが、いかがでしょうか。

○中川副委員長

発表を聞いていまして、それぞれの発表のベースにある共通性みたいなのをちょっと感じまして、どういうことかという、要は、美術とか絵画とか映像とか、あるいはファッションショーとか、公園の憩いの場もそうですけれども、ある種の文化的な領域と福祉的な領域というか、そういうものがベースに皆さんの中に、その必要性を感じていらっしゃるし、そういう技術力もあるし、そういう広がりも持っていていらっしゃる。そういうことが茅ヶ崎の特徴だというふうに感じまして、もうちょっとそれをコンセプトにして盛り上げていくというか、茅ヶ崎の独自性を盛り上げていくような市民的な動きというのを痛感して、そこをもう少し大きなコンセプトで支援するような市の立場とか、あるいはNPOの立場とか、そういうものがあると、もっともっと活力を持っていくんじゃないかなというか。そういうような気がしまして、とても明るいものを感じました。

そういう中で、それぞれ資金的な限界とか、いろいろあると思うんですけれども、ネットワークができる中でそういう資金的なものも含めて、今おっしゃったように、ある程度のものでできていくのではないかなと。そういう独自性、自律性みたいなものを確保できるのではないかなというふうな感じがしまして、大変心強く思いました。ありがとうございました。

○大江委員長

中川さんは横浜でずっと働いていらしたので。でも、茅ヶ崎在住なので、今は市民とい

う立場でここでやっていらっしやいますけれども。

どうでしょうか。今、中川さんからご提案というか、ご指摘があったような点について。どうぞ。

○廣田（Hearts（ハーツ））

今までげんき基金のこういった場には何回か出させていただいて、支援してくださっている方と初めてお会いしたので、ご意見を伺えてよかったなと思います。

僕がこのげんき基金でお話をさせていただいてずっと感じたのが、一番最初に140の事業に支援しているというお話があったと思うんですけども、僕が勉強不足というのがあるんですけども、知っているのは、30年度と31年度の事業の方たちしか知らないんですよ。なので、僕がある意味そういったところに調べていない、自分から動いていないというのもあるかもしれませんが、多分、調べようとしらない人たちにどれだけ届くのかというのは、今の時代にとってはすごく大事なのかなということを考えると、げんき基金というもののシステムというか、あり方的な部分で、もうちょっとこうだったらすごくよかったなという感想があって、それは、資料というか、スライドをつくってきたので、ちょっと見ていただいても大丈夫ですか。すぐ終わるので。

○大江委員長

どうぞ。

○廣田（Hearts（ハーツ））

（スライド）

これはあくまでも僕の個人的な意見がかなり入っているので、こうじゃなかったら大変申しわけないなと思いつつ、お話しさせていただきたいと思うんですけども、げんき基金さんがあって、市民の方から支援いただいているという形でスタートさせていただいているんですけども、僕はこっち側の立場として今回関わらせていただいて、げんき基金さんに申請とか相談とか報告とかをやらせてもらって、こちらの市民の方々のお金を伝わっているというか、いただいているような形になると思うんですけども、僕が感じたのは、ここの境界線があるなと正直思ったんですね。

それはどういう境界線かというと、市民に対して僕らがダイレクトに何か発信することができないのかなとか、市民の方たちが僕らの事業を見てどういう感想を得たかということをもっと聞きたいなというのが正直なところで、僕自身は、ただ事業をやりたいから、げんき基金さんをお願いしているというだけじゃなくて、市民の人たちに対してもっと伝えたいことだったりとか、市民の人たちが求めているものを提供したいなという部分が強いので、そういったところを反映していきたいなと正直思ったので、僕が昨年度クラファンをやったすごくよかったなと思ったのは、たくさんの方が応援してくれたんですが、ク

ラファンで支援してくれた人たちは、茅ヶ崎の人よりも圧倒的に全国、違う方々のほうが多かったので、そういうことを考えると、僕のクラファンの成果としては、バリフェスが茅ヶ崎以外のところで広まったというところはあるのかなと思います。

そういった経験を踏まえてなんですが、ちょっと形を変えて、こういう形にそれぞれの立場を置き直して考えてみようと思いました。間に、例えばクラファンが入る。そうすると、僕ら事業者側と市民の方々の声がよりダイレクトにスムーズにやりとりすることができるかなというふうに思ったのと、先ほどミナスタさんが、写真など資料お持ちしていないというお話を伺ったんですが、僕個人的には、多分僕の甥っもお世話になっている可能性があるし、僕の友達の子どももお世話になっている可能性があって、何か、写真だったりとか、そういった活動をもっと早く知れたらよかったなというのが正直あるんですね。ここに集まっている方々はそれぞれの事業はすごく魅力的だなと思うし、もっとより詳しく知ったら、おそらくコラボレーションできることはいっぱいあるのかなと思っていて、その辺も含めて、よりスムーズにやりとりができるような形ができれば、市民の方々、今、げんき基金を知っている人以外にも伝わって、そこにたくさんの「いいね」というか、そういった応援する形がふえるのかなというふうに思うと、ここの、さっきの境界線をなくすような動きができればいいなと思います。

それは、僕自身、今、その事業を継続していかなければいけないという思いもすごくあるので、ことしはスポンサー活動とかいろいろしなければいけないなと思いつつあるんですけども、多分140あった団体のそれぞれの方々も同じような思いでやってきたのかなと思うと、ちょっとシステムを変えるだけでも、継続性だったりとか、市民との関わり方は変わるのかなと思いました。

以上です。（拍手）

○大江委員長

ありがとうございます。とても大事なご提案で、私が今見ながら思ったのは、げんき基金の丸とクラウドファンディングのところの関係はどういうふうになるんだろうなというふうに思いながら見ていたんですけども、市民活動推進委員会、そしてげんき基金を所管している、これは半分税金なので、そういうげんき基金のあり方と、げんき基金で出てきた活動をさらに広げていくときに、我々、質問として、この後げんき基金がなくなったらどうするんですかというような質問をよくするんですけども、そういう部分をそれぞれ個別に何かおやりになるだけじゃなくて、もう少しそこを支えるような、プラットフォームという言い方がいいのかどうかわかりませんが、何かしらがあるといいなという感じがしているわけですね。

そして、それは、今、1つとしては市民活動サポートセンターのサポセンがあるわけですけども、そのサポセンも非常に多様なお仕事をされていて、かつ、仕事の内容は、市からのある場所の指定管理者として、建物の機能をきちっと生かすためのという形で、指

定管理のお金が出ているという中で、活動の制約もあるような感じもするんです。そこからもう一つ、何か発展した形があるといいなというふうに思っていますので、その辺は、これからの市民活動推進員委員会の中でも議論していただきたいというふうに、他人事のように言って、私の任期は終わりなので、次の期のテーマとして、中川さんはずっといらっしゃいますので、中川さんが中心になってやっていただきたいというふうに思っていますので、非常にいい課題を提示していただいて、とてもよかったですと思います。

何かほかにご発言したいという方がいらしたら。どうぞ。

○宇田川（ツインウェイヴ北口ガーデンクラブ）

ツインウェイヴ北口ガーデンクラブの宇田川です。

先ほど、私はこのげんき基金を頂戴するに当たって、いただくまで、ほかの団体でも機会があったりしたんですけれども、げんき基金を取ったことによって、どこかのマッチングだとかコーディネートしていただけるのかなというのが取る前の疑問だったんですね。先ほど、非常にすばらしいクラウドファンディングを入れたらという意見が出ていたんですけれども、例えば、きょうのプレゼンのようなものも、市のホームページからそれぞれプレゼンテーションを流していただいたりとか、何か1つあることで活動を知ってもらいきっかけになるのかなというふうに考えてみたり、私たち、市民活動で資金源がなくて、いろいろなご苦勞を皆さんされているんですが、私自身も、民間の助成金、その他企業協賛をつけているんですね。その企業協賛、あればあるほどありがたくて、それは本当にウィン・ウインの関係に落ちていくというのは、もちろんSNSも細々ながら私もしているんですけれども、互いがマッチングしてウィン・ウインになってお金を出していただくというのはすごく大きなことで、それが届くような機会というのはやはりプレゼンなのかなと思ったりするんです。

だから、市民自治推進課だけに終わらず、ここに、例えば、産業関係の企業が並んだりしていれば、即マッチングであったりとか、団体同士がマッチングできるように、休み時間に、よく国際展示場に行くとかマッチングブースみたいなどころがあるじゃないですか。その話し合いのブースを持っていただくというだけでも、随分広がりがあるんじゃないかなと思います。

以上です。

○大江委員長

ありがとうございました。

それでは、よろしいですか。ほぼ時間ですけれども。伊藤さん、短めにどうぞ。

○伊藤委員

私も委員を6年やらせていただいて、大江さんと同じ思いです。先ほど、バリアフリー

の方がお書きになった三角形がありますが、とかく世の中は評価であるとかインパクトであるとか、社会に貢献するという形で、市民活動が少しおかしい形になってきていると思います。マイノリティ、マイナーな方々が市民活動をするのであって、それがお金という問題になると、どちらかというところではマジョリティの方を説得しようとする。やはり、市民活動というのは、マイナーな方々、マイノリティな方々とお互いつながり合って、それを力にしてマジョリティを、メジャーなイシューを変えていくということをししないと、雲をつかむような話になると思うんですね。だから、先ほどの三角形は、六角形とか八角形になって、事業というのがたくさんつながっていく。そこに肝があって、この後午後には、マジョリティとマイノリティがつながる協働事業というのがありますが、市民活動というのは、マイナーな者同士がつながっていく、そこで力を得ていくということが大きなことだと思うので、ぜひともクラウドファンディング以上に、マイナーなほかの事業とのつながりを求めて、あるいは探していくという努力を皆さんにさせていただきたいと思います。

○大江委員長

だんだん任期が終わりになりますと、いろいろ思いが募ってくるので、そういうのを我々もまとめたほうがいいかもしれないですね。

ということで、げんき基金、本当にきょうは元気をいただくような事業ばかりで、とても刺激を受けて、こういうときにいろいろなことをまとめておくと本当はいいんですね。少しするとまた忘れてしまったりするので、私も2年前まで大学教員をしていましたけれども、授業の終わった後が一番の刺激があるときなので、そのときに次の授業をどう改善しておくかというのをちゃんと用意すれば、授業はどんどんよくなるという鉄則があるんですけども、すぐ次のことに取り組みなきやいけない、なかなかそれをやらないということをやっていたんですが、今回は、刺激があるうちに何か後に残すことにつながることでできればというふうに思っております。

ということで、きょうの午前中の、僕のコメントというのがあるんですけども、以上がコメントでございまして、もうだいたい皆様お腹がおすきだと思いますけれども、午前中の市民活動げんき基金の補助事業に関する実施報告会をこれで終了ということにさせていただきたいと思います。どうも長時間ありがとうございました。（拍手）

○事務局

大江委員長からもございましたが、以上をもちまして、平成30年度実施市民活動げんき基金補助事業実施報告会を閉会したいと思います。

事務局からも1点だけつけ加えさせていただいて、今ご指摘のありました制度そのものの周知ですとか、あとは横のつながりの形成の場づくりというのは、我々も常日ごろから必要などころだなと感じていたところではございますので、今後、事務局の中でまた検討を重ねまして、いいご報告ができるように努めてまいりたいと思います。

それでは、会場の出口におきまして市民活動げんき基金の募金箱を設置させていただいておりますので、お帰りの際にはぜひご協力をいただけますと幸いです。

本日は長時間にわたりましてありがとうございました。（拍手）

（協働推進事業実施報告会）

○事務局

皆さま、こんにちは。本日は、お忙しい中お越しいただきまして、誠にありがとうございます。ただいまより、「平成30年度実施 協働推進事業 実施報告会」を開会いたします。本日の司会進行を務めます市民自治推進課の遠藤と申します。よろしくお願いたします。はじめに、市民活動推進委員会の大江守之委員長より開会のご挨拶を申し上げますとともに、各委員をご紹介いたします。

○大江委員長

皆さま、こんにちは。ただいま、ご紹介にあずかりました市民活動推進委員会委員長の大江でございます。委員を代表いたしまして、一言ご挨拶申し上げます。

茅ヶ崎市が行う市民活動団体への支援事業は主に2つで、本日午前に報告のあった「市民活動げんき基金補助事業」と、本日このあと報告のある「協働推進事業」となっております。

この後ご報告いただく「協働推進事業」は、市民活動団体の皆さまと行政との協働を通じて、市民活動団体の皆さまの持つ独自の「アイデア」や「専門性」を生かしたより良い公共サービスを創出し、公共サービスの担い手の多様化・適正化を目指す事業として、平成18年度から実施されているものでございます。

本日は、平成30年度に協働推進事業として実施いたしました7事業について、事業の成果をご報告いただきます。報告にあたりましては、事業の実施状況に加えて、協働プロセスや当事者評価の結果についても、うまくいった点、逆に課題が残った点なども含めてお話しいただきたいと思います。

我々市民活動推進委員は、事前にいただいた実績報告書や事業に関する資料と、皆さまからの発表を受けて、今後の活動の発展に向けてお役に立てるよう、また市民活動を推進する立場から、質問やコメントをさせていただきます。よろしくお願いたします。引き続き、市民活動推進委員をご紹介申し上げます。

草 野（くさの） 委員でございます

椎 野（しいの） 委員でございます

秦 野（はだの） 委員でございます

石 田（いしだ） 委員でございます

北 川（きたがわ）委員でございます
高 橋（たかはし）委員でございます
中 川（なかがわ）副委員長でございます
伊 藤（いとう）委員でございます
岩 壁（いわかべ）委員でございます
水 島（みずしま）委員でございます

本日は以上11名の委員で、実施報告会を進めてまいります。

なお、市ホームページには本日の会議録を掲載しますが、議事録の署名については北川委員にお願いします。よろしくお願い致します。

○事務局

続いて、茅ヶ崎市長 佐藤光より、一言ご挨拶を申し上げます。

○佐藤市長

改めまして皆さまこんにちは。ご紹介いただきました、市長の佐藤でございます。本日は土曜日のお休みの方もいたかもしれません、たくさんの皆さまにお集まりをいただきまして、心から感謝したいと思います。

行政だけではなかなか太刀打できない問題もございます。そういった問題に対して各種団体の皆さまと共にいろいろな事業をこなしていただいていることに、心から敬意を表したいと思います。また、委員の皆さまにも今期で任期を全うされる委員さんもいらっしゃるというふうになっております。委員は変われど、これからも茅ヶ崎の町づくりのためにご尽力を賜ればと思っております。どうしても行政の職員というのは異動がございます。いろいろな事業を継続してやっていかれる事業もあるかもしれませんが、どうしても職員の異動というものがああります。しかしこういった報告会をやることによって、こういった事業がここにはあるんだ。そういった気づきに、職員としてはそういう場にさせていただきたいと思っております。この報告会が実のある報告会になっていただきたいというふうに思っております。余談でございますけども、先日、茅ヶ崎市が来年のオリンピック、パラリンピックに向けて北マケドニア共和国のホストタウンになりました。選手の交流はありますけども、文化的交流、さまざまな経済交流をやっていきます。その前に北マケドニア共和国ってどこよってみんなに言われてしまうんですけども、ギリシャのちょっと上あたりですね。ヨーロッパの国でございますけども。マザーテレサの出生地です。そういったところとホストタウンを結ばせていただきました。マザーテレサの言葉の中に、愛の反対語は、私なんか単純だから憎しみと思ったんですけども、愛の反対語は無関心。愛の反対語は無関心。今日お集まりの皆さまは茅ヶ崎に大変関心を持っていただいている人ばかりでございます。どうぞその茅ヶ崎愛を、この茅ヶ崎という町づくりにもっともっと発展させていただくことをお願い申し上げまして、ご挨拶とかえさせていただきます。どう

ぞよろしくお願い致します。（拍手）

○事務局

ありがとうございました。本日、市長は他の公務のため、ここで退席させていただきます。それでは、本日の実施報告会の流れについて、簡単にご説明申し上げます。冊子の1ページをご覧ください。本日、これから17時ごろまでのお時間で、平成30年度に実施した協働推進事業7事業について、実施報告をしていただきます。お配りしております水色の表紙の冊子の1ページをご覧ください。まず、30年度を1年目として実施した2つの事業について、最初に10分間で報告をいただき、続いて市民活動推進委員会と10分間の質疑応答を行います。次に、30年度を2年目として実施した5つの事業について、最初に10分間でご報告いただき、続いて市民活動推進委員会と6分間の質疑応答を行います。報告の時間管理について申し上げます。

開始から半分の5分を経過したところで、1度ベルを鳴らします。

（ベルを1回鳴らす）

次に、終了1分前に、再度、ベルを鳴らします。

（ベルを1回鳴らす）

予定時間の10分を経過したところで、2度ベルを鳴らします。

（ベルを2回鳴らす）

報告者の方は、2度ベルがなりましたら、途中であっても速やかに報告を終了してください。1年間の成果を10分でまとめることは大変なこととは思いますが、円滑な進行にご協力いただきますようお願いいたします。報告が終わりましたら、市民活動推進委員会委員からの質問やアドバイスなどを行います。1年目事業は10分以内、2年目事業は6分以内を予定しています。質疑応答の途中で、ベルが鳴りましたら、その質疑を最後の質疑とさせていただきます。質問される委員及び回答なさる団体の皆さまには、1問ずつ、できるだけ簡潔なやりとりをお願いしたいと思います。また、報告会を円滑に進行するため、次に発表される団体・担当課の方は、直前の報告中に、前で待機していただきますようお願いいたします。職員がご案内いたします。全7事業の報告・質疑応答が終了した後、総括質疑として、全体での意見交換の時間を設けておりますので、各団体・担当課の皆さまは、ご自身の報告が終了した後も、ご退出なさらないようお願い申し上げます。実施報告会の終了は、16時55分ごろを予定しております。

なお、報告会の様子は、写真撮影をし、市ホームページや広報紙等に活用させていただく場合がございます。予めご了承くださいませよう、お願いいたします。

○事務局

それでは、「（仮称）茅ヶ崎公園体験学習施設『はまかぜ菜園』等管理運営事業」、半農半Xを楽しむ会の皆様からの実施報告です。ご準備よろしくようお願いいたします。

○長谷（半農半Xを楽しむ会）

では、皆さん、こんにちは。半農半Xを楽しむ会、長谷と申します。よろしくお願いいたします。

○辻（体験学習センター）

体験学習センターの辻と申します。よろしくお願いいたします。

○滝脇（体験学習センター）

同じく体験学習センターの滝脇と申します。よろしくお願いいたします。

○長谷（半農半Xを楽しむ会）

では、早速始めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

では、「はまかぜ菜園」の概要、説明のほうをさせていただきたいと思います。

「はまかぜ菜園」は新しくできた建物になるんですけれども、茅ヶ崎市の中海岸の球場横に新設された複合施設である「うみかぜテラス」の2階屋上にある58平米の菜園になります。

コンセプトとしましては、子どもからお年寄りまでが同じ空間で楽しく学び合いながら植物を育てていく場を提供しながら、かつ、景観も彩り豊かに楽しめるような空間を目指すということで、本当は楽しむだけではなくて、かわいくきれいに、そんなところで、なおかつ、今回、青少年からお年寄りのほうまで、万遍なく皆さんが楽しめるようにという空間を目指してつくられた施設ということで聞いております。

「はまかぜ菜園」、これはビフォア・アフターのビフォアになるんですけれども、最初見たとき、何もない殺風景な形だったので、ああ、これ、どうしようかなという思いにかられた記憶があるんですけれども、こういった58平米のちょっと湾曲したような土地になります。

我々「半農半Xを楽しむ会」という名前で結成させていただいております。主要メンバーは、6名プラスアルファでやらせていただいております。

「半農半X」という言葉自体が初めてお聞きになられる方もいらっしゃるかもしれないんですけれども、半分農業、半分Xということで、半分農業というのは何となくイメージがつくかなと思うんですけれども、Xというのは、人それぞれ、好きなことであるとか、得意なことを提供しながら、それをなりわいにしたり、人のために役立てたりとか、世のために役立てたりとか、まさに茅ヶ崎というのは、皆さん結構好きなことをやられながら、ライフスタイルを楽しく過ごされているのではないかなと思っていまして、特に海側に行くと、平日でも波があるとサーファーたちがたくさん出歩いていたとか、そんな形で自分自身の人生を非常に楽しまれている。そこに農業という彩りを加えることによって、さ

らに自給自足的、自分の食べ物を自分でつくる、プラス楽しいことをやっていくということで、非常に茅ヶ崎向きなんじゃないかなという個人的なところもあって、これを茅ヶ崎を拠点に、茅ヶ崎愛あふれる僕たちの思いを出しながら、同志を募っていきたいと思っております。

平成30年度の実施内容としましては、主に2回に分けて実施させていただきました。第1回目は、シンプルに、ポタジェとはなんぞや。これはフランスの家庭菜園といたしますか、果樹もあれば、野菜もあれば、ハーブもあれば、お花もあるという、本当に彩り豊かな菜園になるんですけども、その辺の詳しい説明といたしますか、どうやって作り込んだらいいとか、どういうものかというのを概念的なところを中心にご説明させていただきました。

第2回目は、もう少し踏み込んだ形で、水曜組と日曜クラスにそれぞれ分けて、ポタジェの勉強会だったり、野菜の作り方を机上で座学でやらせていただいたり、あと、実際の菜園づくり。これは外枠ということで、先ほどのビフォアの写真に対して、いろんな形を、道をつくったりとか、小山をつくったりとか、そういったことを実際に実施しました。

こちらは第1回目のポタジェ説明会ということで、これは座学中心でやらせていただいています。皆さんで勉強していただいて、自分の描くポタジェというのを、「はまかぜ菜園」にどういう菜園をつくりたいかというのを考えていただいて、皆さんに発表していただいたりしております。

そこで学んだことを生かして、第2回ということで、実際に菜園づくり。これはほとんど土方作業といたしますか、穴掘りだったり、道づくりだったり、力仕事を中心にやらせていただいたんですけども、こんな形で測量したりとか、山をつくったりしながら、あと、DIYとか、木を切ったりとか、レンガを合わせたり、グルグルのおもしろいガーデンをつくったり、そんなことをやらせていただきました。

そんな形で、最終的にはちょっとお花を植えて、外枠だけですけども、こんな形のベースができました。これが30回の成果となります。

実際に30年度を振り返ってみて、まず、ポタジェという名の結構自由な菜園に興味を持っていただいた方が非常に多かったと。募集してもすぐに満員御礼となりましたし、やりたい、やりたいと言ってくださる方がたくさんいらっしゃったということで、二重丸をあえて入れさせていただきました。

皆さんが本当に童心に返って時間を忘れて作業に打ち込まれる様子。新しいDIYだったり、木を切ったりとか、レンガを組み立てたりとか、そういう作業自体が多分結構目新しいというか、なかなか経験としてなかったようで、非常に楽しまれたという様子を見受けました。

こんな形で皆さんのX、自分の好きなこと、やりたいことというのをいろいろ聞きましたけれども、それが非常に素敵で、なるべく生かせる場所をつくっていきたいと思いま

した。

続きまして、31年にやりたいこととしては、さらにこういった形で、果樹だったりとか、ハーブとかお花とか野菜とかを入れて、より彩りを加えていきたい。なおかつ、皆さんのX、得意なところを引き出しながら、生かし合い、循環する機会をつくりたいというふうを考えております。

今、こういった形で野菜とかも植わって、かなり彩り豊かなビフォア・アフターという形ではだいぶ彩りも変わってきたかなと思うんですけども、こういう形で徐々に1年を通して広げていきたいと思っております。

私のほうからは以上です。ありがとうございます。

○辻（体験学習センター）

それでは、私のほうから補足という形で説明させていただきます。

「うみかぜテラス」、先ほど長谷さんからもご紹介いただきましたが、高砂通りの一番右側の球場としおさい公園と一体となって位置している場所にあります。「はまかぜ菜園」、こちら、今あるところの四角囲いになっている部分、こちらのほうに58平米ということをつくっております。

参加者の声ということで、第1弾のほうで「小さくてもポタジェのスペースが広がっていた」ですとか「公共に向く庭づくりだと思いました」ですとか「春夏秋冬のお花にお野菜が楽しめたら、あとはコンパニオンプランツ——これは植物同士の組み合わせということで——こういったのが気になっていたのを教えていただけてよかった」という、皆さん学びたいという意欲がすごく引き出せたという部分と、公共性を意識した、スペースが大きいということで、みんなで作っていくということが出来る空間だったかなと思います。また、地元でできるという地域性を発見する、ですとか、海岸地区に適したものの作物とか、そういったのを学んでいただける機会になったかなと思っております。

今後、参加者がどうしていきたいかということで、運営サポーターとして手伝いたいという方ですとか、得意分野について生かしていきたいですとか、長谷さんのお手伝いをしていきたいとか、一定数の方がいらっしゃいますので、今後、こういった方をどこまで取り込んでいけるかというところがポイントになってくると思います。

年齢構成としましては、第1回、第2回、20代と10代が厳しいところなんですけれども、40代から70代まではバランスよく参加いただけて、広い世代に訴求できたのかなというところです。

第1弾から第3弾まで参加していただいた方が4名、2弾から3弾までが17名ということで、今後も交流をしていただいて、この菜園のPRを施設のPRにつなげていきたいというところです。

説明は以上になります。ありがとうございました。

○事務局

ありがとうございました。それでは、質疑応答に移ります。大江委員長、よろしくお願いたします。

○大江委員長

それでは、質問のある方どうぞ。では、まず北川さん、それから伊藤さんという順番でお願いします。

○北川委員

どうもありがとうございます。事業の現状の中身の課題とか協働の課題みたいなものがあれば、教えていただけますでしょうか。

○辻（体験学習センター）

こちら、最後に方向性というところとも関連してくるんですけども、なるべく継続的に今まで参加してきていただいた方に引き続き参加していただきたいという部分と、あとは新規の参加者の獲得をしていきたいという、この2つをバランスをとりながら、参加者をふやしていきたいなという部分と、あと、今、春の部分をやっている中で、ようやく交流が始まったというか、参加者の方々に観察日記をつけて、今、水やりの当番を皆さんで話し合っていたいただいて、班ごとにグループで、きょうも水やりに来ていただいたんですが、そういった中で、参加者同士の取り組みということができているということで、そこをもう少し広げていきたいというところ。

あとは、個々の半農半Xの引き出しという部分で、長谷さんのところで、個人の持っている得意な分野というところを今回のポタジェに生かしていくという一つの大きな要素がありますので、前回のアンケートを見ていく中で、そういった部分がちょっと自分ではまだわからなかったですとか、特にちょっと見つからなかったという声もいただいていますので、ここがもう少し皆さんがそういったのを見つけていただける機会がふえると、もうちょっと楽しくなっていけるかなと思っております。

以上です。

○伊藤委員

どうもありがとうございました。

私も交流事業は30年近くやっていたんですが、交流事業の要は、交流する同士の関係、あるいは、そこにおける学びだと思えます。皆さんのお書きになった事業概要でも「多世代交流や多様な特性を持った人たちが交流できる直接的な効果に加え」云々とお書きになっているんですが、先ほどのアンケートでも、今のご報告でも、どうもその、こういった多世代交流、あるいは多様な特性というのが、アンケートからは見えないし、今

の報告からは見えないですね。

その点、今後、どう表現していくか。どう採取していくかという問題だと思うんですが、そのためには、先ほどグラフがありましたが、ほかにも統計をとっているんでしょうけど、年齢構成だけじゃなくて、それぞれの特性を自分自身で自覚的に表現していただいて、その特性同士がぶつかり合うことを引き出すような事業、あるいはアンケートの仕方が1つだと思うんです。そちらのほうでお考えになっている多世代交流、あるいは多様な特性をどうやってマッチングさせるかということをごどのようにお考えか、お聞かせいただければありがたいと思います。

○長谷（半農半Xを楽しむ会）

今、チーム分けを行って、それぞれ水やり当番だったりとか、実際に何を植えるかとか、そういうことはやっています、実際、年齢層がバラバラというのもあって、小学生の子も日曜クラスに来られていますし、逆に60代、70代の方もいらっしゃるの、ちょうど同じ班になって、学び合いといいますか、助け合ったりとか、実際、教え合ったりとか、そういうことをやられているので、形式上、非常に多世代の間でいろんな交流が生まれているというのは見受けられるんですけども、あとは意識的に班決めだったりとか、そういうところでもなるべくいろいろな、友達同士だけではなくて、もうちょっと多世代でいろいろな方を交流させていくことによって、より交流が生まれると思いますし、あとは、募集の仕方もしかするとあるかもしれないんですけども、曜日の設定だったりとか、実施の日程だったりとか、その辺も含めて、できるだけ多世代が集まるような設定を考えていけたらと思っています。

○伊藤委員

どうもありがとうございました。

世代、あるいは自分の特性を自覚的にすることが一番の要だと思いますので、対象化する、自分で見つけ出すということをごまずやられることが大事だと思います。

○大江委員長

中川さん。

○中川副委員長

私、すぐ近くに住んでいるものですから、海に行くときにあそこの施設をちょっと見学させてもらったりして、菜園のところも見させていただいたりしているんですけども、あそこの環境というのは結構厳しいものがあって、海風とか。「うみかぜテラス」ですから、海風はいいんですけども、かなり塩害とか、あるいは暴風雨とか、そういうところで農作物とか、あるいは植木なんかがやられたりすることも多いと思うんですね。

その辺、大丈夫なのかなということと、もう一つは、私も畑をやっているんですけども、日程的に雨とか、どうしても集まらないようなときとか、いろいろご苦労があると思うんですけども、そのあたり、どんなふうに行っているのでしょうか。

○長谷（半農半Xを楽しむ会）

まず、1点目の雨。どうしても「うみかぜテラス」という名のとおり、先日の嵐も結構な被害を受けまして、まさに風の向きがわかるぐらい、トウモロコシが全部傾いていたりとか、果樹が取れてしまっているとか、そういう被害がありまして、その対策というのは、殺菌といますか、非常に重要だと思っております。

対策としては、例えば、果樹をちょっとした丈夫な根を張るような果樹を周りに植えたりとか、ネットは張りたくないの、極力植物でカバーするところを考えながら、あとは、柔軟なといますか、風をよけるような飾りであるとか、そういったものも加えながら、できるだけ風に強い対策というのをしていきたいと思っておりますし、あと、なるべく高い植物を育てないようにしていけば、塩害といっても、さほど影響はありませんので、対応できるかな。その対策なんかも非常に勉強になると思っております。

あともう一点が。

○中川副委員長

集合時間。

○長谷（半農半Xを楽しむ会）

そちらのほうが、一応バックアッププランとしまして、座学であるとか、ちょっと料理のほうもしたいんですけど、なかなか調理室のほうがあいていない関係で、それは難しいんですけども、雨が降ったときのための土づくりのお勉強だったりとか、そういうところは適時用意しております。あとは、皆さんのXを引き出すためのワークショップのようなこともやっていきたいと思っております。

○中川副委員長

ありがとうございます。

○大江委員長

ほかはいかがでしょうか。高橋さん、続いて水島さん。

○高橋委員

どうもありがとうございました。

半農半XのXの部分ですね。好きなことというところで、ことし参加された人の中か

ら引き出されたもの、幾つか書いてある。全部見そびれちゃったんですけども、次の事業にこれは生かすんだ、こういうふうにしていきたいんだというものがあったら、お聞かせ願えたらと思います。

○長谷（半農半Xを楽しむ会）

Xを引き出すというところは、まさにこれからどんどん力を入れてやっていきたいと思っているんですが、その中で、アンケートの中でも多様に出ていまして、フラワーアレンジメントであるとか、料理を教えたりとか、あと、医療関係、東洋医学をやられていて、植物と医療のつながりについてお話ししたりとか、一部の方ですけども、アウトプットされたいという方が複数名いらっしゃって、実際に4月から仲間に加わっていただいた方もいまして、そういった形でどんどん入っていただきながらアウトプットしつつという、その循環というのをしながら広げていきたいなというふうには思っております。もっと引き出して、自分のXというのに気づいていただく、知っていただくというところをもう少し、菜園だけではなくて、そこにも同じように力を入れていきたいと思っております。ありがとうございます。

○水島委員

説明ありがとうございました。

まず感想で、「うみかぜテラス」というのは、福祉会館と海岸青少年会館の合体したような施設のイメージでいたんですが、それぞれに幅広い年代の方が参加しているので、非常にいい取り組みなんだなと思いながら拝見させていただきました。

こういう事業が行われていると思うと、こういうものに関心を持つ方がだんだんふえてくると思うんですが、幾つかで講師になっているのかもしれませんが、繰り返しいろいろなものを覚えていきたいという方と、新たに入ってきていたいという方と両方いらっしゃると思うんですが、その辺で、新たに入る方に対しての工夫とか、そういうものは何かあるんでしょうか。

○長谷（半農半Xを楽しむ会）

今考えているのは、どうしても3カ月、3カ月で切ってしまっていますので、一通りやりたいという方が多くいらしていまして、できるだけその、チームもいい形でできましたので、ある程度区切りのいいところまで続けていただきながら、とはいえ、先日も参加したいという方が何名か来られていたりとか、非常に関心を多く持たれているのかなと思っておりますので、水曜、日曜に関しては、おそらくリピーターの方が継続的にやりたいとおっしゃっていただけそうな気がするので、場合によっては、曜日だったりとか、追加クラスなんかも考えながらやっていきたいと思うんですが、ただ、物理的な菜園の面積だったりもありますので、うまく外とのつながりだったり、外の畑とのつながりだったり、

そういうところをいずれ持てると、いろんな広がりがありますし、いろんなパターンが形成できると思いますので、そういう形もご検討いただけたらと思うんですけども。

○辻（体験学習センター）

あとは、長谷さんの活動にスタッフとして入っていただいたりとか、今回の講座の参加だけではなくて、実際の運営に関わっていただけるようになってくれば、多くの方が参加できるようになるのかなと思いますので、そういったあたりも長谷さんと協力してやっていきたいと思います。

○大江委員長

それでは、時間になりましたので、どうもありがとうございました。（拍手）

○事務局

半農半Xを楽しむ会の皆様、ありがとうございました。

続きまして、「郷土資料デジタルライブラリー推進事業」、特定非営利活動法人湘南ふじさわシニアネットの皆様、ご準備よろしく願いいたします。それではよろしく願いいたします。

○小原（茅ヶ崎市立図書館）

皆様こんにちは。私、茅ヶ崎市立図書館の小原と申します。どうぞよろしく願いいたします。

○影浦（特定非営利活動法人湘南ふじさわシニアネット）

湘南ふじさわシニアネットの影浦と申します。よろしく願いいたします。

○佐藤（茅ヶ崎市立図書館長）

図書館長の佐藤と申します。よろしく願いいたします。

○小林（特定非営利活動法人湘南ふじさわシニアネット）

湘南ふじさわシニアネットの小林と申します。よろしく願いいたします。

○小原（茅ヶ崎市立図書館）

それでは、認定NPO法人湘南ふじさわシニアネットさんと協働の「郷土資料デジタルライブラリー推進事業」についてご説明申し上げます。

初めに私から3分程度、1年間の取り組みの大枠をお話しいたしまして、その後、シニアネットさんから個々の内容を詳しくご説明いただきたいと思います。一部12月のプ

プレゼンテーションと重複する部分がございますが、どうかご容赦ください。

まず、「郷土資料デジタルライブラリー」とは、図書館で持っている茅ヶ崎市について書かれた本ですとか、古い絵はがきなどをデジタル化して、インターネットで公開して、たくさんの方に見ていただくというものです。こちら、パソコンやスマートフォンで図書館のホームページのリンクボタンがここについていまして、ここから見ていただくことができます。

12月のプレゼンテーションで委員さんからご指摘いただきました不具合、スマートフォン版のメニューからリンクができないという部分も改善してございます。こちら、1月20日に公開いたしましたして、5月18日までの間のアクセス数、1万5,773件となっています。

昨年度1年間の取り組みは、こちら、スライドのとおりとなっております。定例会議は月に1回ないしは2回ときめ細やかなご対応をいただきながら、こちらの赤字で書いてございます3回のワークショップ、それから、3月のシンポジウムの開催をいたしました。それから、資料をデジタル化して、ホームページの構築、設計をしていただいて、開設後も運用、運営ですね。それから、使い勝手の向上を含めて適宜改善をいただきました。

そして、周知広報については、団体さんの強みを生かして、チラシですね。作成・配布していただきました。それから、えのしま・ふじさわポータルサイト、えのぼさんに掲載ですとか、ケーブルテレビ、J:COM湘南さんへの取材依頼をしていただきました。

市としましては、こちら、広報ちがさき1月1日号、カラーページで掲載いたしました。そのほか、市の広報番組「ハーモニアスちがさき」、こちらの特集で放送いたしました。こちら、DVDを図書館で借りられます。そのほか、インターネットのユーチューブでもご覧いただけます。10分程度になっておりますので、よろしければご覧いただければと思います。

こちらなんですけれども、プレゼンテーションでも申し上げましたとおり、この事業が委託ではなくて、シニアネットさんと協働という手法ででき得たことで、より茅ヶ崎らしい茅ヶ崎愛にあふれたコンテンツということを、市民の皆様と一緒に作りあげることができました。こちらの評価書に書かせていただいたとおりです。

しかし、同時に、著作権の問題など、課題もまだまだ多くて、道は長いなど感じております。とにかく、今、委員の皆様にも応援いただいて、はじめの一步を踏み出すことができました。感謝申し上げます。

それでは、シニアネットさんにバトンタッチします。よろしくお願いいたします。

○影浦（特定非営利活動法人湘南ふじさわシニアネット）

それでは、引き続きまして、先ほど紹介にあったいろいろなイベント、主に、大きく4つイベントを企画しまして、活動の中心としましたので、それについて詳しく述べます。

まず1つ目が、昨年6月にテーマ選定ワークショップ。何をデジタル化しようと、

その資料とそれのテーマ、カテゴリーをどうしようかというのを考えたところでございます。

当日、このような参加者を得て、アドバイザーは慶応大学の教授の方が2名アドバイザーになっております。

資料一覧とともに、現物もこのように表示して、2つの班に分かれて、どの資料をデジタル化しようと深い議論をしていただきました。議論している様子ですけれども、このように2つの班に分かれて発表をしていただきました。

これは途中経過ですが、例えば、カテゴリー、災害とか、風景、海、人物等々、こんな感じでいろいろテーマを深めていただきまして、結果的に、この8つのテーマ、ゆかりの人物、祭り、昔話・伝説、道、風景云々ですね。このような8つのテーマに分かれて400枚以上の資料のデジタル化をいたしました。このときは南湖荘様からデジタル資料を大量にいただきまして、協力していただいています。

2つ目のイベントは、昨年11月に体験セミナーというのを開催しました。これは何かといいますと、一応ホームページシステムができて、皆様に公開していこうと。その公開に先立って、いろいろ使っていただいて、意見をいただこうと、そういうセミナーを設けました。

これがセミナーの様子ですけれども、J:COMさんも取材に来てくれています。

これがセミナーの様子ですね。iPadを10台用意しまして、直接いろいろホームページに触っていただくということをやりました。

これがアンケートの結果ですけれども、ほとんどの方に「よかった」「まあよかった」と満足していただいたという結果になっております。

次のイベントは、活用ワークショップというのをやりました。これは、ことしの1月でした。一応、ホームページをリリースして、多くの皆様に使っていただき始めたところで、さらに有効に今後使っていくにはどうすればいいだろうかというので、活用ワークショップというのを開催しました。このような取材を得て、随分熱心な議論をしていただきました。

また、2つのグループに分かれて、どういう用途があるだろうかというのを教えていただきました。例えば、まち歩きとか、学校教育に使えるかとか、いろんな提案をいただきました。

アンケートの結果、大半の方に満足いただいた。いいワークショップだったなという感想を得ています。

このワークショップの結果として、参加した方々のご意見として、提案が、高齢者向けに使えるだろうと。高齢者の頭の活動をリフレッシュする。または教育現場で使えないかとか、あと、街歩きで歩きながらタブレットでいろいろ資料を見たらおもしろいんじゃないかとか、そういう提案。あと、図書館以外の施設の資料も取り入れたらどうかと、このようないろんな提案をいただきまして、今後の参考になっております。

最後の大きなイベントとしましては、シンポジウムと題しまして、慶応大学の名誉教授でいらっしゃる田村先生が「図書館の冒険」と題してご講演をいただきました。サブテーマは「～多様化する公共図書館像とデジタルライブラリー～」と。田村先生は、多くの図書館に関する著書を著していただいて、図書館学の権威の方でいらっしゃいます。

非常に興味深いご講演をいただきまして、このようなことですね。これは茅ヶ崎の図書館のタヌキの出没マップを発表してくれたりとか、あとは、長崎市立図書館とか逗子市立図書館のがん情報の図書館がいろいろ公表して、これのPVなどを参考に、非常に興味深いお話をたくさんしていただきました。皆さんには非常に満足していただきました。

今後の取り組みなんですけれども、いよいよ2年目に入りましたということで、まずは、中身を、コンテンツを、デジタル資料を充実させようと。いろいろ皆さんのお話を聞いた結果、昔話・伝説というテーマ、このあたりをまずは充実させようというふうに始めています。

あと、関係課とか、いろいろ関係サイトへのリンクですね。さらにイベントです。まずは7月に、小学生向けの夏休み自由研究応援講座というのを今考えています。あと、高齢者とかまち歩きとか、また、今年も多彩なイベントをしていこうと考えています。

以上でございます。

○事務局

ありがとうございました。それでは、質疑応答に移ります。大江委員長、よろしくお願いたします。

○大江委員長

では、どうぞご質問。岩壁さん。

○岩壁委員

どうもありがとうございました。文化といいますが、郷土資料の集約というのは大変なことだと思います。細やかな配慮をしないとなかなかできないなというふうな感じがいたします。と同時に、市民のほうにいろいろな資料を開示していくというような風土をつくっていくということも大事なんだろうなというふうに思っております。

これは、ちょっと話が場違いなのかもしれませんが、将来、例えば、こういうものを集約するような文書館とか、そういうようなお考えはあるんですか。

○小原（茅ヶ崎市立図書館）

市として文書館の構想までは、図書館としては、すいません、そこまでは承知はしていないです。

○佐藤（茅ヶ崎市立図書館長）

今お話ししたとおりなんですが、文書館の建設は、今のところは予定はございませんけれども、34年に歴史文化交流館のほうは今予定をしてございます。図書館資料とは、収蔵資料とはまた別物という形になりますけれども、将来的にはこういった新しい施設との連携と申しましょうか、そういったものは進めてまいりたいなというふうに思っております。

○岩壁委員

どうもありがとうございました。

○影浦（特定非営利活動法人湘南ふじさわシニアネット）

これは一般的な話ですけども、なかなか難しいと思うんですけども、MLA連携というのが最近話題になっているんです。Mはミュージアムなんですね。Lはライブラリーなんです。文書館がアーカイブなんですけれども、非常に大きな、あるいは力のある行政では、そういうところまで進めようとはしていますけれども、これはなかなか簡単にはいかない話だと思います。

○大江委員長

伊藤さん。

○伊藤委員

どうもありがとうございました。

午前中に我々はげんき基金の方々とお話しして、大変感銘深い報告をいただいたんですが、午後は協働事業ということで、少し違った方向だと思うんですね。市民提案型と行政提案型というふうな区分をされているように、行政と市民をつなぐ、メジャーなものマイナーものをつなぐという役割を持った事業だと、私は市民活動推進委員としては思うんですね。副次的な効果なのか、主目的なのか、市民活動というマイノリティの方々にメジャー、マジョリティの方々が行政が近づくと。図書館というのは、一般的にパブリック、MLAの話も出ましたが、そういった役割も担っていると思うんですが、報告の中でよく見えなかったのが、協働してよかった点、委託ではなくて、あるいは直接事業ではなくて、見えてきた点、あるいは今後見えそうな点、市民活動とつながって、そういったものをどういうふうに行政側が、あるいは市民活動側がお考えになっているか、伺いたいと思います。

○小原（茅ヶ崎市立図書館）

12月のときにも少しお話をさせていただいたかと思うんですけども、よくほかの

図書館さんでも資料のデジタル化を委託ですとなると、図書館のほうから「これとこれとこれをデジタル化して公開してください」「はい、よろしくお願いします」ということで、本当にそれだけのことなになってしまうんですけども、今回、協働でできたということは、じゃ、何を市民の方々が、図書館でたくさん持っている資料の中でどれを公開したら皆さんに喜んでいただけるか、役に立つかというのを一から考えながら選んで公開することができた。先ほどちょっと、「茅ヶ崎愛」という言葉もありましたけれども、茅ヶ崎ならではのコンテンツにできたことが、委託ではここまでのことはできなかったであろうなと思っております。感謝しております。

○影浦（特定非営利活動法人湘南ふじさわシニアネット）

同じことかもしれませんが、図書館と私どもの団体、それぞれ得意分野を融合させると。私どもの団体は、IT系の能力が高いんですね。画像を処理したりとか、デジタル化、あと、データベースとか、ホームページの作成とか、そういうのを手広くやっている団体でして、中身がないと、我々の技術も全然生きませんので、そういう意味で、図書館さんのほうからいろいろ貴重な郷土資料、図書館の地下にはこんな資料が眠っていることを初めて気がつきまして、大変いい方向でお互いの力が融合できたと、そう考えております。

○大江委員長

では、ほかの方、いかがでしょうか。まずは北川さんから。

○北川委員

ありがとうございます。このデータ、せっかく集まってきたものをより積極的に茅ヶ崎で生かされるというか、利用されるための手というのは、新しい今年度のほうで何か打っていかれる予定はありますでしょうか。話し合いとか、そういったものが外と設けられるのか。

○小原（茅ヶ崎市立図書館）

この事業を立ち上げるときに、図書館だけではなくて、市の中に、先ほど他課ありますので、文化生涯学習課ですとか、文化資料館を含めた社会教育と、あと、ことしから学校もということで、横のつながりを入れた中で、そういう形でやっていくということの中でやっています。

○大江委員長

草野さん。

○草野委員

完成したシステムを、大体100回ぐらいアクセスして見ました。先ほどの1万5,000回あるうちの100回ぐらいは私が見ている気がいたします。その中でちょっとだけ気になったというか、どうしようとしているのかがちょっと聞きたかったですけれども、カテゴリの中で、今、「工事中」というのが1つあったような気がするんですけども、ああいうものは、次、すぐ期待してよろしいのかなという、あと、もう一つは、高齢者が利用するときに、タブレットで見たんですけども、どうしても拡大する。拡大したんだけど、今度ぼやけてしまうというところがあるんです。そこの辺の改善点等は、何かあるようでしたら教えてください。

○影浦（特定非営利活動法人湘南ふじさわシニアネット）

まず、工事中ということで「昔話・伝説」というテーマのところは未完成だったんですね。先ほどの発表で一番最後にご説明したように、中身は1年目はなかったんですが、皆様の要望としては昔話とか伝説というのが見ていておもしろいと非常に要望が強いんですね。ですから、今年度、2年目の重点のデジタル化という意味で、昔話・伝説に優先度を置いてデジタル化しようという活動になっています。

○小原（茅ヶ崎市立図書館）

1年目にここの部分が充実できなかった理由は著作権の問題でありました。こちらの著作権をとれる見込みが立ちましたので、今回、公開ということに着手できるようになります。

○大江委員長

解像度の点は。

○小林（特定非営利活動法人湘南ふじさわシニアネット）

解像度は、この事業がスタートしたときからそうなんですけれども、図書館のお持ちのスキヤナを使うという前提なんです。正直、慶応大学の先生に言ったら、本当にデジタル化するのだったら何千万もかかると言われたんですけども、それは特殊な解像度のものなので、それは今のスキヤナを使う限りはちょっと難しいと思います。

○草野委員

見て興味があったので、さらに見たいなという思いがあったので、解像度のところだけ要望してみました。

○大江委員長

じゃ、それは直接言ってくださいという感じですね。
時間がまいりましたので、どうしてもという方はどうぞ。

○椎野委員

すいません、お時間だということでございますけれども、先ほど、こちらにも書いてございますけれども、今年度の取り組みというのがありますよね。その中で、今、子どもたちが本離れが進んでいるという中で、小学生向け夏休み自由研究ということで、図書館を使い尽くせと、すばらしいテーマでこれからやってみたいということでございますが、例えば、じゃ、小学生に図書館へ来てほしい、本離れを直すためにはどうしたらいいのかということで、何か考えている手法、こんなふうにしたいんですよというのがあったら教えていただきたいと思います。

○小原（茅ヶ崎市立図書館）

図書館として本離れというのは大変大きな問題になっておりまして、子ども読書活動推進計画とかというものはやっているんですが、このイベントに限って言わせていただきますと、実は、図書館を使うコツみたいなことを中でやっていくんですが、あわせて、図書館の裏側の見学ツアーを入れようかと思っております。普段なかなか入れない。先ほど影浦さんからもお話があった、地下にはこんなに資料があるんだという、普段は入れない裏側もちょっとお見せしますというところで、興味を引けたらなと思っております。

○椎野委員

わくわく感を育てていただけるとありがたいと思います。よろしく願いいたします。

○大江委員長

では、時間がまいりましたので、どうもありがとうございました。（拍手）

○事務局

ありがとうございました。

続きまして、「ハマミーナ魅力UP大作戦」、特定非営利活動法人まちづくりスポット茅ヶ崎様、ご準備よろしく申し上げます。

○柴田（特定非営利活動法人まちづくりスポット茅ヶ崎）

皆様こんにちは。本日、協働推進事業「ハマミーナ魅力UP大作戦」の2年目実施報告をさせていただきます、認定NPO法人まちづくりスポット茅ヶ崎の柴田と申します。よろしく願いいたします

○高藪（文化生涯学習課）

文化生涯学習課の高藪と申します。本日はよろしく申し上げます。

○平本（文化生涯学習課）

同じく文化生涯学習課の平本と申します。よろしく申し上げます

○伊藤（福祉政策課）

福祉政策課の伊藤と申します。よろしく申し上げます。

○柴田（特定非営利活動法人まちづくりスポット茅ヶ崎）

2年を経まして、こういった機会をいただくのは今回3度目になるんですけれども、毎回とても緊張しております。どうぞよろしくお願ひいたします。

この事業は、2015年、茅ヶ崎市南西部に新しくつくられた公共施設ハマミーナを、住民の方と行政が連携して有効に機能させることを目指しまして、まちづくりスポット茅ヶ崎がハブになるべく、ハマミーナ総合案内業務とハマミーナ探検隊、ハマミーナ交流会を実施いたしました。

この3つの事業は、作戦1のほうで細やかな地域の声の収集、作戦2のほうで、そこで集めたニーズや傾向からプログラムを検討した施設見学会と、地域の方が主役になり、アイデアの共有やアクションを起こすための交流会の開催と、3つの事業が相互にリンクすることで、ハマミーナの持つポテンシャルを最大限に引き出し、住んでいる方自らが施設の魅力を発見して、住民主体のまちづくりの拠点になることを願ひ、取り組みを始めました。

「ハマミーナ総合案内」業務は、館内1階、正面玄関のインフォメーションコーナーにて、来館者からのお問い合わせや相談にお答えする業務です。年間245日稼働いたしまして、情報提供件数は3,901件を行っております。

集まった声、市民一人一人の方の声を記録し、集めた情報を文化生涯学習課、福祉政策課の方を中心に、関係各課と毎回定例会を開いて共有をしております。至急性の高い内容については、直接管轄へ届けて、改善などのアクションにつなげていたほか、健康や今後の課題などの分析については、所轄の2課の方と共有することで、地域課題の発見やニーズの掘り起こしを行ってきました。

例えば、高齢者の方の暮らしに関するお悩みや、暮らしに困り事がある当事者の方がこの地域に多いような傾向から、認知症を発症している当事者の方、また家族が安心して暮らせるまちづくりのために、まちぐるみで取り組むということを目的にしたオレンジカフェの開催の支援に取り組んだことや、施設に立ち寄られた方の利便性の向上に、館内で休憩をとることができるような椅子の設置の呼びかけや、フロアガイドの見直しの提案、地域の再開発に関するスケジュールや、施設の移転に関するお問い合わせが多いことから、

正しい情報の収集と提供。

今回の間に市長と市議の選挙が行われたんですけれども、そういった選挙に関するお問い合わせが多く、その中に、ハマミーナはバリアフリーが施されているので、安心して高齢者の方も投票に来れるですとか、買い物や病院帰りに投票に立ち寄れるので、小さなお子さんを連れていても投票に来やすいんですというようなお声をいただいたことから、期日前投票を実施していることをもっと積極的にアピールをすると、浜見平から投票率がアップみたいな形のキャンペーンもできるんじゃないかなというアイデアを出して、皆さんとお話ししたりということを行ってまいりました。

利用の満足度を図る記述のアンケートでは、「利用しやすくなった」という回答が88%、その結果、利用頻度がふえたという回答が59%という結果になっております。

続きまして、施設全体や周辺の見学ガイドをする「ハマミーナ探検隊」業務では、こんなところを詳しく知りたいという各団体の目的を事前にヒアリングしまして、内容をカスタマイズさせて実施を行ってまいりました。

例えば、市内の室田エリアの方から、自分たちのエリアにもコミュニティセンターを設置する場合の参考に、新しい公共施設の姿を見たいということでリクエストをいただきまして、主には生涯学習に関する機能、学びプラザを中心にしたガイドにしました。感想として、まるで茅ヶ崎の副都心のように。同じ施設をつくることは財政的に厳しくても、多世代が集う場所の参考にしたいというような感想をいただいております。

政策立案コンテストに伴うフィールドワークの現場としてハマミーナを選んでいただいた際には、地域住民や民間の力を主体に、行政と連携したまちづくりについて話が聞けたと担当課の方より感想をいただくことができました。

市内の私立小学校3年生の社会科見学の一環として施設見学を行った際には、各施設の案内をするとともに、そこで勤務をしている働く人とのコミュニケーションを充実させた内容で行いました。子どもたちが公共施設で働く大人の仕事の内容を知ること、まちに関心を向けるきっかけづくりを目指し、行いました。

日ごろ施設を活用している人や、これから施設を活用したいと思っている人たちが直接ハマミーナに集まって、お互い顔の見える関係で、思いの共有や、主体的に活用するアイデアを話し合う場として開催した交流会では、2回開催で80名の方が参加しております。

地域の方から「ハマミーナの防災機能について知りたい」という声をいただいておりますので、防災をテーマにした交流会では、思っていたより備蓄がされていた、エリアによる利用制限はあるのかというような質問や、自家発電機の稼働試験に関する提案、賞味期限が迫った備蓄品の試食会を開催してはどうか、などのアイデアが住民の方から挙がったほか、福祉政策課の方が管理する情報展示室の使い方による提案などもありました。

4回目となる交流会では、実際に施設を使用してみたいとか、普段使ったことがない機能を体験してみたいという声を多くいただいておりますので、市民開放デーのような

イメージで音楽室や体育室の体験をプログラムに取り入れたほか、調理室では料理講座を同時開催して、実際に調理室が稼働している状態のイメージ提供を行いました。活発な交流の様子に驚いたというような声や、セクターを超えた取り組みが素晴らしいということで反響をいただいております。

この協働事業で当初の目標だった、まちぐるみでハマミーナの積極活用を行っていきこうというようなことの目標に向けて事業が展開できたほか、この事業を通して、地域の方との接面を日ごろよりも多く持つことができることで、隠れたニーズや地域課題の掘り起こしができました。このことは、エリアマネジメントということをミッションとしたまちづくりスポット茅ヶ崎の活動でもフィードバックしていく部分がとても多くあり、充実した2年間となりました。

○高薮（文化生涯学習課）

最後に、担当課より事業実施前の行政側の課題と実施後の成果と現状についてお話しさせていただきます。

課題としましては、事業実施前は、総合案内では利用者からの質問に対する案内を行っているが、行政側から積極的な情報発信を行っていないという点と、施設内の事業や地域との連携が足りないといった課題がありました。こちらが文化生涯学習課になります。

福祉政策課としましては、情報展示室というスペース、空間の有効活用というところがなされていないという課題を持っておりました。

事業実施後の現状といたしましては、文化生涯学習課では、施設のあらゆる機能や地域のことまでも含めた積極的な情報発信をまちスポさんのほうでしていただくことにより、そちらの声を引き出していただき、改善、利用者の満足度を向上するという流れをうまくつくり上げることができたと考えております。

ちょうどよい距離感でまちスポさんが接していただけるというところから、今後も利用者の皆様の声を反映して、より使いやすく、利用したいと思われるような施設になるように協力して取り組んでいきたいと考えております。

福祉政策課からは、情報展示室については、ハマミーナ交流会等のイベントの中で、いろいろな可能性を市民の声を拾い上げることから聞き出すことができました。

今後におきましては、ボランティアセンター湘南や福祉相談室すみれ等の周知も兼ねた活用方法を検討していきたいと考えております。

担当課からは以上になります。ご清聴ありがとうございました。

○事務局

ありがとうございました。それでは、質疑応答に移ります。大江委員長、よろしくお願ひします。

○大江委員長

それでは、どうぞご質問のある方。中川さん。

○中川副委員長

たくさんのお話を伺って、当初の目的にある「協働で目指したこと」というのが33ページにありますけれども、広報周知の強みを生かして、各政策分野を斜めにつないで、地域の方が受益を実感できるものにするということの目標が、お互いの協力の中で達成できたんじゃないかなというふうに思われます。

今後のお話をお聞きしたいんですけども、この予算額は275万円ということで、ほとんど、250万円ぐらいが人件費になったんですね。細かくここにご報告いただいていますけれども、総合案内、探検隊、交流会、市との定期打ち合わせ、組織内の進捗共有とか、こういうような仕事を今後継続的に続けていくということが今の水準を保つために大変必要だと思うんですけども、今後の事業展開に関してどのように希望するか。あるいは、担当課さんはどう考えていらっしゃるのかということをお伺いしたいと思います。

○柴田（特定非営利活動法人まちづくりスポット茅ヶ崎）

ご質問ありがとうございます。実は、令和元年度からというか、今年度から市から委託事業という形でハマミーナの有効活用を継続的にやらせていただいております。ただ、事業内容は、今回のように3本柱を必ず実施しますということではなくて、総合案内のところは核として継続すると同時に、付随する交流会ですとか、施設見学会なんかは、市民の方のニーズとか、故意に押されれば、適時実施するという形で私どもは考えております。

○平本（文化生涯学習課）

あと、担当課からなんですけれども、今後の事業展開といたしまして、最初のほうに柴田さんからもお話があったんですけども、この事業は、市民の方がハマミーナの魅力に気づいて、その後のステップとして、住民主体で発信したりとかということなんですけれども、今年度以降の事業展開といたしましては、この2年間を通して、情報発信だったり利用者の方の声のすい上げのところはまちスポさんのご協力によってかなりできましたので、今年度以降の展開といたしましては、より市民の方に活動に入ってきていただきまして、改善点などを市民の方と一緒に、例えば、冊子などにしたり、ハマミーナ魅力UP大作戦の報告などを、市民の方にも参加していただき、何かしらの形で公開や還元していきたいと考えております。

○中川副委員長

その仕事はどなたがやることになるわけですか。例えば、冊子をつくったりというと

ころですが、還元していくというか。

○平本（文化生涯学習課）

それは、市民の方、例えば、ワークショップの形式などで一緒につくり上げていくというところができるればいいなと、今、考えております。

○中川副委員長

ワークショップを呼びかけるのは。

○平本（文化生涯学習課）

市のほうとまちスポさんと一緒にやっていくという形で。

○中川副委員長

それが委託の中身になっていく。

○平本（文化生涯学習課）

そこについては今はまだ計画段階ですので。

○伊藤委員

どうもありがとうございました。多角的に事業をやられた報告で、大変な苦労をされたと思います。

先ほど、図書館のデジタルライブラリーで、行政の側から協働事業にしてよかった点ということで表明いただいたんですが、今お聞きすると、ハマミーナに関しては、委託事業に変わったと。先ほどの表明から言いますと、委託事業になると何か失うものがあるかもしれない。あるいは限界があるかもしれない。そういった点に関して、行政の側、どうやって克服していくか、どういうようにお考えなのか、お聞きしたいと思います。

○大江委員長

行政側へのご質問ですが、まちスポのほうからもし何かあれば。言いにくいかもしれませんが、まず、委託費は前よりも下がったわけですね。

○高薮（文化生涯学習課）

そうです。

○大江委員長

そうすると、自由度というか、どうしても縮小傾向ではあると思いますが。

○伊藤委員

答えをやりやすいように申し上げますと、協働事業から学んで、委託事業にするに当たって重要と思った引継点、あるいは事業に関しては、どういうふうに契約等に示されているのでしょうか。

○高薮（文化生涯学習課）

まず、総合案内業務につきましては、協働事業のときから継続しまして、引き続き、毎月の打ち合わせであったりとか、情報提供をいただいて、こういった課題がありましたという連絡は密にとっていくというところは確実に継続していこうと考えております。

ただ、その後、交流イベントと探検隊等は、今まで明確に探検隊と交流会というものを定めておったんですけれども、そのほかの交流イベント事業等の実施ということで契約に定めさせていただきまして、こちらについては、今までの交流会であったり、探検隊の課題というものが出てきているので、より細やかに多くの地域の方々との交流を図れるような形で交流イベントを実施したいと考えておりますので、このような「その他の交流イベント事業等の実施」という書き方をさせていただいて、これからまちスポさんとも打ち合わせしていく中で、最大限交流が積極的に行われるようなイベントを実施していきたいと考えております。

○平本（文化生涯学習課）

補足。やわらかい部分にはなるかもしれないんですけれども、協働というところのいいところは、市民団体の皆様と市のほうが協力してやっていく姿勢というのが一番重要だと思いますので、委託になったからといって、この2年間で作り上げてきたチームワークだったりとか、協力という姿勢は、委託化しても失いたくないし、そこは私たちも大切にして続けていきたいと思っております。

○大江委員長

ということは、来年度以降、また委託の内容についてもそうやって話し合いながら重点を変えていったりということもあり得るということですね。

○柴田（特定非営利活動法人まちづくりスポット茅ヶ崎）

すいません、おまけで。ちょっと大風呂敷になるかもしれないんですけれども、委託になったということは、ほかと協働するという可能性の、足かせじゃないです、幅が広がったというふうにも捉えられるかと思うんですよね。例えば、マップをつくりたいという声が市民の方から上がったときに、じゃ、そのマップをつくるための手助けをしてくれるのが、もしかしたら市内の企業さんかもしれないですし、ほかの市民団体の方かもしれな

いし、そういった連携の幅を広げていく可能性がふえたということに捉えて頑張ろうかなとか、あとは、最後に、さっきお話もさせていただいたんですけども、まちスポの中でもかなり毎日来館者の方とお話はするんですが、総合案内業務を見直させていただくことで、接面が本当に広がったんですね。なので、これを続けていくことで、私たちの事業のほうにもフィードバックできることがかなり広がるんじゃないかなというふうに考えておりますので、委託事業をすばらしい機会をいただいたと思って、引き続き頑張りたいと思っています。

以上です。

○大江委員長

どうもありがとうございました。（拍手）

○事務局

特定非営利活動法人まちづくりスポット茅ヶ崎の皆様、ありがとうございました。

続きまして、「防災への動画活用」、特定非営利活動法人湘南ふじさわシニアネットの皆様、準備、よろしくお願ひします。

○小林（特定非営利活動法人湘南ふじさわシニアネット）

では、「防災への動画活用」事業についてお話しさせていただきます。湘南ふじさわシニアネットの小林です。よろしくお願ひします。

○市川（特定非営利活動法人湘南ふじさわシニアネット）

同じく市川です。よろしくお願ひいたします。

○窪田（防災対策課）

防災対策担当者の窪田です。よろしくお願ひいたします。

○廣瀬（防災対策課）

防災対策課、廣瀬と申します。よろしくお願ひいたします。

○小林（特定非営利活動法人湘南ふじさわシニアネット）

それでは、2年目ですので、昨年と同じように説明させていただきます。

一応、2年目ということで、1年目は「防災資機材編」というのをつくったんですけども、平成30年度は「防災講座編」を製作しました。去年の公開プレゼンテーションのときにも報告会のときにも言われたんですけども、「講座編」のほうに難しいよというお話で、実際そうだったんですけども、そういうこともありまして、動画の企画や内

容について多くの時間を使って、防災対策課さんと14回だったか15回だったか、とにかく打ち合わせばかりやったという気がするんですけども、お互いにいいものをつくろうということで努力したので、スケジュールがかなりおくれってしまったというところがあります。結果的には動画8編も製作できまして、DVDもつくりました。それから、市のホームページを活用した広報を行うことができました。

しかしながら、前回の報告会でも活用が非常に大事だよということを委員の方々からも言われたんですけども、正直なところ、市民の皆さんに見ていただくのはこれからだなというところがあります。ただ、防災リーダー養成研修会のアンケート調査では高い評価をいただいております。

一応、去年と同じように、ユーチューブで観ていただいているんですけども、これは5月17日現在なんですけれども、けさ見たら、大体1日に2件ぐらいだから、きょうで「地震への備え」が280幾つになっていましたけれども、それから、DVDをつくっているんですけども、DVDを配布しているのが150ぐらい。そちらのほうはカウントされないので、実際にはもっと観ていただいていると思います。

それから、前年度分の観ていただいている回数が徐々にふえてきておりまして、こういうものというのは継続的に観ていただかなければいけないと思いますので、そういう意味では役に立っているかなと思います。

それで、防災リーダーの養成の研修会で、今回、51名の方から回答をいただいたんですけども、今後動画を活用してみたいという方は、ほとんどの方、50名ということで、その中で、自分の復習、防災リーダー養成研修会に出てきた復習と、地域の方々に教える。私も実は自治会のメンバーに入ってやった時期にそう思ったんですけども、防災部の担当は、防災リーダー養成研修会に出るんですけども、帰ってきたら、行ってきたよということで、それを十分に話している暇がないんですね。そういうことではこういうDVDも使えるかと思います。

役立つと思われる動画は万遍なくありますけれども、これは多分地域性がありまして、例えば、海沿いの人たちは津波とか火災が非常に関心があるでしょうし、山沿いの人は風水害とかそういうものがあるでしょうから、地域性はあると思います。

そんなところで、動画は実際のを後で観ていただこうと思いますので、先に担当課の方の総括をお願いします。

○窪田（防災対策課）

それでは、防災対策課のほうからこの事業を2カ年実施したこと、主に30年度の実施分について、事業の総括ということでご報告させていただきます。

まず、小林さんのほうからもご説明いただきましたとおり、評価書のほうに記載していた成果目標については、全て達成できたと市のほうでも考えております。しかしながら、事業目的のところにあります、動画を活用して災害時に備えていただくための知識を事前

に習熟していただくような周知啓発については、まだ不十分であるかなというふうにも感じているところになります。

あと、スケジュールの遅れのところにつきましては、当初想定していた動画の作成方法と実際につくった動画の製作のプロセスのところと異なるところがありまして、そのつくり方の違いによって、少しスケジュールが押し寄せになってしまったというところなんです。そのスケジュールが遅れたことに伴いまして、製作の途中経過などを市民の皆様にご覧いただいたりとか、ご意見をいただいたりとかというようなところが不十分なところとして課題として残っているかなと考えております。

それと、動画の製作については、シニアネットの皆さんから、例えば、市の説明がこういったところがわかりづらいとか、こういった説明があるといいとかということでご意見をいただく協働の手法というところを十分に生かすことができたと考えているんですけども、動画を活用するというところについては、先ほどからご説明していますとおり、スケジュールが遅れてしまったことで広報紙に載せるというところだとか、回覧をして地域の皆様に見ていただくというところはできたんですが、実際にもっと議論をして、さらにいい活用方法というところについては、取り組む時間的な余裕がなかったというふうに市のほうでも考えているところになります。

市のほうからの事業総括は以上になります。

○小林（特定非営利活動法人湘南ふじさわシニアネット）

私どももほぼ同じなんですけれども、防災対策課さんも非常に頑張ってください、実は8編うち、シナリオをつくっていただいたのは7人の方につくっていただいた。ほとんど防災対策課さんをあげてつくっていただいたり、シナリオだけじゃなくてスライドをつくり、写真も探してきたり、そういうことで非常に頑張ってくださいました。最終的にはでき上がったということで、それを一部観ていただきます。

（動画）

では、ちょっと長いので。こういうふうに、市民の方にわかりやすく防災対策のシナリオからスライド、それから、写真もみんな著作権の問題もクリアしていただいて、ということで、非常に努力していただいて、私ども、それをいろんな形で編集するというところで、そういうことでスケジュールの遅れを生じましたけれども、うまく完成したと思いますので、よろしく願いいたします。

○事務局

ありがとうございました。それでは、質疑応答に移ります。大江委員長、よろしくお願い致します。

○大江委員長

それでは、どうぞご質問をお願いします。

すぐには出ないようですが。

では、私のほうから。評価の点数を見ますと、68ページの中で一番乖離が大きいと
いいますか、団体と行政との間でちょっと見解が違うのかなというところで、一番上の事
業目標の達成度のところで、行政のほうの評点が低いというふうになっていますが、これ
は、さっきご説明いただいた周知の部分ですかね。その部分が足りないということでこう
いう評価になったのでしょうか。

○窪田（防災対策課）

そうですね。もともと、この評価の基準点が、想定どおりであれば3点というところ
になりますので、その周知啓発の部分が不足しているという意味で、行政のほうでは2点
という評点になっております。

○大江委員長

この点に関しては、この協働事業は終了したわけですがけれども、その後、これからの
何か補足的な活動によってカバーできるというふうにお考えなんでしょうか。

○廣瀬（防災対策課）

2年目の事業ということで、1年目につくったDVDを地域の自主防災組織の皆様にお
送りをして、その使用状況というのは今年度の当初に確認をさせていただきまして、大
体6割から7割ぐらいの地域の団体さんのほうでも活用していただいているというような、
ユーチューブの視聴数には反映されない部分ではあるんですけれども、そういった状況に
なっておりましたので、我々も市民の皆さんにお伺いして、いろいろな防災対策について
お話しする機会もありますので、そういうところでチラシをお配りして周知をしたりだ
とか、多くの市民の皆さんに知っていただくような取り組みは引き続き継続して続けてい
きたいというふうに考えています。

○大江委員長

いかがでしょうか。水島さん。

○小林（特定非営利活動法人湘南ふじさわシニアネット）

ちょっと補足しますと、周知の方法としては、ポスターをつくったり、チラシを大量
につくったり、それで、防災対策課のほうから地域の自主防災組織に全部送っていただ
いたりしていますので、徐々にいろいろ活用していただけると思うんですけれども、期待
しております。

○水島委員

説明ありがとうございました。

前年は機器の使用方法で、今回はその他の「地震への備え」とかあるんですが、防災に関する研修等が通常行われていますが、実施もあったんですが、大体これで一通りのものができたというイメージでよろしいのでしょうか。

○窪田（防災対策課）

市のほうで、例えば、まなび講座であったりとか、防災リーダー養成研修会の中でお話ししているようなものは、今回、製作した動画の中におおよそ盛り込んでいる状態になります。

○大江委員長

じゃ、伊藤さん。

○伊藤委員

どうもありがとうございました。

収支決算書を見ますと、当初予算では通信運搬を1万7,000円用意していたのに、決算ではゼロ。「庁内配布便利用のめため」というふうにお書きになっているんですが、これは市民提案型なので、予測し得なかったものだと思いますが、庁内配布便の利用は協働事業ではとても貴重だと思いますけれども、今まで6年間の間で庁内配布便を利用した事業は初めて見たような気がするんですけれども。こういうふうに明記されたものですね。庁内配布便というのはどういったシステムなのか教えていただければありがたいです。

○窪田（防災対策課）

こちら、庁内の配布便というよりは、市からの郵便物というような形になります。一般の郵便を利用するものになるんですが、お送りする先が個人のご自宅であることが多いので、個人情報保護の観点からも市のほうの郵便を使って郵送させていただいた形です。

○伊藤委員

ほかの事業でも使えそうですか。

○廣瀬（防災対策課）

今回、137の組織に対してお送りするというので、先ほどご説明差し上げたとおり、その一覧をお渡しすることができなかったので、我々のほうで郵送させていただいたというところがございます。また、時間的な部分も差し迫っていたところもあったので、

そういったことも加味して我々のほうで対応させていただいています。

○小林（特定非営利活動法人湘南ふじさわシニアネット）

ちょっと補足しますと、確かにこの1万7,000円の予算のところはゼロになったんですけれども、実は、編集に非常に手間がかかっていまして、工数が非常にふえちゃったんですけれども、それでも、これもやり直しのところなんかは削っちゃってだいぶあれしましたので、そういう点ではトータルとしては予算は変わらなかったんですけれども、ということでご了承ください。

○大江委員長

それでは、どうぞ、岩壁さん。

○岩壁委員

どうもご丁寧な説明ありがとうございました。

こういう認識でよろしいのかなというふうに思うんですが、メール便ですよ。市の。要するに、例えば、自治会長とか自主防災会の会長とか、あるいは教育委員会のもそうだと思うんですが、市内の小・中学校へ送るとか、そういうようなものを活用したと、こういうことですよ。そういう理解でいいですよ。ありがとうございました。

それで、各自治会とか自主防災会のほうにも届いておるんですが、防災訓練とか、あるいは、防災の各地域の講習会とか、そういうところにも大いに活用することによって、防災に対する意識が高まるんだろうとっております。これは、市の広報のほうにも書かれておりましたけれども、できるだけ忘れたところにまた出していただくありがたいなというふうに思います。よろしく申し上げます。

○大江委員長

ほかはいかがでしょう。

それでは、私からも一つ。市民提案型で市民がつくるということで協働事業になったわけですが、1つは、もちろん市民の視点でという。茅ヶ崎市民の視点で茅ヶ崎の防災を考えるという点のメリットがあったと思いますが、もう一つ、これから、少し時間をかけてフィードバックをしていくという点で、この内容でいろいろ学んだ点について、市民側から何かしらレスポンスを受けることができるわけですよ。それは一つの情報になり得るのではないかという気がしますので、この点どういうふうに。活用していただくというのは、学んでいただくが1つあるんですけれども、そのもう一つ先のステップというのはないのかなという気がするんですが、この点はどういうふうにお考えでしょうか。

○廣瀬（防災対策課）

今回、8本の動画を1本のDVDの中におさめたいというような形で、ちょっと縮めている部分が当然あります。一方で、私ども、市民まなび講座ということで、職員が地域の皆さんのところにお伺いして、防災に関することをご説明したりだとか、意見交換したりというようなこともやっておりますので、ユーチューブなりDVDを観た方々がそういったところに声をかけていただいて、もうちょっと深く防災について学びたいだとか、そういったきっかけとしても使っていただける部分はあるのかなと思いますので、当然、DVDを観ていただいて知識を得ていただくことと、あと、それをきっかけにして防災について興味を持っていただいて、もっと知識を深めていただければとか、そういった展開をどんどん続けていければいいのかなというふうに考えております。

○大江委員長

もっと、茅ヶ崎などの地域性がある、さっきのDVDの一番頭にそういうのがありましたけれども、例えば、海岸の津波。というふうに、例えば、DVDの内容が茅ヶ崎市に特化したものであって、また地域性があるって、うちの地域は、この内容で観ると、こういうところが実は問題なんだなと。こういうふうにはできないの？ こういう問題を解決しないと対応ができないんだというようなことが逆に市民側で気づきがあって、そこから何らかの防災対策についての提案があり得るとかというふうに考えられるんですが、そういうのを私はフィードバックとしてという意味で申し上げただけけれども、そういうのをすい上げていくようなお考えはあるんでしょうか。

○廣瀬（防災対策課）

市民の方々から防災対策に関する貴重なご意見、日ごろいただいておりますので、当然そういった内容を踏まえて、こういった説明内容に反映させていただいたりだとか、そういったことは今でもやらせていただいておりますし、先ほど防災リーダー研修というような一例があったんですけれども、そういった講習会の内容もどんどん変えたりもしていますので、なるべくご意見をいただいた中で、よい情報を発信していきたいなというふうには考えています。

○大江委員長

ありがとうございました。

よろしいでしょうか。ほぼ時間になりました。では、どうもありがとうございました。
(拍手)

○事務局

ありがとうございました。

それでは、ここで10分間の休憩に入りたいと思います。次は15時50分から開始

をさせていただきます。

(休 憩)

○事務局

それでは、15時50分になりましたので、再開したいと思います。

先ほどの地震ですが、茅ヶ崎市では震度2となっております。津波の心配はございません。千葉のほうで最大震度5弱ということになっております。緊急地震速報は震度4以上の地域でアラームが鳴るということなんですけれども、たびたび震度2でも鳴ってしまうということがありますので、ご承知おきいただければと思います。

続きまして、「中学生への学習支援事業－わかる喜びを、生きる力に－」。特定非営利活動法人こども応援丸の皆様からの実施報告です。よろしくお祈りいたします。

○津田（特定非営利活動法人こども応援丸）

よろしくお祈りいたします。こども応援丸の代表を務めさせていただいております津田と申します。よろしくお祈りいたします。

○ナカムラ（特定非営利活動法人こども応援丸）

同じくこども応援丸、幹事させていただいておりますナカムラと申します。よろしくお祈りいたします。

○阿曾（学校教育指導課）

学校教育指導課の阿曾と申します。よろしくお祈りいたします。

○青柳（学校教育指導課長）

同じく学校教育指導課長の青柳と申します。よろしくお祈りいたします。

○阿曾（学校教育指導課）

それでは、中学生への学習支援事業ということで、昨年度の取り組みについてご説明をさせていただきます。西浜中学校と鶴が台中学校、2校の取り組みについて、この後お話しします。また、その後、対象者、子どもたちからの声ですとか、今後に向けて、もう少しお話しできればと思います。

まず、西浜中学校も鶴が台中学校も、基本的にやっていることは同じなんですけれども、生徒さんたちが自分でその日学習したい内容ということを決めて、公民館に集まって学習をするという形になっています。それを学習支援のボランティアさんたちが一人一人の生徒の、わからないとか、困ったなというような、そういったニーズに寄り添うという

形で、個別または少人数で支援を行ってきています。

西浜中学校のほうは南湖公民館を利用させていただいています。1行目にありますように、この取り組みの西浜中学校の地域での始まりは平成28年11月。ですので、約2年半、ずっと継続しています。その間、ずっと続けて学習会に参加してくれている生徒さんもいらっしゃいます。

今、西浜中学校のほうでは、年間を通じて週1回の定例の学習会をやっております。これは、休日であろうが、長期休業期間、夏休み等であろうが、休館日でない限りはやっていまして、これは火曜日の実施なんです。休館日の場合はその翌日の水曜日にやっていたりというふうに、いつも同じペースで学習会に参加できるようにということでやっております。

さらに、定期テストの前は、土曜または日曜のところで、対策の学習会を行っています。また、夏休みに学校のほうで学校開催の夏休みの学習会というのがあるんですが、こちらのほうにボランティアさんを派遣するというのもやっております。

鶴が台中学校のほうも基本的にやっていることは同じですが、こちらは昨年度の途中から取り組みを始めたところになります。平成30年度の夏休みから。夏休みの学習会にボランティアさんを派遣してという、その部分からスタートしまして、その後、10月からは、これは隔週1回、2週に一遍の定例の学習会を行ってきました。だんだんペースがつかめてきて、浸透してきた時点で今後回数をふやしていくという方向で今やっております。

また、ボランティアの養成講座というものを開催しております。10月と3月に行いました。これは、ボランティアさんに対して講義を行うような形なんです。生徒さんが安心して学習に取り組んで自信をつけていけるようにするために、こういった関わり方をすればいいか。子どもの自尊感情を育てる接し方などについて講義を行いました。この2回以外にも、新たなボランティアさんの参加があるごとに同様の講座を実施いたしました。

決算については、資料のほうに詳しく載せてありますので、またご覧いただければと思います。

この後、実際にやってみて、子どもたちからどんな声が上がったかというところは、応援丸さんのほうからお話をいただきたいと思います。

○津田（特定非営利活動法人こども応援丸）

じゃ、説明させていただきます。

まず、西浜中学校に限った部分のアンケートの結果を今から発表させていただきたいと思います。

「学習会に参加してよかったと思う」。来てくれた子どもたちのほとんどの子どもたちが「とてもそう思う」というような答えをいただいております。

来てくれて、勉強が確かに、この後も出てくるんですけども、嫌いな子も中にはいるんですね。でも、そういう子たちでも続けて来てくれるような、ある意味では勉強会、ある意味では子どもたちの居場所づくりというようなことを中心に私どもはやらせていただいております。

次は「安心してわからないことが聞ける」。常に子どもたちは、勉強している中で、疑問に思っていること、なんでこういう答えが出てくるのかな、そういうような気持ちかわいてきたときに、安心して講師の方々に聞ける。また、学校からのアンケートの、ここには載っていないんですけども、先生にも今まで質問に来たことがないような子から質問が来たというような答えも返ってきていました。これが一つの、大人と話す、あるいは先生と話すというような会話が常にそこでできていたから、こういうような形ができていくのかなと思っています。

次は「家での学習時間がふえた」。これを見ると82%の子どもたちがある程度ふえているのかなと思っているというようなことなんです。自分が中学時代なんかではちょっと考えられないような数字なんですけども、応援丸みたいなものが、普通の日はどこかでやっているよといっても、多分自分は参加しなかったんじゃないかと思うんですね。特に南湖のほうでは、気持ちがあそこへ行くとすごく落ち着くとか、中には、部活で疲れていて、何も勉強にも手がつかない横で「きょうは先生、勉強しなくてもいい？」なんて言いながら、お母さん先生みたいな人の横に1時間ぐらい寄りかかっているような、安心するところが応援丸にはあるのかなと感じています。

「学校の学習がわかるようになった」。「とてもそう思う」「かなりそう思う」。これも75%ぐらいの子たちがそう思っているんですね。応援丸の勉強の仕方は、主には復習という形でやっているの、とりあえず問題を解かせてみて、自分たちで丸つけをやらせる。応援丸の勉強でやっている中では、間違えても全然恥ずかしくないんだよ。間違えるだけ間違えなさいと。間違えたところをおじさんなりおばさん、お姉さん、お兄さんが教えるから、そこをわかるようにすることが大切なんだ。わからないことをわからないままにしているのがいけないんだよ。ここで間違えることはいくらでも間違えていいんだよというような教え方をしているんですね。そういうようなことで、答えを丸つけしていると、間違えているのに丸をつけるような子は1人もいないんですね。安心して×は×でつける。「もう一回やっごらん」と言うと、もう一回やってもできない。「そんなときは先生に聞きなさい」という形で、一緒に問題を解いてあげるというようなことで勉強を少しずつ進めています。

次は、ちょっと難しい内容なんですけど、「学習や将来の進路について考えるようになった」。これは、私たちの取り組みの中の副題でもあります、中学生に生きる力を与えるというような部分の達成感が少し形になって見えるのかなと思います。応援丸に来て、それこそ1時間半集中して勉強しているわけではありません。普段学校でこんなことがあった、こんな楽しいことがあったよ、あるいは、こんないじめみたいなこと、嫌なことがあ

ったんだ、というような話をしている中で、おじさんもこんなことがあったよ、こんなことがあるんだよ。社会に出てもこんなことがあるんだよ。どんな仕事をやりたい？ どんなことを夢見ているの？ というような話をするような中で、子どもたちは将来のことを少しずつ考えているような、そんな空間でもあります。

常に応援丸というのは、ここに来て何度もお話をさせていただいているとは思いますが、親でも子どもない、友達でもない、斜めの関係をつくっているというんですね。その斜めの関係、いろいろな子どもたちがいます。勉強をうんと取り組みたい子。あるいは、どういうわけかあまり勉強はしたくないんだけど、あそこにおじさん、お姉さん、いつも来てくれて、話し相手になってくれるから来てくれる。友達に近いような斜めの関係から、勉強をしっかりとやりたい。私は、例えば英検の受験に合格したい、あるいは、少しでもいい高校に受かりたいというような子は、上の高校に受かりたいという子は、それなりの先生がいてくれて、マンツーマンでしっかりと教えてくれるようなシステムができています。

そこで、子どもたちからのアンケートの答えがきています。勉強が少しずつわかるようになった。わからなかったことができた瞬間、とてもうれしかった。学習会でやったことがテストで解けてとてもうれしかった。英検に合格ができた。ほかに、おもしろい人がいっぱいいて……。 (終了のベル) ああ、もう終わっちゃいましたね。すいません。

あと、今後に向けてなんですけれども、来年度からはおかげさまで委託事業ということでまた共にやらせていただくようになりました。頑張っていきたいと思っていますので、応援のほど、よろしく願いいたします。

○事務局

ありがとうございました。それでは、質疑応答に移ります。大江委員長、よろしくお願いいたします。

○大江委員長

それでは、ご質問を。どうぞ、石田さん。

○石田委員

ご説明どうもありがとうございました。応援丸さんと学校教育指導課さんとの協働推進事業、とても理解ができて、とてもよかったと思います。特に、この学習会参加をしてとてもよかったという方が94%だったということも、一番の初めのグラフですよ。のことも、私が印象に残ったのは、居場所づくりがよかったというようなことで、とても印象に残りました。

今、西浜中学校さんと鶴が台中学校さんでやられているということなんですけど、こういう事業は私は大好きなんですけれども、これが軌道に乗ったという言い方はちょっと語

弊があるかもしれませんが、まだ茅ヶ崎市内にたくさん中学校がありますけれども、今後の展開とか、希望とかを、夢でも結構なので、お聞かせいただければと。

○津田（特定非営利活動法人こども応援丸）

ありがとうございます。何か、待ってました、みたいな（笑）。

実は、再来月から、先ほど申しあげました鶴が台中学校のほう、今、隔週なんですけど、毎週という形で進めさせていただきます。また西浜と同じように、テスト前勉強会というのを開かせていただきます。

また、秋ぐらいから梅田中学校、正面に教育センターなんです。そちらでの取り組みを考えたい。特に、先生、先ほども市長がいろいろ異動があるんですよというお話があったんですが、鶴が台中学校の教頭先生が運よく梅田中学校の校長先生になれていたというようなことがあるので、この事業のことを大変よくご理解いただけている方だと思いますので、梅田中学校への勉強会を考えています。

そのほかに、これは委託事業とはまた別なんですけど、今、進めている状態なんですけれども、選挙があったときにいろいろ感じたことがあって、選挙のときに、皆さん候補者の方がクーラーを入れろとか、あるいは、給食を中学生みんなに食べさせろというような、票集めの部分かもしれないんですが、おっしゃっているんですね。でも、ちょっと目を向けると、中学生は義務教育なんです。義務教育でありながら、学校へ通えない子どもたちが実はいるんです。その子たちに自分たちは教育を与える機会を与えたい。茅ヶ崎市も「あすなる教室」というのはあるんですけど、4時とか5時ぐらいで終わっちゃうんですね。応援丸は逆に7時から8時半まで開いているんです。週に合わせて2回、梅田が入ると3回になる。そんな中で、そういう子どもたち、もしその場所までお家の方が送り迎えしてくれるなら、一緒に勉強しない？ みんなと混じってというのはなかなか難しい部分なんですけれども、1つの教室を与えて、そこで1対1の勉強、あるいは1対2とかの勉強が進められたらなと思っています。これはなかなか今の取り組みの中で難しい部分ではあるんですけど、それができるような形で、今、委託事業の内容にも盛り込ませていただいております。

以上でよろしいでしょうか。

○石田委員

ありがとうございました。

○大江委員長

じゃ、草野さん。

○草野委員。

中学生にとってはすごくうれしいことを継続されているということ、大変喜ばしいと思っております。この中に1つあったんですけども、一人一人の生徒の多様なニーズに対応した学習機会を与えている。このニーズという捉え方をどのようにして、自分たちが感じたことなのか、生徒さんなのか、学校からなのか、その辺のニーズの捉え方というのを教えていただけますか。

○津田（特定非営利活動法人こども応援丸）

本当に子どもたち、いろんな子どもたちがいるんですね。そのニーズが、例えば、あそこに出ていた英検だとか、あるいは、自分が行きたい高校ですね。トップクラスなのか、あるいは中間ぐらいなのか、それこそお家の事情で、何とか県立高校に入れたい。そういうような子どもたち、直接、常に顔を合わせている中で、居場所というような要素もあるので、子どもたち、そういう悩みとかもどんどん話してくれてくるんですね。そうすると、自分、こういうところに行きたいんだよ、こういうふうにしたいんだよというような、それこそさっきの未来を話す部分というようなことを話してくれるので、じゃ、この先生だと、それこそ今まで中学の先生をやっていたよ、あるいは塾も開いていたよ、そういう先生がまたそれなりの、その子に合わせた問題集をつくってきてくれるんですね。英検なんかも過去問を持ってきてくれたり、あるいはテキストを用意したり、あるいは、こういう問題が過去どここの高校で出たよなんていうと、そういうものをつくってきてくれるので、それなりの個々に合わせた、できるだけ、いろんな、要は角度のある斜めの関係がそこに成り立ってくるわけですね。

だから、中にはまだ1年生というと、勉強って何？ ほわーんとしているような子も来るんですが、そういう子には、それこそ1時間半の中でも10分でも15分でもいいから、集中してちょっと勉強してみようよ。今回、プラスとマイナスを掛けたときはマイナスになるんだよと、きょうはこれだけでもいいから覚えていってくれ。あとは、部活、こんなことがあったよとか、パイプを太くするような時間でつくらせていただいております。

○草野委員

ありがとうございました。

○大江委員長

秦野さん。

○秦野委員

ありがとうございました。子どもの自尊感情を育てる接し方というお話で、まさにそれを実践されているからこそ、子どもたちが安心できる空間になっているんだなというふうに思いました。

私からは1点、収支決算書の72ページの部分で、もし差し支えなければ、NPO活動保険について、保険の対象者の方、目的など、お答えできる範囲でお知らせいただければと思います。

○津田（特定非営利活動法人こども応援丸）

今、子どもたちの部分は市民活動保険みたいな部分で賄われているので、特に入っていないんですけども、今度、自分たちが委託事業という形ではその部分を考えているんですが、今これは、ここの部分の協働推進事業の中では、ボランティアさん、つまり、講師側の部分しか保険に入っていないんですね。例えば、送り迎えのお時間ですとか、車を利用されて来られる、そういうときに、最初、保険に入らないでやっていたんですね。そうすると、その途中で万が一何かあったらどうする？ だから、私、悪いけどできないとか、そういうような方もいらっしゃったので、できるだけ広く、気持ちよくその方に心配、マイナスの部分をつけ加えることなくボランティア活動に参加していただくために、車のことですとか、あるいは行き帰り、あるいは勉強している最中の不意の事故とかがあったときに対応できるような、本当にいわゆるボランティア保険というものが保険屋さんにあったので、それに入らせていただいております。

○草野委員

ありがとうございます。今後、もしかしたら学習ボランティアの方もふえていく可能性があるので、安心して活動できる環境づくりというのは、まさに大事だと思うので、ぜひ委託事業に変わったときにもカバーしていただければいいなと思いました。ありがとうございます。

○大江委員長

椎野さん、短めにどうぞ。

○椎野委員

今、お話もちょっと出たんですけども、こちらの学習ボランティアの養成講座というのは、後継者を育てるという意味ではとても大事なことだなと思って、それで、今こちらのほうには12名と16名ということで、両方合わせて28名の養成講座を受けた方が育っているということなんですけど、これからこういうふうに行くと、今回も梅田中学がふえたということで、多分これからは、こんなにいい授業をやっていると、学校教育課のほうでも「頑張ってるね」ということになると思うので、底力になっていくには、この養成講座というのは非常に大事になるかなと思っているんですね。だから、これからはぜひ、今までは2回ぐらいでしたけれども、今年度もまた少し養成講座をおふやしになって、そういうケアしてくださる指導者をどんどんふやしていただけたらいいかなと思っ

ていますので、今後もこういうものはどんどん発展的に頑張ってやっていただきたいと思っていますので、よろしくお願いいたします。

○津田（特定非営利活動法人こども応援丸）

ありがとうございます。

あと、今のことでちょっとあれなんですけれども、実は、中学生、参加していただくと、何年生で名前、みたいなことで丸を書いていくんですね。3月のときでした。1年、2年、3年、いつものように同じような名前が書いてあるんですけども、名前が書いてあって、4と書いてあるんですね。実はその子は卒業した子だったんです。卒業した子が、今度、私、ボランティアに登録するから、一緒になって勉強させてくださいという子があらわれたんですね。

それと、3月の段階で、小学校6年の子が来ました。実は、その子のうちの前から来ている子が、応援丸に来ていて、ここ、すごい楽しいから、絶対行きなよと呼ばれて誘われて来たというんですね。ことしの西浜のほうは、小学校6年から高校1年の子までいるような状態で4月を迎えられたんですね。とてもいい団体になってきて、子どもたちにとっては本当に居場所がいい場所なのかなと思っています。

○椎野委員

ありがとうございます。

○大江委員長

それでは、時間です。ありがとうございました。（拍手）

○事務局

続きまして、「茅ヶ崎市の未来を考える政策コンテスト」、特定非営利活動法人ドットジェイピーの皆様、ご準備よろしくお願いいたします。

○大澤（企画経営課）

それでは、「茅ヶ崎市の未来を考える政策コンテスト」の事業についてご説明させていただきます。茅ヶ崎市企画経営課の大澤と申します。

○秋本（特定非営利活動法人ドットジェイピー）

NPO法人ドットジェイピーの秋本と申します。よろしくお願いいたします。

○大澤（企画経営課）

平成30年度の若者を対象として政策立案コンテストのほうを開催させていただきます

した。若者たちの行政や政治への関心を高めてもらうことを目的に開催しております。

平成30年度の参加者人数、出場者数としましては、32名7チーム、観覧者数としては35名の方に参加いただいた状況です。

大きなイベントの流れとしましては、キックオフを9月8日に開催しまして、茅ヶ崎のまちのことを簡単に説明させてもらって、チーム内で情報の共有をしてもらいました。

それから、9月17日には、まちあるき。市内各所をバスで訪問しまして、いろんなまちのことを見ていただいて、茅ヶ崎の理解を深めてもらいました。

それから、中間チェック。11月には、立案してきた政策、温めてきた政策を模擬発表してもらって、ブラッシュアップの機会を設けました。

11月に決勝という、この流れで実施しまして、この流れ自体は、1年目と同じような流れで開催させてもらっています。今回、2年目ですので、今回の報告では、1年目と大きく内容を、少しやり方を変えた点ですとか、1年目のときと比べた実績の違いとか、そういったことを中心に、ドットジェイピーの秋本さんのほうからご報告させていただきます。

○秋本（特定非営利活動法人ドットジェイピー）

よろしく願いいたします。

昨年と大きく変えたところは、まず募集対象年齢。昨年までですと18歳以上から大学、高校卒業以上ということだったんですけれども、ことしは高校生を対象に含めると、出場者が拡大できるようにということを意図しました。

実際に高校生の募集に関しては、高校のほうに、例えばチラシ投げっぱなしということではなくて、高校さんに直接課の方にご訪問いただいて、募集の協力を仰ぎました。

それから、昨年度のご指摘の中でも、若い人といったときに、それは社会人も含むであろうから、社会人の人も参加できるようにということだったので、ことし、市民活動団体の方にも改めてご案内、去年はメールだけだったんですけれども、ご案内させていただいて、ご説明をさせていただきました。

もう一つは、SNSを活用して、特にこれは観覧者の募集が、昨年、観覧者が少なかった。決勝を観に来てくれた一般の市民の方が少なかったということがありましたので、出場者の発表の様子をユーチューブでごくごく短く、いわゆるユーチューバー然とした感じで、ちょっとおもしろおかしい感じのやつも含めて撮影したものを公開いたしました。

それから、出場者に配布したテキストなんですけれども、昨年度よりもことしの全体的な指導方針としては、去年は若い人たちがやりたいことを、あまり足かせをはめることなく、やりたいように語ってくれるようなことで、中には一部突飛だけど、モノレールをつくるみたいな案もあったんですけれども、ことしは総合計画の作成も近いので、より具体的な案が出るようにということでも、キックオフの冒頭から、ことしはモノレールをつくるとか言わないでくれ、みたいなことを出場者に言って、かなり具体的に指導ができる

な結果も96%とかなり高い数値が出ております。また、参加者の感想の中には、自分たち若者の意見に親身に耳を傾けてくださる方が茅ヶ崎市に多くいて、新しいことにも寛容な雰囲気があったというような感想を寄せてくれた方がいました。実際、なかなか自分たちでは直接積極的に触れ合うような機会がなかった。けれども、こういう機会を得て、そういったことに気づけたということが非常にいいきっかけづくにはなったのかなということで、非常にうれしく感じました。

こういった成果が出たのも、ドットジェイピーさんの政策立案に向けたノウハウですとか、参加者への、出場者にすごく親身にフォロー体制をつくってくれていたの、その辺が非常に大きかったのかなと思ひまして、一緒にやらせていただいたこの2年間、協働事業としてやらせていただいたことに大変感謝しております。

ただ、一方、課題としまして、参加者数、やはりここなんですけれども、31名、観覧者数が35名ということで、若者に広く意識づけをしていきたいなということを考えると、この事業のやり方では限界があるのかなということで、これから先は、コンテストというやり方は一回お休みさせていただいて、新しい事業立て、手法というのを考えていきたいかなと思っています。

実際、高校を回らせていただいたときも、主権者教育というのをやっていかなければいけないという雰囲気の中で、ものすごい関心を持ってくださった高校さんは非常に多かったんですけれども、文化祭があったりですとか、修学旅行とぶつかっちゃったりですとか、日程ありきのこのやり方ですとなかなか限界があるのかなということで、その辺は個々に対応できるような形でやり方を変えていきたいと思っています。

以上です。ご清聴ありがとうございました。

○事務局

ありがとうございました。それでは、質疑応答に移ります。大江委員長、よろしくお願ひします。

○大江委員長

じゃ、伊藤さん。

○伊藤委員

どうもありがとうございました。日本の社会での政策形成、政策提言を、市職員、あるいは政治家以外からつくり出していくという努力は、非常に大変だと思います。その2つに依存している現状で困難に考えられてドットジェイピーも成立したんだと思うんですが、一番大きな問題点は、おそらくインセンティブだと思うんです。政策提言しても、それが実現するというインセンティブがないと、ほかの多くの事業と同じ分野の事業と、課題の事業と同じで、ただ空理空論を述べるだけではだめなんだと思いますね。私はそう思

うんですけれども。したがって、コンテストじゃなくて、かつてサンケイアドベンチャー スカラシップというのがありました。応募すればそれが実現すると。実現する方向性に行くということ、ドットジェイピーさんも、あるいは茅ヶ崎市も、茅ヶ崎の市議会の方も寛容に見守ることが必要、あるいはそういった具体的な仕掛けをつくる必要があると思うんですね。私はそう思うんですが、お2方はどういうふうに思っていますでしょうか。

○秋本（特定非営利活動法人ドットジェイピー）

採用されるか問題というのはずっと抱えていて、よいものが出れば採用するよということが前提でやっているんですけれども、よいものが出るかどうかという、よいものかどうかの判断基準が、結局優勝したことがいいかという、そこは乖離していて、お客さんの35人の投票によって決めるというルールでやっているのです、そうすると、行政側から見て、それがニーズと合っているかどうかというのは全く別問題になってしまうというのが構造的に抱えている問題であります。

出場者側の意識で申しますと、ニーズはさまざま、単に35人に注目されて優勝したいんだという人も来ますし、2カ月間必死で締め切りで考えたということで満足を得る子もいますし、やっぱり採用されないじゃんという方も、全く伊藤さんがおっしゃるようになっているんですね。そのニーズをどういうふうにくみ上げていくかなんですけれども、多分改善策があるとすれば、あらかじめワニイシューに絞ってしまっ、来年度以降、何か続くんだとすれば、完全に、これについてアイデアをくれ。くれたからにはやるというふうに決めざるを得ないと思うので、これを相当変形版みたいなことになれば、コンテストという形じゃなくてやりたいなと思っています。曖昧な回答ですが、ご指摘は全くそのとおりだと僕も思っています。

○大澤（企画経営課）

茅ヶ崎市としてもそういうことはずっと課題とは思ってしまっ、集客していく上、関心を深めていってもらい上での一つの課題だとは思っています。なので、今回の政策コンテストでは、もちろん出ていただいた政策一つ一つは庁内で大きく周知をしましたがけれども、それ以上に企画経営課としては、先ほど総合計画というお話をさせていただきましたけれども、今、今後10年の茅ヶ崎を考えていく上で、どんなまちだったらいのかというのを広く市民の方とワークショップ等をしながら、いろいろ意見をいただいているところなんです。今回の政策コンテストも、その辺、理想のまちというのは何だろうというところに主眼を置かせていただいて、そこをすごく皆さんには考えていただいたんです。若者のそういった、やっぱり人が大事だよなというところの意見が多かったんですけれども、そういった意見は総合計画のほうにも反映させていただきたいと思っています。

今後、今回の政策コンテストも含め、多分今のお話は、全ての、先ほどずっと言っ

きた市民ワークショップ、いろいろな市民の方との話し合いの中でいろいろいただくご意見、やっぱり多いんですね。そういったことというのは、今回はこのような形でやりましたけれども、今後も市としてもいいきっかけというか、何かないかというのは考えていきたいと思っています。

以上です。

○大江委員長

ほかはいかがでしょうか。あとお一方ぐらい。よろしいでしょうか。

○秋本（特定非営利活動法人ドットジェイピー）

伊藤さんのご質問からの回答というか、市のニーズとアウトプットの関係性で言いますと、市のニーズ、先ほど、課の大澤さんからあったように、総合計画に向けて具体的な課題の解決法というよりは、若い人はどんな茅ヶ崎市がいいと思っているの？みたいな空気を知りたかったということがあります。若い人たちから出ていた空気を総論的に言うと、すごくにぎやかにして遊興施設がいっぱいあってわいわいやるというよりは、この緩やかな暮らしやすい感じで多世代が仲よくしている感じをずっと維持していくにはどうしたらいいかというふうに、ほぼ全てのチームがその方向で考えていました。

ちなみに、優勝したところは、シニアの人が仕事を持ち、仕事というのは、主に農業を持ちながら、つくった作物を市内の市で運用しているバスの中で販売をして、それで収益をあげて、さらに持続できればいいな。それを生きがいと、シニアが自分の収入を得ることが両立できればいいなという案が、これは出場している若い世代からも、観覧している多世代の方からも、つまり、32+35なので、67人のみんなが「いいじゃん」と言っていたので、そういうニーズに対してそういうアウトプットがあったというのが補足です。

○大江委員長

一応これで最後なんですけれども、今の、私も大学教員をやっていたので、すごく感じるんですけども、今は本当にネットの時代なので、ネットを触って、いいアイデアを持ってくるといというのは、大学生は大得意なんです。今の野菜バスみたいなやつは既にあるわけですよ。だから、そういうのを取ってきて、茅ヶ崎に当てはめたな、みたいな提案かもしれないんですね。でも、それがそうかどうかというのは、ちゃんと確かめなければいけないけれども、そういうチェックまで審査側がやるのかというと、できないですよ。実際には。そういう意味でも、今はコンテストであまりモチベーションが高くない学生たちを集めて、若い人の意見が大事だといというのは、それはそうかもしれないけれども、そこに本当にお金をやるのかといというのは、当初から私は言っていますけれども、考えなければいけないことですよ。やるからには、だから、やり方としては、実際、文教大学の学生

さんが多いのだったら、文教大学の研究室なり、あるいは学校、大学そのものと連携をして、きちっと授業に組み入れてもらってやるとかいうことでないと、本人にとってもいい学習の機会だったり、市にとってもいいアイデアだったり、提言だったりというふうにはなかなかならないかなというふうに思います。

野菜バスのことはご存じでしたか。

○秋本（特定非営利活動法人ドットジェイピー）

野菜バスがよそでやられているかどうかは知りませんが、実際に彼らが茅ヶ崎市の人の話を聞きながらつくったということは、毎週レポートを出させているので、確認しています。

○大江委員長

わかりました。

それでは、時間になりました。どうもありがとうございました。

○事務局

ありがとうございました。これで質疑応答を終了いたします。（拍手）

続きまして、「市制70周年茅ヶ崎市民文化会館改修工事期間を活用したメモリアル事業」、特定非営利活動法人3F Community Serviceの皆様、準備よろしくお願ひいたします。

○飯塚（文化生涯学習課）

それでは、3F Community Serviceと茅ヶ崎市文化生涯学習課の協働事業「市制70周年茅ヶ崎市民文化会館改修工事期間を活用したメモリアル事業」についてご報告をさせていただきます。

こちら、Community Serviceの内田代表理事です。

文化生涯学習課の高橋と、私が飯塚です。よろしくお願ひいたします。

着座にて失礼いたします。

初めに市民文化会館についてですが、平成30年10月1日月曜日に、1年7カ月の休館期間を経てリニューアルオープンをいたしました。今回の事業は、市の文化芸術の拠点である市民文化会館の長期休暇がもたらしてしまう市民の文化芸術への関心の低下を課題と捉え、その対策として、これまで市民文化会館の記憶を、市民の方々の中でこれまでの記憶を止めるとともに、新たな文化会館の未来につなげていくということを目指しまして、作品で表現をするとともに、作品を通してリニューアルオープンについて広く周知することを目的として実施をいたしました。

事業結果につきましては、これから内田代表理事にご報告いただきますが、今回の事

業で制作した作品は、設置期間中に市民文化会館にご覧いただいた方ならどなたでも観て、触れて、写真を撮って楽しんでいただけるようなものでございまして、多くの市民の方々にご参加いただくことができました。

一人一人の心の中にある、過去の市民文化会館での思い出とか、その記憶を、その作品を通して思い起こすきっかけをつくって、これからの文化会館への期待ですとか、感じる思いを高めることができたと思っております。

この事業は、これまでの文化会館が培ってきた文化・歴史の継承の大事な部分を担うことができたと感じております。

また、今回の作品の制作と展示につきましては、市民文化会館の指定管理者である公益財団法人茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団のほうにご協力をいただいたほか、3 F Community Serviceと茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団による展示、ワークショップ企画との連携を図ったことが事業の相乗効果を高めることにつながったと思っております。

それでは、30年度に行った事業につきまして、内田さんよりご説明いただきます。

○内田（NPO法人3 F Community Service）

よろしく申し上げます。

アーティストの人たちと色々なミーティングを上で、今回の展示のコンセプトをイビルドとし、イビルド、改築だったりとか、新しくものをしていくというコンセプトのもと、文化会館で使われていた箱うまに、アーティスト一人一人がペイントをし、このようなフォトブースのイメージをつくらうというところで話をしてまとまりました。

参加していただいた茅ヶ崎市にゆかりのあるアーティストたちです。かおかおパンダ、yuyu、Toyama Sakiko、tomio、佐々木貴行、KYOCO MORI、RUMI BOB、MM、佐川友星の10人のアーティストに参加を依頼しました。こちらがそのアーティストたちが箱うまにペイントをしていただいたものになります。

こちらが市民文化会館で使われていたパネルに、オープニングのときに来ていただいたお客さんにアーティストが一筆自分たちで書いていただいたものになります。

箱うまはこのように組み立てました。前にある椅子は、以前、文化会館で使われていた椅子になります。

こちらは、先ほどのパネルをくり抜いて、このような茅ヶ崎にゆかりのある「タゲリ」という鳥がいるんですけども、そのタゲリをモチーフとして、このようなプロダクトをつくりました。

このタゲリと箱うまと椅子を、このような形でフォトブースとしてプロダクトを完成させました。

これからお見せするんですけども、3 F Community Serviceのフェイスブックのページで、この動画を載せたところ、1カ月で1万7,838回再生されているんですけども、この動画を一度お見せします。

(動画)

これが先ほどのパネルになります。

このパネルをこのようにくり抜いて、組み立てて、このようなタゲリをつくりました。こちらはワークショップのほうですね。

ありがとうございます。

○飯塚（文化生涯学習課）

今見ていただいた映像のうち、こちらの作品のほうが今回の協働事業でつくったものになりまして、ワークショップ等は指定管理者の文化・スポーツ振興財団さんと3Fさんのほうで行った事業でございまして、そちらとの連携を図る形で事業展開をさせていただきました。

上についている鳥4つは、そちらのワークショップでつくったもので、アーティストさんですとか、来場されていた方ですとか、私や高橋のほうも参加して一緒につくったものになります。

本来、当初、予定していたところでは、市役所の市民プラザのほうで1週間程度、作品、ワークショップ等につくって展示をするということを想定していたんですけども、より効果的に事業を展開するという視点ですとか、多くの人に観ていただきたい、参加していただきたいというところから、今回、作品のほうは当初予定の1階の市役所のプラザではなくて、大ホールのホワイエの前のほうに設置をすることにいたしました。こちらのほうも設置期間を2カ月程度とりまして、たくさんの方に触れていただいて、写真を撮っていただいたというところになります。

当初、ワークショップのほうもうちの事業としても想定していたところでしたが、少し事業形態を変更しまして、ワークショップをほかの事業で3Fさんのほうに展開をしてもらい、そことの連携を図るという形で事業を実施したところです。

協働事業評価書の中にございますとおり、アーティストさんの人数のほうは、参加者の目標値7名と設定していたところ、10名の方にご参加いただきました。

受益者評価の目標値としましては、ワークショップのほうは、今回、先ほど説明した事情で、こちらのほうの指標に乗っかってくるような数字ではないということになっておりますが、実際に来館者の多くの方にご参加いただけた状況でございます。

観覧者数のほうは1万人としておりますが、こちらのほうは、来館者数のデータが、今、年次報告書を文化会館のほうでまとめておりまして、月ごとの数字が正確なものが出ていないところですが、2カ月間設置をしたというところで、大ホールのホワイエの前なので、ホワイエに入られる方は全員ご覧いただけるというところで、6カ月、10月オープンから3月末までに12万5,000人の方にご来場いただけていますので、単純計算でおおよそ2カ月間で最低で4万人はそこを通過している。来館されている方はもっとたくさんいらっしゃいますので、それだけの方にご覧いただけて、事業をPRできたというところ

ろでございました。

説明は、すいません、少し過ぎてしまいましたが、以上でございます。ご清聴ありがとうございます。

○事務局

ありがとうございました。それでは、質疑応答に移ります。大江委員長、よろしくお願いいたします。

○大江委員長

それでは、どうぞお願いします。

今回のものは、ちょっと聞き逃したかもしれませんが、全体の予算は非常に小さくて、ほかの財団ですか、管理者のコラボレーションによって進めたということなんですね。

○飯塚（文化生涯学習課）

はい。

○大江委員長

もともと1年目の事業のほうにウエイトがあるということでこの事業が始まったわけですけれども、2年間を通して何かお感じになったことがあれば、短めにお聞かせいただけますでしょうか。お願いします。

○内田（NPO法人3F Community Service）

この展示中に僕も何回かずっと文化会館にいたときがあったんですけれども、来るお客さんが高齢の方が多くて、その高齢の方たちは、こういうアートをあまり普段触れたりとか観たことがない方が多くて、話してみたら、こういうのもおもしろいねという意見が多くて、茅ヶ崎は水彩画の協会があるのか、水彩画がすごく強いらしく、水彩画の展示は、いっぱいいろいろなところでやっているらしいんですね。ただ、こういうのはあまりやっていないので、おもしろいという意見が多かったのと、あと、ワークショップもわりと若い方向けに僕らは考えたんですけれども、60代、70代の方も参加してくれたりとか、私もやりたいというような意見が多くて、そこはすごくおもしろかったです。

○大江委員長

伊藤さん。

○伊藤委員

どうもありがとうございました。

協働事業の宿命もしくは特筆として、大きな枠組みの中で小さな、あるいは一部を実行するという事業だと思っただけですね。この事業に関しては特にそれが顕著で、先ほど大江委員長がおっしゃったように、ほんのわずかな部分があつて、大きな構図。その大きいか小さいかというの見方によりますし、金額で考えるのか、気構えで考えるのか、いろいろとあると思っただけですが、それは、行政の側にとつても、市民活動の側にとつてもすごく難しいマネジメントだと思っただけですね。

そこで、今後こういう協働事業の中で、こういう問題がふえてくると思っただけですね。特に、行政の予算が少なくなつてくる現在、協働事業は、そういった形でもつて行うことがすごく多くなつてくる。そこで、両者が、今回感じられた課題、あるいは問題点、あるいは阻害要因、どういったふうにお考えだつたか、この後に続く人たちのためにここで報告していただけたらと思つた。

○高橋（文化生涯学習課）

直接的なお答えになるか、あれなんです、今回、この協働事業、アーティストさんとの協働という形で、特にことしに関しては一番僕らが悩んだところは、一体どのようにこの作品を残していただくかというところ、つくっていただくかというところになつて、実際、文化会館の廃材を使って、お客様、来られる方に文化会館に思い出のある方にどういふふう感じていただくかというところ、それは私たちも考えて。ただ、私たちは文化会館であるとか、そういった行政の施設を管理する立場でもあつて、その中でできること、できないことというところ、その中でどこまでつくれるのかというところは、いつも、それは予算とかということとは別に、私たちも単純に文化行政というところを担う身として、そこに一番苦勞もしましたし、そこが醍醐味でもあつたかなというふうに思つた。私も何回か協働事業でほかの市民団体ともやらせていただいたんですけども、アーティストさんという、新しいといひますか、またちょっと違つたスキルといひますか、才能を持つた方々とういふことができたことは、非常におもしろかつたと思つたし、またこういふ機会が広がっていくことも、市民活動というか、市民協働の可能性を広げるんじゃないかなと思つた。

○大江委員長

どうぞ。

○中川副委員長

今おっしゃつていただいたように、アーティストさんとの協働事業的なものがすごくふえてきているんですけども、106ページにあるように、初めての協働事業で思つたようにいかなかつたということと、2年目は、お互いのできることを、得意な部分の相互理解ができたという、この相互理解のところというものが、市民と役所というよりは、芸術家と

いうか、アーティストと行政という協働関係というのは結構難しいものがあるのかなと思いますけれども、相互理解ができたポイントみたいなものというのは、アーティストさんのほうから見るとどんな感じでしたか。

○内田（NPO法人3F Community Service）

アーティストの人たちは、自分たちで社会の何かを変えたりとか、社会の何かを解決したいという思いはあるものの、意外にそんなにみんな社会の仕組みの細かいところまでは知らない方が多いんですね。それは普段自分の作品だったりとか、そういうものにしか興味がないので、そこに集中している分、じゃ、市役所の仕事がどういう仕事で、どう進んでいるのかというのは彼らは知らなくて、市役所側だったりとかは、段階があって決定事項がふえていくというものに対して、アーティストは、やるか、やらないか、みたいな、その二択ですぐ決める人たちなので、そこが彼らとしては、何でなの、何でなのというところがすごく多かったんですけども、そこは、僕が間に入って、こういうふうに市役所の人たちも動いていて、こういうふううまく話が進むように段階を踏んでいるから、そこは理解してくれという話をすれば、彼らは、あ、そういうことなのね、こういうふうに事業は進んでいるんだねということは理解をしてくれてというのが、2年目はスムーズでした。1年目は、そこがあまりみんなわかっていないので、だめと言われたら、何でだめなの、すぐやれるじゃん、みたいな反応がすごく多くて、直接的に自分たちがすぐアクションできるから、その間にあるプロセスはあまり関係なくて、一をすぐ十にしたがるというところがすごく多かったんですけども、2年目はわりと段階を踏んでやるということを彼らも理解してくれてやってくれたので、2年間、トラブルもなく、いい感じに終わりました。

○大江委員長

それでは、ちょうど時間になりました。どうもありがとうございました。（拍手）

○事務局

以上で予定しておりました7事業の報告が終了いたしました。ありがとうございました。

この後、総括質疑として全体での意見交換を行います。各団体の皆様、担当課の皆様は、そのまま席にてお待ちください。

それでは、総括質疑に移ります。大江委員長、よろしくお願いたします。

○大江委員長

時間がちょっと、私の進行が悪くて、押してというか、過ぎておりますが、本来ならば50分に終わるところを、今、終わりの時間で、この総括質疑は18分という時間を予

定していたんですが、皆様のご都合にもよりますけれども、とりあえず10分ぐらいの5時ぐらいまでお時間をいただければと思います。

総括質疑は、こうして複数の事業の報告を聞く中で、何か共通して、こういう問題があるなというか、こういうテーマで少し話し合いたいなということを出して話し合うという機会でございます。ですので、ご自身の関わったプロジェクト以外にもながめながら、何かこれからの茅ヶ崎の市民活動に反映させていきたいということについてご発言いただければありがたいというふうに思います。委員側からでも、ここにお集まりの方々からでも結構ですので、どうぞご発言をお願いいたします。

伊藤さん。

○伊藤委員

どうもありがとうございます。

私はこの委員を務めて6年になるんですが、2つここでお聞きしたいことがあります。1つは非常に小さいことなんですが、全体の問題につながるとってお聞きします。午前中、げんき基金の報告があったんですが、筆記通訳という方々が報告されたんですが、きょう、6年前に比べてパワーポイントの習熟度が格段に皆さんが上がっているというふうに、午前も午後も感じているんですね。ずっと幾つかチェックしているんですが、皆さん、色覚異常、色のユニバーサルについて、今回、どこまで配慮されているかお聞きしたいんですね。

それは、筆記通訳の方もそうなんですけれども、初めて実践に移して気づいたことがある。マイノリティがマイノリティ同士が学び合う、マイナーな 이슈をマイナーな 이슈で感じる。午後は、メジャーなマジョリティの市行政が、皆さんマイナーなマイノリティな 이슈を持っている市民活動から学ぶ場、あるいは逆の場だと思うんですが、色覚異常に対するパワーポイントの使い方、ことしになって、たしかパワーポイントのフリーソフトとして、色覚異常でもわかる色の使い方というのが発表されたと思うんですけども、それは、例えば、非常時であるとか、マイナーな方にとっては非常に重要なことなので、その辺について、きょう、皆さんのお話の中でお互いに気づき合ったこと、こういうマイナーな 이슈、マイノリティな 이슈を気がつかなかったことが、色覚異常を含めておありになるかどうか、あるいは注意した点があるかどうか、どなたでも結構ですので、お聞きしたいと思います。

○大江委員長

ちょっと伊藤さん、色覚異常という問題に絞ってしまいますと、ちょっとテーマが小さ過ぎるので、もう少し広げた形でご提案いただけると。

○伊藤委員

要するに、もう少し皆さんがほかのグループに対して、ほかの対象者を広げるために、支援者をふやすためにも、どういった課題がほかの事業の報告を聞いて気づいたかということをお聞きしたいと思います。

○大江委員長

どんなことでも結構ですので、お気づきの点をご発言いただければと思います。いかがでしょうか。どなたからでも。どうぞ、応援丸さん。

○ナカムラ（特定非営利活動法人こども応援丸）

こども応援丸のナカムラでございます。

私からちょっと申し上げたいことは、協働推進事業に関わるというか、うちで学習支援として取り扱っているボランティアに関してなんですけれども、確かに大々的に何か大きなことだとか、金額をかけてだとか、そういうこともあると思うんですけれども、例えば、目の前で泣いている女の子がいたら「どうしたの？」と声をかけるとか、転んでいる人がいたら「大丈夫ですか？」と声をかける。それを積み重ねることだと思うんですよ。確かに事業としてお金をかけるということもそうなんですけれども、それにつながることは、先ほど色覚異常のお話を聞いたんですけれども、何か困っている人の延長線上に色覚異常の方がいたり、障害者の方がいると思えば、何か困っている人がいたら、自分のできるところで、できる範囲でやらせていただくというのが、そういうことが必要だと思うんですよ。

それでまた、色覚異常と先ほど専門的な詳しい、私はわからないんですけれども、ここで、どこから線引きして異常だとか、何か困っていることの延長線上にあると思うので、自分のできる範囲でやれるところからやっていくのが基本的な精神として大事なんじゃないかなと思いました。

○伊藤委員

色覚以上は17人に1人いるはずなんですね。統計的には。こういったパワーポイント一つをとっても、皆さんが赤をお使いになったり、あるいは青をお使いになったり、その区別ができない方が、あるいは子どもがいるはずなんですね。皆さんは弱者と対面していますので、子どもだったら、自分が色覚異常だということを表現できない子がいるはずなんです。あるいは、高齢者にとってそういうことは恥ずかしい。だから言えない。そこに対するまなざし、思いやりがないと、こういった事業というのは成り立たないと思うので申し上げたんですけれども。

○ナカムラ（特定非営利活動法人こども応援丸）

引き続き、それに関して私からご意見を申し上げさせていただきますけれども、例え

ば、年輩の方とか、申し上げづらいんですが、例えば、弱者としたならば、座席に腰掛ける若い方を、なんで座っているんだろう、譲ってくれないのかなと思っている方もいらっしやって、私も電車で通勤しているときにイライラされている年輩の方を見ると、でも、その若い方は若い方で、サラリーマンの方の疲れている方とかも実際にいるわけですよ。一方で、変な話、今、若い方は将来年金が受け取れない、自分の生活、家族を支えていっばいいっぱいなのに、席を譲ってくれないという年輩の方にプレッシャーをかけられて、その年輩の方のほうが優遇されている方もいるのに、通勤時間の1時間半、2時間かけて、なんで年輩の人がこの方の目の前にいてプレッシャーをかけられなければいけないんだ。どっちが弱者だと。強いとか弱いとか、上とか下とか、力関係とか、そういうのじゃなくて、その人が年上だろうが、年下だろうが、男性だろうが、女性だろうが、肌の色がどうだろうがというところで、確かに赤だとか青だとか、色覚異常だとか、異常と言ってしまえばそれまでですし、どこからどこまで線引きしたらというのがあると思うんですけども、そこまで専門的な知識、人数の割合とかもそうなんですけれども、とにかく自分のできる範囲で、自分の知り得る範囲で、困っている方を助けられたというふうに思います。以上です。

○大江委員長

ありがとうございます。

最後に挨拶をしなければいけなくて、そこで言うかどうか迷っていたところなんですけれども、この話でちょっと申し上げますと、行政は対象者を明確にして、そこに一番ある種合理性がある効率的なサービスを提供するという。そして、それが主に税金を使ってやるのにふさわしいということ、ある意味国全体で決めたりしながらやっていくということで対応するんですが、そういう形で対応することが一番その解決にとっていいかという、必ずそうでもないということを補完する意味での市民活動とか、あるいは市民協働ということがあるかと思うんですね。

例えば、さっきの僕が言ったアートベースのことが好きというか、ここでずっといろいろ見せていただいて、きょう午前中もそうだったんですけども、解決の手段として全然想定されていないことが、実は解決手段として結構有効であるというようなことが起きていて、芸術、アートに携わっている人たちがわりとストレートにそここのところにアプローチしようとしているという感じも持っているんですね。

例えば、きょうの最後の中で、子どもたちや、おっしやったように高齢者の人たちも、参加するワークショップのところに入ってくるということで、実際に制作している現場の映像がありましたけれども、ああいう参加の仕方が、実はさっきおっしやったように、人々が壁をつくっているような問題について、わりとそれをすっとなくしていくような場面をつくる力があったりというふうなことがあると思うんですね。

そういうことを意識的にかなりやっているのが、横浜のBankART1929というNPOで、

そこの代表の池田さんという人は、「アートって何ですか？」と聞かれると、「それは赤ちゃんのようなものだよ」というふうに答えるんだと言っていますけれども、つまり、赤ん坊がいると、みんなが「あ、笑った、笑った」と言って喜ぶとか、つまり、赤ん坊がいるだけでその周りにいる人たちが、ある壁を乗り越えると言うのはちょっと大げさですけども、なごむ。そういうような存在としてアートはあるんだということだとすると、そういう力をどういうふうに新しいチャンネルをつくって、福祉の問題とか、差別の問題とか、いろいろなところにつなげるかということができるような感じがして、多分そういうところに気がついている人たちが少しふえてきているんだなという感じがするんですね。

だから、市民活動というものが何か直接的に行政ができない問題を解決するぞというふうな形の旧来型の市民活動のアプローチとはちょっと違ってきているんじゃないかというふうに思うんですけども、そういうところはわりとマイクロだとか小さいとかというキーワードを使いながら表現されているのかなというふうに思っていますが、その辺はどうなのかなということをやっと会場の方にも投げかけてみたいと思うんですが、いかがでしょうか。

どうぞ。

○柴田（特定非営利活動法人まちづくりスポット茅ヶ崎）

お話ししている内容にあまりかみ合っていなかったら大変申しわけないんですけども、私たち、報告の中の一つで、ハマミーナが期日前投票の会場になっていたんですね。期日前投票の会場、市内3カ所のうちの1つがハマミーナだったんです。受付のお声を聞いているときに、例えば、小さなお子さんを連れていて、当日、投票に行くのがすごく負担で億劫になっちゃうんだけど、ハマミーナみたいところに投票所があれば、その後すぐ子どもも遊ばせられるから行きやすいとか、あとは、ご高齢の方が、診療所に通院に来るついでで来ましたと。本当の投票会場は別の場所なんだけれども、わざわざ期日前をやって、ハマミーナに来ましたという声も実は多くいただいたんですね。

そもそもあそこの施設はユニバーサルデザインみたいなことも取り入れていると思うんですけども、改めて地域の方の声を聞いて、あ、そういうことだったんだというふうに気がつくことが多かったんです。普段声を届けにくい方たち、属性の方たちが、市民参加の入り口の投票というものを使って、自分たちの声を生かしていくというのはすごく大事なことなんだなということを改めて今回気がつきました。

冗談じゃないんですけども、浜見平エリアから投票率アップというキャンペーンをしようというのもおもしろいかなというふうに思っているんです。私たちは、アートというところとは普段の活動はちょっと離れてはいるんですけども、市民の方の参加の入り口をデザインするということでは、まだまだやれることはあると思っているので、今回の、今いただいたご意見も励みに、もっともっと参加のデザインをしていきたいなというふうに思いました。

すいません、長くなって。ありがとうございます。

○大江委員長

ありがとうございます。

確かにそうですね。期日前投票というのは、別に予定があるから行くんじゃないで、通常の、つまり、フォーマルな形で決まっているものの持っている何かバリアがあるんですよね。それを避けようとしているという側面はありますよね。

フォーマルなものがいろいろでき上がってきちゃっているということの、それはとてもいい目標に向かってやってきたことではあるんだけど、かえって、それがあつて種息苦しきとか、壁をつくるとか、そういうことにつながつてきてしまつていて側面があるところを、少しもみほぐしていかないといけないという感じになつていてかなという気がしますね。

中川さん。

○中川副委員長

協働事業を実施されている市民団体及び行政職員の方たちが一堂に集まつていらつしゃるので、ちょっとお聞きしたいのは、もう協働事業はこりごりだというふうなことを考えていらつしゃるか、それとも、これはまだまだ可能性があつて、一生懸命相互理解を進めて、相乗効果を生み出すものだというふうに思われるか。私も、ちょっと古いですけども、協働事業をつくつていた、仕事としてやつていた経験があるものですから、そんなことを聞いてみたいなと思つながら、今年度も委員をやるものですから、協働事業の改善点とか、あるいは、これはいい点だというふうなことをお聞きしたいなと思つますけれども、もう時間がないですかね。

○大江委員長

主に行政の方、いかがでしょうか。

○平本（文化生涯学習課）

文化生涯学習課の平本です。

私は2年間ハマミーナ魅力UP大作戦に取り組ませていただいて、後者の今後可能性を感じるというほうを感じています。というのも、ハマミーナ交流会とかを何回もやつていく中だったり、総合案内とか、例えば、私たちがお話をすると、対市、みたいな形で、あまり言い方はよくないかもしれないんですけども、ただ自分たちが思つている行政の思いというか、そういうところで話があまり発展しないようなケースは結構いろんなところであるんですけども、交流会とかでも、まちスポの皆さんたちが市民の目線というか、民間の目線として、先ほどの発表でもあつたんですけども、ちょうどいい距離感で話し

ていてくれるからこそ、市民の方の本音をすい上げられるのかなというのをすごい感じているので、協働だからこそ、そういういい方向性に発展できたのかなというふうに思っております。

○大江委員長

市民活動サポートセンター。

○益永（市民活動サポートセンター）

益永と申します。市民活動サポートセンターの運営をしております、中間支援ですが、私のNPOサポートちがさき自身も、協働推進事業に取り組んだことがあります。協働推進事業というのは、役所の制度や仕組みの中ではちょっとやり切れないところを、NPOが持っているニーズと一緒に取組めることなので、お互いに気づくというのが、お互いのそれぞれの得意なことを持ち寄って、単独では解決できないことを解決できて、それが市民の中に返って行ってよかったなというような、お互いにやってよかったなというようなところを確かめ合えるよさがあるのかなと思っているんですけども、協働推進事業を2年終わって、それが委託になって、かつて協働推進事業が終わった委託は、協働委託という言い方をされていて、いわゆる下請け感があるというのか、これこれやりなさいとって言われたことをそのまま受けるんじゃなくて、必要なことは何なのか、自分たちの得意なことを生かしてやれるとあったところの余地を残しながらやれる協働があったような気がするんですけども、今の制度の中では、委託になって、それがどんどん厳しい財政の中で、お金がなくなっちゃったから、突然、協働から委託になった事業が打ち切られてしまっていて、受益者である市民たちがとても残念に思ったり、困ったりしているというようなことが現状では起きています。

なので、委託になる先のことを考えたら、協働もチャレンジできないかなというふうになってしまうのはすごく残念だと思いますので、本当に協働がふさわしいかどうか、それはお金の問題だけではなくて、何かちょっとした、例えば、場所を優先的に使えるような配慮がされるとかといったような仕組みを新たに考えるとか、あるいは、市民活動団体の組織運営力をもっと支援をする形で、違う形で解決できるようなこともあるのかなと思うので、今の協働のあり方、協働の2年の先のどんな形でそれが受益者である市民にとって本当にいい形で発展していくのかどうかは、もう一回原点に立ち戻って考えていただけるといいのかなと思います。

それから、私はきょう、伊藤さんのおっしゃった発言ですごく心に残ったのは、私たち市民活動の中間支援は、やっぱりマイノリティですね。自分の力ではどんなに努力してもどうにもならない方たちを見捨てておけない、ほうっておけなくて市民活動団体の方たちが動いています。それで、それは、お金がなければ自分たちで時間もお金も持ち寄ってやって行って、そのことに別に何か不平不満も言わなくて、誰かが喜んでもらったらうれ

しいな。何とか少しでも役になったらよかったなと思う方たちによって、いろんな社会の幸せなことが実現していくんだなというふうに思うと、この制度を使って解決しようと思う人にとっては、やはり使いやすい制度に改善してってもらいたいなと。ちょっと何を言っているのかわからなくなってしまいました。少し協働の制度そのものを見直していただける機会かなと思って、お願いしたいと思います。

○大江委員長

秦野さん、どうぞ。

○秦野委員

今の益永さんの発言を受けて、きょう、実は大江先生にもお話ししながら、この場で提案させていただこうと思っていたんですが、協働推進事業が始まって10年間たって、いろんな活動の事例が集まってきている中で、情報が集まるハブというか、よかったことも悪かったこともストックして、情報を共有できるような仕組みというものがそろそろ必要かなというふうに私は感じています。

それは、今、益永さんがおっしゃったような、誰かが喜んでもらえることに寄り添って進めていくために必要だし、今後、協働推進事業に取り組む人たちが歩いていく上での道しるべにつながるんじゃないかなというふうに思っています。

なので、例えば、これは1つ提案なんです。協働推進事業を実施の経験がある団体の方を対象に、一度アンケート調査だったり、ヒアリング調査だったりということを取り組みながら、協働推進事業の制度のあり方をもう一度検証できたらなと思いますし、同時に、協働推進事業後、私たちまちづくりスポット茅ヶ崎も委託事業に切り替わりましたが、その後の団体や担当課のフォローする体制が、今のところはきちんと構築されていないのが現状だと思うので、そういった困り事や悩み事も相談できる受け皿があったらいいな。受益者負担がいいのか、協賛がいいのか、税金を使って取り組んでいくべきなのか、そういったことも受け皿として何か相談できる体制をつくる上でも、一度、団体には検証なり、何か知る、検証できる機会をつくれるといいなと思っています。

以上です。

○大江委員長

ありがとうございました。

時間がだいぶ過ぎてしまいましたので、これで言い残したことはないということであれば、閉めさせていただきますが、よろしいでしょうか。

僕は内田さんに声をかけましたが、答えは後でまた伺うと思いますので、よろしくお願ひします。

それでは、最後に簡単にご挨拶ということで、きょうは本当に長時間ありがとうございます。

いました。さっき伊藤さんから、任期がこれで終わるということで、私もきょうというか、この評価をまとめた会議が来週の火曜日にあつて、それで最後なんですけれども、6年間やってきて、この間、市民活動推進課のスタッフの皆さん、非常に熱心にずっとこれを支えてくださって、そして、協働事業の2年間の後にどうするかという受け皿の部分も整備をするのに非常に尽力をしてくださいました。

その結果として、続けるべきものは続けるということでの道が開かれてきたわけなんですけれども、逆に、そのことがまた見直すべき一つの課題にもなっているというご発言もあったかと思います。常に行政の仕組みというのは見直していかなければいけませんし、特に、市民活動に関する行政の仕組みというのはそうしたことを宿命的に背負っているのかなというふうに思いますので、今年度以降、また新しい体制でこの委員会が続いていくわけなんですけれども、今、いろんな方からご提案があったようなテーマについて、ずっと検討していただければなというふうに思っています。

この茅ヶ崎という場で、私は茅ヶ崎市民じゃないんですけれども、比較的小さな市でやっている中で、具体的な場所とか空間とかというものと、それから、そういうところを一つのハブといいますか、拠点としてでき上がってくるネットワーク、関係性というものが、こういう市のレベルであるからこそ、それが重なって、ネットワークと場所が離れている場合も結構あるわけなんですけれども、場所というのに結びついていることが関係性をうまく動かしていくということにつながっているような気がするんですね。そういうところを意識しながら、市民活動、市民活動推進ということをやっていく必要があるんだなというふうに思いました。

場所があると、それは下手すると、誰かが占有してしまったりとか、場所をめぐる争いなんかも起きたりするんですけれども、そこを上手にマネジメントすれば、場所が持つ力というのは非常に強く発揮されるんじゃないか。ハマミーナのまちスポを見ていてもそういう感じがしますし、そういうことが一つのテーマになっていくかもしれないというふうに思っております。

それでは、以上で私のご挨拶を終了させていただきます。本当に長時間ありがとうございました。

では、事務局にお返しします。

○事務局

ありがとうございました。

以上をもちまして、平成30年度実施事業協働推進事業実施報告会を閉会いたします。

会場出口、真ん中の出口から市民活動げんき基金の募金箱を設置しております。もし皆様よかったら、できる範囲で誰かを助ける市民活動に応援いただけるという方がいらっしやいましたら、ご協力いただければ幸いです。

本日は長時間にわたりありがとうございました。（拍手）

委員長署名 大江 守之

委員署名 秦野 拓也

委員署名 北川 哲也
